宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第55集

枯木ヶ迫遺跡

希望ヶ丘西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

2002

宮崎県埋蔵文化財センター

『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第55集』「枯木ヶ迫遺跡」(2002 宮崎県埋蔵文化財センター)

正　誤　表

訂　正　個　所	誤	正
67・68頁　図54上　土坑番号	(文字なし)	ＳＣ６

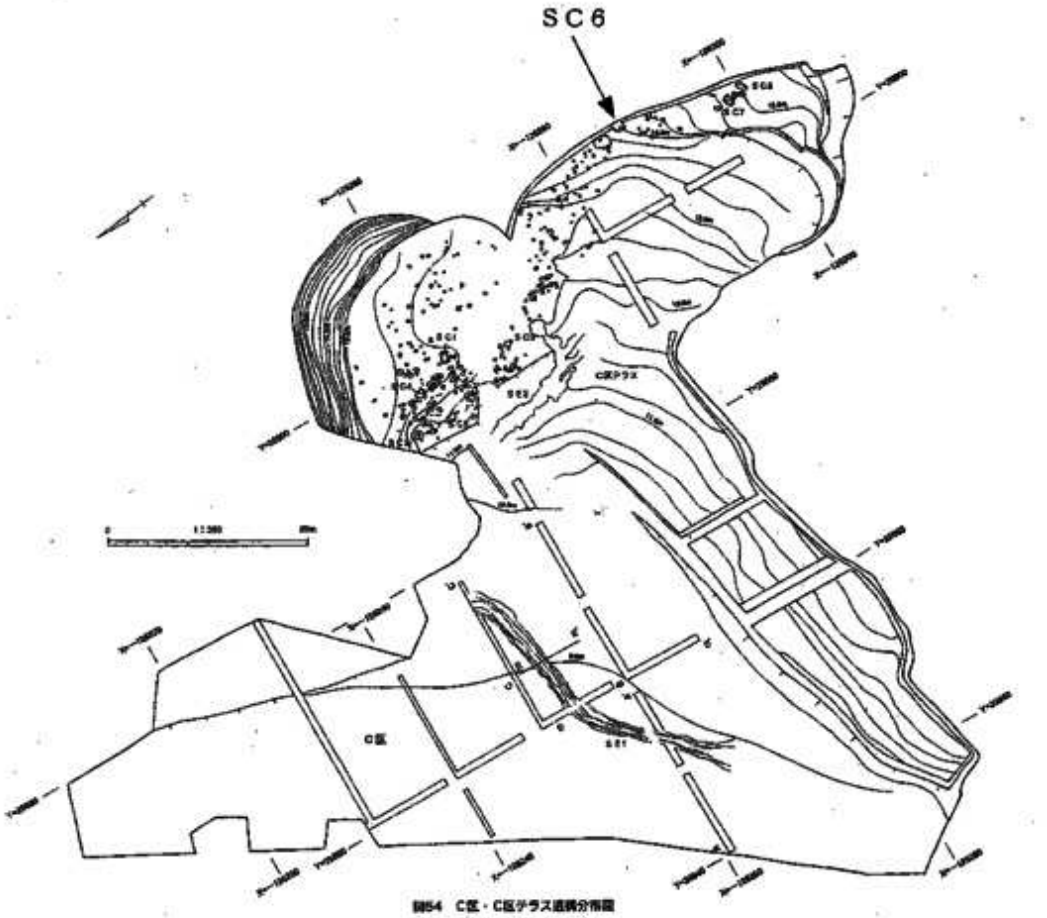


図54　C区・C区テラス遺構分布図

枯木ヶ迫遺跡

（かれきがさこ）

希望ヶ丘西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

2002

宮崎県埋蔵文化財センター

枯木ヶ迫遺跡

序

宮崎県教育委員会では、希望ヶ丘西土地区画整理事業に伴い、枯木ヶ迫遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

枯木ヶ迫遺跡は、縄文時代から近世に至る遺構・遺物を伴う複合遺跡で、特に古墳時代の住居跡が多く検出されました。また、古代の溝状遺構や近世墓等も確認され、溝状遺構からは木製の皿や硯(すずり)等が出土いたしました。

こうした先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料が得られたことは、大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成14年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　矢野　剛

例　言

1．本書は、宮崎県住宅供給公社の希望ヶ丘西土地区画整理事業に伴い実施された、宮崎県宮崎市所在の枯木ヶ迫遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書の執筆は、第Ⅰ章第１節は県教育庁文化課 重山郁子が、第Ⅰ章第２節、第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章は高橋浩子が行った。また、編集は高橋が行った。

3．第Ⅲ章第３節（４）ＳＣ６出土の動物遺存体については、岡山理科大学の沖田絵麻氏から玉稿を賜った。

4．遺構の実測等は主に高橋、廣田晶子が行い、青山尚友、鈴木健二、下田代清海、高橋誠、和田理啓、米久田真二、島田正浩、谷口武範、福田泰典、日高広人、甲斐貴充、柳田晴子、日高敬子、松本茂ほか発掘作業員の協力を得た。地形測量及び石塔群・近世墓の実測は、業者に委託し、写真測量図化を行った。

5．遺物の整理は宮崎県埋蔵文化財センターにて、整理作業員の補助のもと高橋が行った。一部石器実測及びトレースは業者に委託した。

6．陶磁器類については、九州陶磁文化館の家田淳一氏にご教示を頂いた。

7．石材鑑定は一部を松田清孝（宮崎県埋蔵文化財センター）の教示を得た。

8．自然科学分析、出土木製品の処理及び樹種同定については業者に委託した。

9．土層断面および土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に拠る。

10．本書に使用した方位は主に磁北である。座標は国土座標第Ⅱ系に拠る。レベルは海抜絶対高である。

11．本書に使用した写真は高橋、廣田が撮影し、空中写真撮影については業者に委託して行った。

12．本書に使用した遺跡位置図及び周辺地形図は、国土地理院発行の５万分の１図と宮崎県住宅供給公社作成の５百分の１図をもとに作成した。

13．本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

竪穴式住居跡…ＳＡ　掘立柱建物跡…ＳＢ　土坑…ＳＣ　溝状遺構…ＳＥ　ピット…Ｐ

14．記録類や出土遺物は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査の組織 …… 1

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　遺跡の位置と環境 …… 2

第２節　遺跡の層序 …… 4

第３節　調査の経過 …… 6

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　A区の調査

（1）縄文時代の遺物 …… 9

（2）弥生時代から古墳時代の遺構と遺物

竪穴式住居跡 …… 9

土坑 …… 40

遺構外出土の遺物 …… 43

（3）歴史時代の遺構と遺物

竪穴式住居跡 …… 45

土坑 …… 46

遺構外出土の遺物 …… 46

石塔群 …… 50

（4）時期不明の遺構と遺物

土坑 …… 60

ピット（P）群と出土遺物 …… 60

掘建柱建物跡 …… 60

畝状遺構 …… 64

第２節　B区の調査 …… 65

第３節　C区とC区テラスの調査

（1）水田跡とはたけ跡について …… 66

（2）縄文時代の遺物 …… 66

（3）弥生時代から古墳時代の遺物 …… 66

（4）歴史時代の遺構と遺物

(古代から中世)

溝状遺構 …… 72

遺構外出土の遺物 …… 79

(近世)

土坑 …… 85

ＳＣ６出土の動物遺存体 …… 88
溝状遺構 …… 90
遺構外出土の遺物 …… 95
（５）時期不明の遺構と遺物
土坑 …… 100
ピット群 …… 100
第４節　Ｄ区の調査
（１）弥生時代から古墳時代の遺物
遺構外出土の遺物 …… 103
（２）歴史時代の遺構と遺物
（古代から中世）
遺構外出土の遺物 …… 106
（近世）
墓石について …… 106
１号墓坑 …… 106
遺構外出土の遺物 …… 109
第５節　石器 …… 110
第Ⅳ章　まとめ …… 115

挿図目次

図１　遺跡位置図 …… 3
図２　各地区基本土層略図 …… 5
図３　グリッド配置図 …… 7
図４　遺跡周辺地形図 …… 8
図５　縄文土器実測図 …… 10
図６　Ａ・①区遺構分布図 …… 11
図７　ＳＡ１遺構実測図 …… 13
図８　ＳＡ１出土遺物実測図 …… 14
図９　ＳＡ２遺構実測図 …… 15
図10　ＳＡ２出土遺物実測図 …… 16
図11　ＳＡ３遺構実測図 …… 17
図12　ＳＡ３出土遺物実測図 …… 18
図13　ＳＡ４遺構実測図 …… 19
図14　ＳＡ４出土遺物実測図 …… 20
図15　ＳＡ５遺構実測図 …… 21
図16　ＳＡ５出土遺物実測図（１） …… 22
図17　ＳＡ５出土遺物実測図（２） …… 23
図18　ＳＡ７遺構実測図 …… 24
図19　ＳＡ７出土遺物実測図（１） …… 25
図20　ＳＡ７出土遺物実測図（２） …… 26
図21　ＳＡ８遺構実測図 …… 28
図22　ＳＡ８出土遺物実測図 …… 29
図23　ＳＡ９・ＳＣ６遺構及び
出土遺物実測図 …… 30
図24　ＳＡ10遺構実測図 …… 32
図25　ＳＡ10出土遺物実測図 …… 33
図26　ＳＡ11・15遺構及び
出土遺物実測図 …… 34
図27　ＳＡ12遺構実測図 …… 35
図28　ＳＡ12出土遺物実測図 …… 36
図29　ＳＡ13遺構実測図 …… 37
図30　ＳＡ13出土遺物実測図（１） …… 38

図31　ＳＡ13出土遺物実測図（２）…… 39
図32　ＳＡ13出土遺物実測図（３）…… 40
図33　ＳＡ14遺構・吊土遺物実測図…… 41
図34　Ａ・①区ＳＣ５遺構・出土遺物
実測図…… 42
図35　Ａ・①区遺構外出土遺物実測図
（弥生～古墳時代）…… 44
図36　Ａ・①区遺構外出土遺物実測図
（古墳時代）…… 45
図37　ＳＡ６遺構実測図…… 46
図38　ＳＡ６出土遺物実測図…… 47
図39　Ａ・①区ＳＣ３遺構・出土遺物
実測図…… 48
図40　Ａ・①区遺構外出土遺物実測図
（古代～中世）…… 49
図41　Ａ・②区石塔群実測図…… 51
図42　Ａ・③区石塔群実測図…… 53
図43　石塔実測図（１）…… 54
図44　石塔実測図（２）…… 55
図45　石塔実測図（３）…… 56
図46　石塔実測図（４）…… 57
図47　石塔実測図（５）…… 58
図48　石塔実測図（６）…… 59
図49　Ａ・①区ＳＣ１遺構・吊土遺物及び
ＳＣ２遺構実測図…… 61
図50　Ａ・①区ＳＣ４遺構及び
ピット出土遺物実測図…… 62
図51　ＳＢ１遺構及びＳＢ２遺構
・出土遺物実測図…… 63
図52　畝状遺構１実測図…… 64
図53　Ｂ区地形図…… 65
図54　Ｃ区・Ｃ区テラス遺構分布図…… 67
図55　Ｃ区水田層土層断面図…… 69
図56　Ｃ区・Ｃ区テラス遺構外出土遺物
実測図（弥生～古墳時代）…… 71
図57　Ｃ区・Ｃ区テラス遺構外出土遺物
実測図（古墳時代）…… 72
図58　ＳＥ１遺構実測図…… 73
図59　ＳＥ１出土遺物実測図（１）…… 74
図60　ＳＥ１吊土遺物実測図（２）…… 75
図61　ＳＥ１出土木製品実測図（１）…… 76
図62　ＳＥ１吊土木製品実測図（２）…… 77
図63　ＳＥ１出土石製品実測図…… 78
図64　Ｃ区・Ｃ区テラス遺構外出土遺物
実測図（古代１）…… 80
図65　Ｃ区・Ｃ区テラス遺構外出土遺物
実測図（古代２）…… 81
図66　Ｃ区・Ｃ区テラス遺構外出十十師器
実測図（古代～中世）…… 82
図67　Ｃ区・Ｃ区テラス遺構外出上須恵器
実測図（古墳～中世）…… 83
図68　Ｃ区・Ｃ区テラス遺構外出土遺物
実測図（古代～中世）…… 84
図69　Ｃ区・Ｃ区テラス遺構外出土陶磁器
実測図（古代～中世）…… 85
図70　Ｃ区テラスＳＣ３遺構実測図…… 86
図71　Ｃ区テラスＳＣ３出土遺物実測図…… 87
図72　Ｃ区テラスＳＣ６遺構実測図…… 88
図73　ＳＥ２遺構実測図…… 91
図74　ＳＥ２出土遺物実測図（１）…… 92
図75　ＳＥ２出土遺物実測図（２）…… 93
図76　ＳＥ２出土遺物実測図（３）…… 94
図77　Ｃ区・Ｃ区テラス遺構外出土遺物
実測図（近世１）…… 97
図78　Ｃ区・Ｃ区テラス遺構外出土遺物
実測図（近世２）…… 98
図79　Ｃ区・Ｃ区テラス遺構外出土遺物
実測図（近世３）…… 99
図80　Ｃ区テラスＳＣ１・２遺構実測図…… 101
図81　Ｃ区テラスＳＣ４遺構・出土遺物及び
ＳＣ５・７・８遺構実測図…… 102
図82　Ｃ区テラスピット出土遺物実測図…… 103
図83　Ｄ区遺構分布図…… 104
図84　Ｄ区遺構外出土遺物実測図（弥生～中世）…… 105

図85　近世墓群実測図 ……107
図86　1号墓坑及び出土遺物実測図 ……108
図87　D区遺構外出土遺物実測図（近世）
　　及び遺跡出土銭貨拓影 ……109
図88　石器実測図（1） ……111
図89　石器実測図（2） ……112
図90　石器実測図（3） ……113
図91　石器実測図（4） ……114

表目次

表1　出土資料同定表（動物遺存体） …… 89
表2　縄文土器観察表 ……119
表3　土器観察表（1）～（20） ……119
表4　土錘計測表 ……138
表5　石器計測表（1）・（2） ……139
表6　銭貨一覧表 ……141
表7　石塔類計測表 ……141

図版目次

図版1　A・①区全景／C区ＳＥ1
図版2　A・②区石塔群／歴史時代の出土遺物
図版3　縄文土器／ＳＡ1
図版4　ＳＡ2／ＳＡ1・2出土遺物
図版5　ＳＡ3／ＳＡ4
図版6　ＳＡ3・4出土遺物／ＳＡ5
図版7　ＳＡ5埋甕／ＳＡ5出土遺物
図版8　ＳＡ7／ＳＡ7出土遺物
図版9　ＳＡ8／ＳＡ8出土遺物
図版10　ＳＡ9・10／ＳＡ11・15
図版11　ＳＡ12／ＳＡ9・10・12、ＳＣ6出土遺物
図版12　ＳＡ13／ＳＡ13遺物出土状況
図版13　ＳＡ13出土遺物／A・①区遺構外出土石包丁
図版14　A・①区ＳＣ5／A・①区ＳＣ5出土遺物
図版15　A・①区弥生～古墳時代の遺構外出土遺物／ＳＡ6
図版16　A・①区ＳＣ3／ＳＡ6出土遺物／A・①区ＳＣ3
　　出土遺物／A・①区古代～中世の遺構外出土遺物
図版17　A・②区石塔群（1）／A・②区石塔群（2）
図版18　A・③区石塔群／A・①区ＳＣ1
図版19　畝状遺構1／畝状遺構1土層断面
図版20　C区・C区テラス弥生～古墳時代の遺構外出土
　　遺物／C区ＳＥ1
図版21　C区ＳＥ1木杭出土状況／C区ＳＥ1砧出土状
　　況
図版22　C区ＳＥ1出土土師器／C区ＳＥ1出土須恵器
図版23　C区ＳＥ1出土木製品／C区・C区テラス古代
　　～中世の遺構外出土遺物
図版24　C区・C区テラス出土緑釉陶器・白磁・青磁／
　　C区テラスＳＣ3
図版25　C区テラスＳＣ3出土遺物／C区テラスＳＥ2
図版26　C区テラスＳＥ2出土遺物（1）／C区テラス
　　ＳＥ2出土遺物（2）
図版27　C区・C区テラス遺構外出土遺物／D区遺構外
　　出土遺物
図版28　D区近世墓群／D区1号墓坑上墓石／D区1号
　　墓坑／D区1号墓坑出土遺物／遺跡一括遺物
　　（銭貨）

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

宮崎県住宅供給公社では、希望ヶ丘西土地区画整理事業に伴って宅地造成を行うことを計画し、平成５年５月、計画地内の文化財の有無について照会があった。県文化課による現地踏査の結果、２ヶ所で文化財の所在が確認された（A地区＝市位遺跡、B地区＝枯木ヶ迫遺跡）。協議の結果、市位遺跡については平成６年度内に発掘調査を行うこと、枯木ヶ迫遺跡については平成10年度以降に調査を行うこととなった。

これにより、平成７年１月に市位遺跡の調査に着手し、平成７年３月31日までを第１次調査、５月８日から第２次調査を実施した。平成７年８月１日から９月19日まで実施した第３次調査で市位遺跡の調査を終了し、平成８年３月に報告書を刊行した。

枯木ヶ迫遺跡は、平成９年４月１日付けで発掘調査依頼が住宅供給公社から県文化課へ提出された。これを受けて、平成10年５月20日に試掘調査を実施した。

平成10年９月28日付けで宮崎県住宅供給公社理事長と宮崎県知事の間で、発掘調査の業務委託契約が締結され、平成10年10月５日から平成11年３月31日まで、発掘調査が実施された。

第２節　調査の組織

調査（平成10年度）　調査主体　宮崎県教育委員会
宮崎県埋蔵文化財センター

所長	田中　守
副所長	江口　京子
庶務係長	児玉　和昭
調査第二係長	青山　尚友
同　主査	谷口　武範（調整担当）
同　主事	久木田浩子（調査担当）
同　調査員	廣田　晶子（調査担当）
試掘・事業調整担当	重山　郁子（県教育委員会文化課）

整理（平成13年度）　宮崎県埋蔵文化財センター

所長	矢野　剛
副所長兼総務課長	菊地　茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務課総務係長	亀井　維子
調査第二課調査第三係長	菅付　和樹
調査第二課調査第四係長	永友　良典
調査第一課調査第一係主任主事	高橋　浩子（整理担当）
事業調整担当	松林　豊樹（県教育委員会文化課）

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　遺跡の位置と環境（図１・４）

枯木ヶ迫遺跡は、宮崎市大字郡司分字深坪に所在する。

本遺跡は宮崎市の南部、日向灘の海岸線から西へ約３㎞に位置し、平野部に向かい西から東へと舌状に延びる低位丘陵の先端部付近に立地する。丘陵は谷により開析され、細い尾根状をなしている。調査地は、約９ｍの低地谷部と約30ｍの丘陵地で、その比高差は約21ｍを測る。

本遺跡の小谷を挟んだ東側丘陵上には、弥生時代から古代の竪穴住居跡８軒のほか大量の弥生・古代の土器を出土した市位遺跡が立地している。南東の丘陵上には、弥生時代から古墳時代の遺物が散布する西田第一・第二遺跡、奈良時代の須恵器を生産したとされる松ヶ迫窯跡、溝状遺構や平安時代の土師器を出土した榎木田遺跡・平田遺跡がある。谷を挟んだ南西側の丘陵には、辻遺跡・須田木遺跡・若宮田遺跡が立地している。辻遺跡からは前平式・吉田式・塞ノ神式といった縄文早期の土器群が、須田木遺跡では、下剥峰式・塞ノ神土器が出土し、縄文時代早期の集石遺構172基やカマドを持つ平安時代の住居跡などが検出されている。

これまで付近で確認された弥生時代の遺跡は、海岸線にほど近い砂丘上と比較的広い台地上に確認されていた。砂丘上の代表的な遺跡に、後期の壺形土器や鉢形土器などが出土した赤江遺跡がある。台地上では、清武川を挟んで南側に位置する宮崎学園都市遺跡群内に、夜臼式系の土器や弥生時代中期後半から後期前半の土器を出土した前原北遺跡をはじめ堂地東遺跡・陣ノ内遺跡・浦田遺跡など弥生時代の遺構・遺物を検出した多数の遺跡が所在する。

古墳時代では、前期の集落である熊野原遺跡Ｃ地区・前原南遺跡・前原北遺跡・陣ノ内遺跡（宮崎学園都市遺跡群）等があり、そのうち前原北遺跡や陣ノ内遺跡では後期後半の集落も確認されている。後期の木花村古墳群は前方後円墳３基、円墳５基が県指定されている。その関連集落として、前原北遺跡・陣ノ内遺跡・西ノ原第二遺跡が挙げられる。

古代では、枯木ヶ迫遺跡・市位遺跡が立地する低位丘陵南辺に、平安時代末期のものと推定される銅鉢製積上式経筒が発見されている。経筒は、相輪形つまみのある笠蓋に、４段輪積の筒身と２段台底からなる重厚なものである。また、平安時代には、律令制の有名無実化が進み日向のほとんどが荘園化してしまっている。

中世に入ると、建久８年（1197）の「建久図田帳」に本郷南方・郡司分一帯は、「田代千五百二町」を占める国富荘八条院女領の一円荘として登場する。本遺跡は、国富荘の中心「國富本郷二百四十町」にあたると考えられ、その後伊東氏の所領として展開していく。

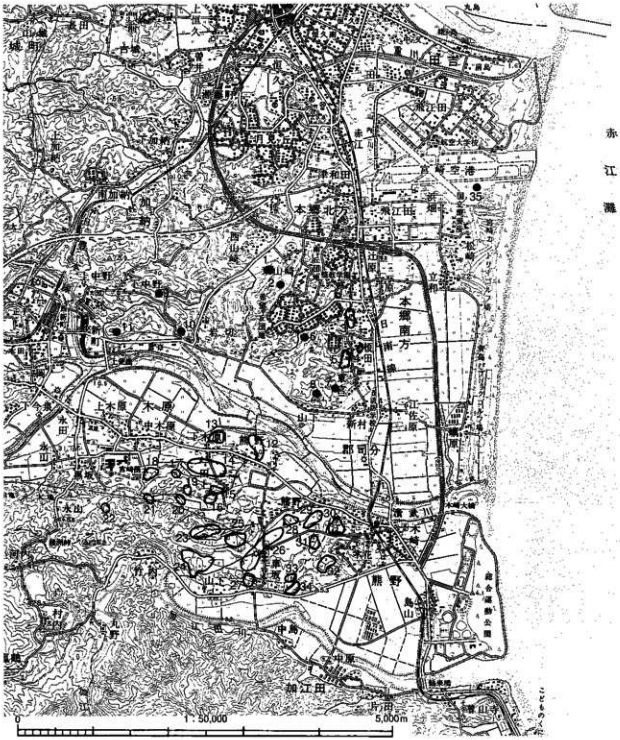
〈参考文献〉

茂山　譲「宮崎県の経塚地名録」『研究紀要』第三輯 宮崎県総合博物館　1972

『宮崎県史』資料編 考古１・考古２　宮崎県 1989・1993

「市位遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第10集 宮崎県埋蔵文化財センター 1998

『宮崎市遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』（リゾート地区を中心として）宮崎市教育委員会 1990



1 枯木ヶ迫遺跡	2 市位遺跡	3 西田第二遺跡	4 榎木田遺跡	5 西田第一遺跡
6 松ヶ迫窯跡	7 平田遺跡	8 経筒出土地点	9 須木田遺跡	10 若宮田遺跡
11 辻遺跡	12 木花古墳群	13 北ノ原遺跡	14 下原遺跡	15 小山尻東遺跡
16 田上遺跡	17 小山尻西石塔群	18 下田畑遺跡	19 浦田遺跡	20 入料遺跡
21 赤坂遺跡	22 山内石塔群	23 堂地西遺跡	24 平田遺跡	25 堂地東遺跡
26 熊野原遺跡	27 犬馬場遺跡	28 前原西遺跡	29 前原北遺跡	30 今江城跡
31 前原南遺跡	32 木花遺跡	33 陣ノ内遺跡	34 東坂城西ノ城跡	35 赤江遺跡

図1　遺跡位置図

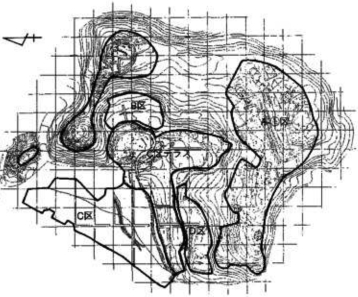
第２節　遺跡の層序（図2）

本遺跡は丘陵地とその丘陵地間にある谷から成る。よって、層の堆積は丘陵上、丘陵中腹、谷低地部とそれぞれ異なるが、火山灰と出土遺物の関係から基本層序は次のようにまとめられる。

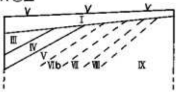
第Ⅰ層　表土
第Ⅱ層　文明白ボラ混褐色土
第Ⅲａ層　高原スコリア混暗褐色土（古代の遺物包含層）
第Ⅲｂ層　低地谷部：黒色粘質土（水田層・はたけ跡）
第Ⅳ層　ＡＴ混黄褐色土（古墳時代の遺物包含層）
第Ⅴ層　丘陵上：小林軽石
第Ⅵａ層　ＡＴ風成層
第Ⅵｂ層　ＡＴ火山灰層
第Ⅶ層　シラス
第Ⅷ層　岩盤小礫混暗褐色土
第Ⅸ層　丘陵上：宮崎層群　低地谷部：青灰色粘土

第Ⅰ層は表土である。丘陵上のＡ－①区では表土が薄く、表土直下の第Ⅲ層面にまで竹根の影響が及んでいた。谷部は造成による盛り土が60㎝と厚く堆積していた。第Ⅱ層は文明白ボラが混在する褐色土である。丘陵上（Ａ－①区）と中腹テラス（Ｄ区）には確認できなかったが、Ｂ区とＣ区テラス、Ｃ区には確認できた。特にＣ区では層上位でイネのプラントオパールが高密度で確認され、水田跡の存在が指摘された。第Ⅲ層は高原スコリア混暗褐色土で古代の遺物包含層である。高原スコリアの混入の有無によってａ・ｂに分けられる。低地谷部（Ｃ区テラス・Ｃ区）ではイネとヒエのプラントオパールが第Ⅲｂ層で検出されている。第Ⅳ層はＡＴ混黄褐色土で、古墳時代の遺物包含層である。低地のＣ区では層の粘質化が見られる。第Ⅴ層は小林軽石層で、Ａ－①区のみで確認された。第Ⅵ層はＡＴ火山灰層で、風成層と一次堆積層でａ・ｂに分けられる。第Ⅶ層はシラス層である。第Ⅷ層は岩盤小礫混暗褐色土で、宮崎層群の風化により形成されたものと思われる。第Ⅸ層は宮崎層群で、低地部は粘質化している。

丘陵上では層の堆積も安定しているが、丘陵中腹や裾谷部では丘陵上からの崩落や流入があり、層の混在とともに多くの遺物の出土が確認できる。

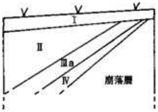


A-①区



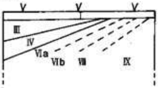
Ⅰ　表土
Ⅲ　暗褐色土（古代の遺物包含層）
Ⅳ　AT混黄褐色土（古墳時代の遺物包含層）
Ⅴ　小林軽石
Ⅵb AT火山灰層
Ⅶ　シラス
Ⅷ　岩盤小礫混暗褐色土
Ⅸ　宮崎層群

B区



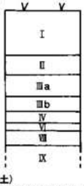
Ⅰ　表土
Ⅱ　文明白ボラ混褐色土
Ⅲa 高原スコリア混暗褐色土（古代の遺物包含層）
Ⅳ　AT混黄褐色土（古墳時代の遺物包含層）

D区



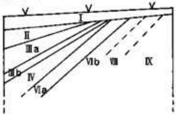
Ⅰ　表土
Ⅲ　暗褐色土
Ⅳ　褐色土（古墳時代の遺物包含層）
Ⅵa AT風成層
Ⅵb AT火山灰層
Ⅶ　岩盤小礫混暗褐色土
Ⅸ　宮崎層群

C区



Ⅰ　表土（造成土）
Ⅱ　文明白ボラ混灰色シルト質土（イネのプラントオパール検出層）
Ⅲa 黒灰（暗灰褐）色シルト質土
（高原スコリア混、古代の遺物包含層、イネのプラントオパール検出）
Ⅲb 暗灰（黒）色粘質土（イネのプラントオパール検出）
Ⅳ　灰褐色粘質土（古墳時代の土器含む）
Ⅵ　灰白色粘質土（AT?）
Ⅷ　岩盤小礫混暗灰色粘質土
Ⅸ　青灰色粘質土（宮崎層群）

C区テラス



Ⅰ　表土
Ⅱ　文明白ボラ混褐色土・茶褐色土
Ⅲa 高原スコリア混暗褐色土＋AT風成層（古代の遺物包含層）
Ⅲb 黒色粘土層（ヒエのプラントオパール検出層）
Ⅳ　AT混黄褐色土（古墳時代の遺物包含層）
Ⅵa AT風成層
Ⅵb AT火山灰層
Ⅷ　岩盤小礫混暗褐色土
Ⅸ　青灰色粘土（宮崎層群）

図２　各地区基本土層略図

第３節　調査の経過（図4）

調査対象地は、標高16～30ｍの「コ」字形を呈する丘陵地とその間にある標高９～15ｍの低地谷部の約9,296㎡である。調査区の設定は地形に併せて次のとおり行った。丘陵地をＡ区とし、石塔群が確認できる南東から北西に延びる北側丘陵部の３つの頂部をＡ－②区、Ａ－③区、Ａ－④区、石塔が存在しない東西に延びる丘陵上をＡ－①区と設定した。また、Ａ－②区西側の丘陵地中腹をＢ区、Ａ－①区北西側の丘陵地中腹をＤ区とし、丘陵地西側裾部をＣ区テラス、その北西側に広がる低地をＣ区とした。調査区に座標北に合わせた10ｍグリッドを設定し、以下の工程で調査を行った。

平成10年10月５日から重機により、Ａ－①区、Ｃ区テラス、Ｃ区、Ｂ区、Ｄ区の順に表土剥ぎを進め、順次、人力により精査及び遺物包含層の掘り下げを行った。石塔群の位置するＡ－②区～Ａ－④区の調査は、平成10年10月29日から開始した。各区の調査を併行して行い、平成11年３月31日に全ての調査を終了した。各調査区の概要は次のとおりである。

Ａ－①区は北西に傾斜し、東側は小高い丘状地形を呈する。調査区の面積は約3,262㎡である。表土の除去を行うと、頂部には岩盤やＡＴ火山灰層の露出が見られ、斜面に沿って遺物包含層の第Ⅲａ層、第Ⅳ層が厚みを増しながら堆積していた。第Ⅲａ層からは古代の土師器、須恵器、緑釉陶器、第Ⅳ層からは主に縄文土器、弥生時代から古墳時代の土器が出土している。検出した遺構は、竪穴住居跡15軒（古墳14軒、古代１軒）、掘建柱建物跡２棟、土坑６基、畝状遺構である。各遺構は、丘状地形の北東側中腹から裾部及び一段下のテラス部の北～北西斜面に集中している。

Ａ－②区～Ａ－④区では中世から近世の石塔が確認された。調査区の面積は約1,048㎡である。石塔の調査は、碑文調査、下部遺構確認、写真測量による平面分布及び立面図作成並びに地形測量を行った。

Ｂ区は、西側谷に向かって傾斜する斜面中腹に位置する。調査区の面積は約455㎡である。第Ⅱ層上面で遺構検出を行い、溝状遺構を１条確認した。

Ｃ区テラスの調査区の面積は約1,980㎡である。表土剥ぎ取り後、第Ⅳ層面で精査し、遺構検出を行った。自然流路と思われる溝状遺構１条と８基の土坑、およびピット群を検出した。ピットからは近世陶磁器の出土がみられ、柱痕跡が確認できるものもあった。その他、動物遺存体を検出した土坑も確認されている。低地谷部で大量の土器が出土しているが、これは丘陵上の遺物包含層の崩落によるものと思われる。遺物は、弥生から古墳時代の土器及び古代の土師器、須恵器、緑釉陶器、中近世の陶磁器等がみられる。

Ｃ区の調査区の面積は約2,036㎡である。試掘調査時に第Ⅱ層や第Ⅲ層でイネのプラントオパールが検出され、水田跡が存在する可能性が指摘されていた。約60㎝程ある造成土を重機で除去した後、水田跡の検出に努めたが、面的に遺構を捉えることはできなかった。土層確認トレンチにより第Ⅳ層面で溝状遺構を１条検出した。溝状遺構からは古代の土師器、須恵器、砧、木杭、木製皿などが出土している。

Ｄ区はＡ－①区北側斜面中腹に位置する。調査区の面積は約515㎡である。確認された10数基の近世墓については写真測量を行った後、下部遺構の検出に努めた。その結果、墓坑１基を検出した。墓坑からは六道銭や唐津陶器が出土している。遺物は、弥生から古墳時代の土器及び近世陶磁器が出土している。

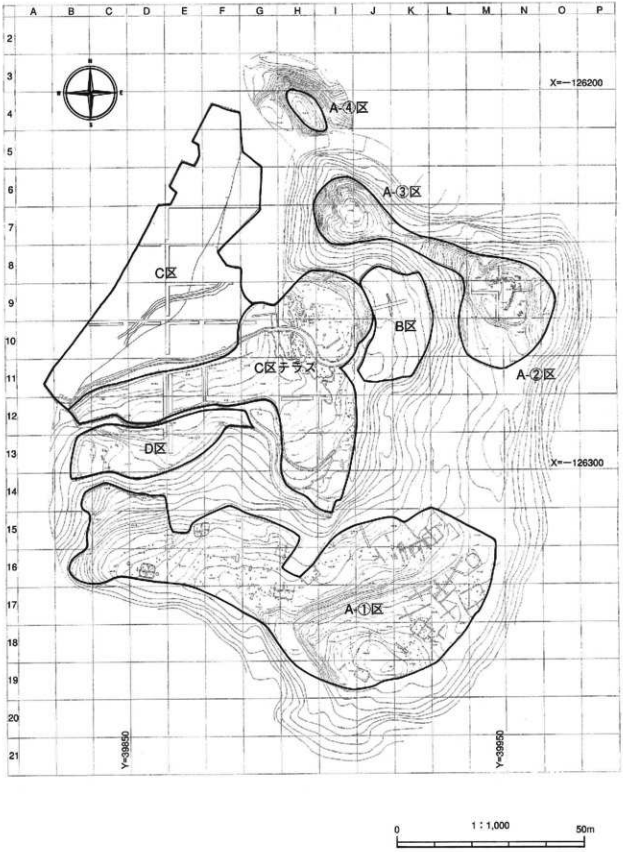

A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
X=−126200
X=−126300
Y=39950
Y=39950
A-④区
A-③区
A-②区
B区
C区
C区テラス
D区
A-①区
0
1：1,000
50m

図3　グリッド配置図

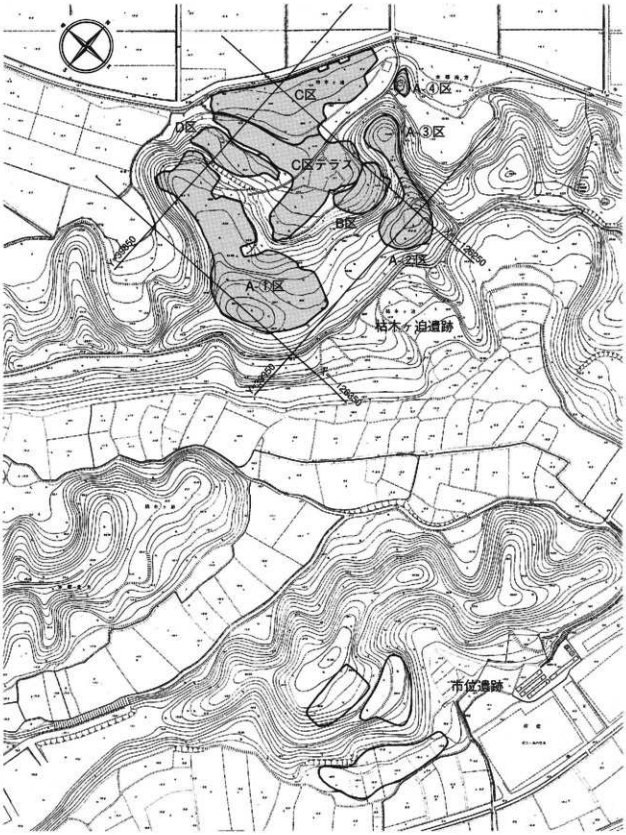


図4　遺跡周辺地形図

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　Ａ区の調査

（１）縄文時代の遺物

遺物の分布はＡ－①区北側縁辺部のＩ15、Ｊ15・16、Ｋ15、Ｄ15グリッドに見られる。出土層位はＡ区基本層序の第Ⅱ層と第Ⅲ層である。Ｄ15グリッド付近には赤化礫の分布がまばらに見られ、集石遺構があった可能性も窺える。遺物は早期と後期の土器小片が数十点出土したのみである。

出土遺物は図５に示した１～10である。１と２は円筒形貝殻文土器の胴部と底部の小片と思われる。外面に横位または縦位の貝殻条痕調整後、縦位の貝殻刺突線文を施している。内面は縦方向のケズリ調整かナデと思われる。３～７は口縁部が「く」字形を呈する深鉢である。３は横位の貝殻刺突文と突帯上方にヘラ状工具による連続刺突文が施され、内面はヘラ状工具による横位のナデ調整である。４は横位の凹線文と貝殻刺突文、口縁端部に爪形文を巡らせた文様構成である。内面はナデで、外面にはススが付着する。５は外面はやや斜位の沈線文と貝殻刺突文、内面は貝殻条痕が見られる。３～５は波状口縁を呈すると思われる。６の外面は横位の沈線文、端部刺突沈線文、貝殻刺突文から成り、内面は斜位の貝殻条痕調整である。７は外面に斜位の貝殻刺突文、内面は貝殻条痕で仕上げられている。８～10は外面及び内外面に貝殻条痕調整が見られる深鉢である。８と９は胴部から口縁が直または外傾して開くもので、やや厚みを持つ。10は器面が薄く、８・９と比べて器面調整が丁寧である。

（２）弥生時代から古墳時代の遺構と遺物

遺構は竪穴式住居跡が14軒、土坑が１基検出されている。住居の平面形は正方形や長方形を主体とし、規模も幾つかに分類できる。しかし、半分以上のものが検出面設定の都合により一部が失われているため、全容を明らかにできなかった。床面に炉や焼土をもつものは少なく、ＳＡ５に埋甕、ＳＡ11に伴うと思われる焼土が確認されているだけである。

竪穴式住居跡（ＳＡ）

ＳＡ１（図７）

Ａ－①区西側南寄りに位置し、第Ⅳ層面で検出した。遺構の一部は宮崎層群を掘り込んでいる。主軸方位はＮ－71°－Ｗを指す。平面プランは、規模が長軸4.1ｍ、短軸3.6ｍの長方形を呈する。検出面からの深さは約0.4ｍで、床面は中央部にかけてわずかに盛り上がり、壁際が若干凹む。床には硬化面が見られた。また、北側隅を除く三隅に幅約10㎝、深さ約５㎝の壁帯溝を有する。各壁際中央部のピット４基が主柱穴と考えられ、規模は径20～25㎝、床面からの深さ15～20㎝を測る。遺物は12の甕と15・16の高坏以外は、小片が床から若干浮いた状態で出土している。

出土遺物は図８に示している。12は甕の胴部から底部である。胴部中位に最大径を持つ球胴形と凸レンズ状の底部を呈する。外面胴部中位から上位に著しいスス付着、内面底部に炭化物の付着が見られる。13は貼付刻目突帯を持つ壺の頸部である。14は壺の底部と思われる。厚手の丸底気味平底を呈する。15と16は高坏で、同一個体である。坏部は受け部が浅くほぼ水平で、体部は屈折し、口縁部は大きく開い

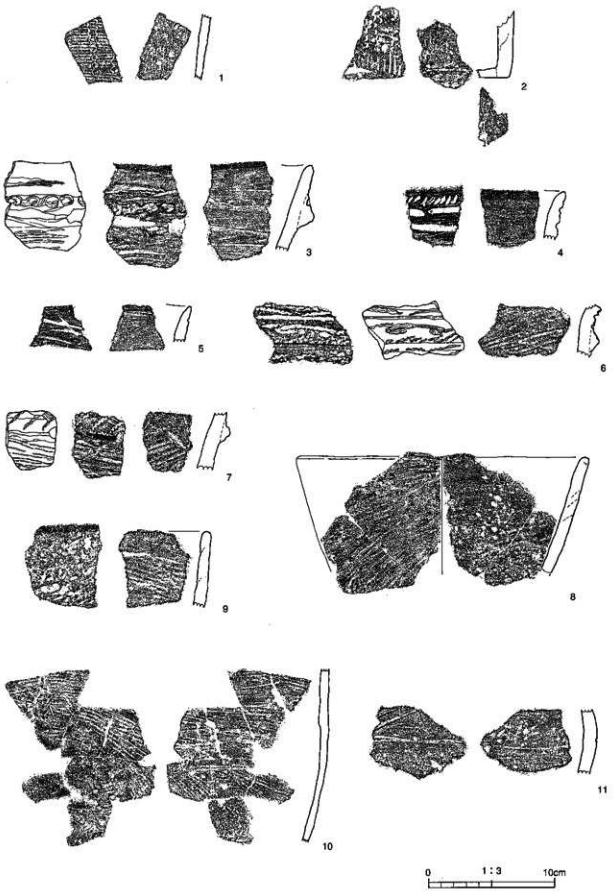


図5　縄文土器実測図

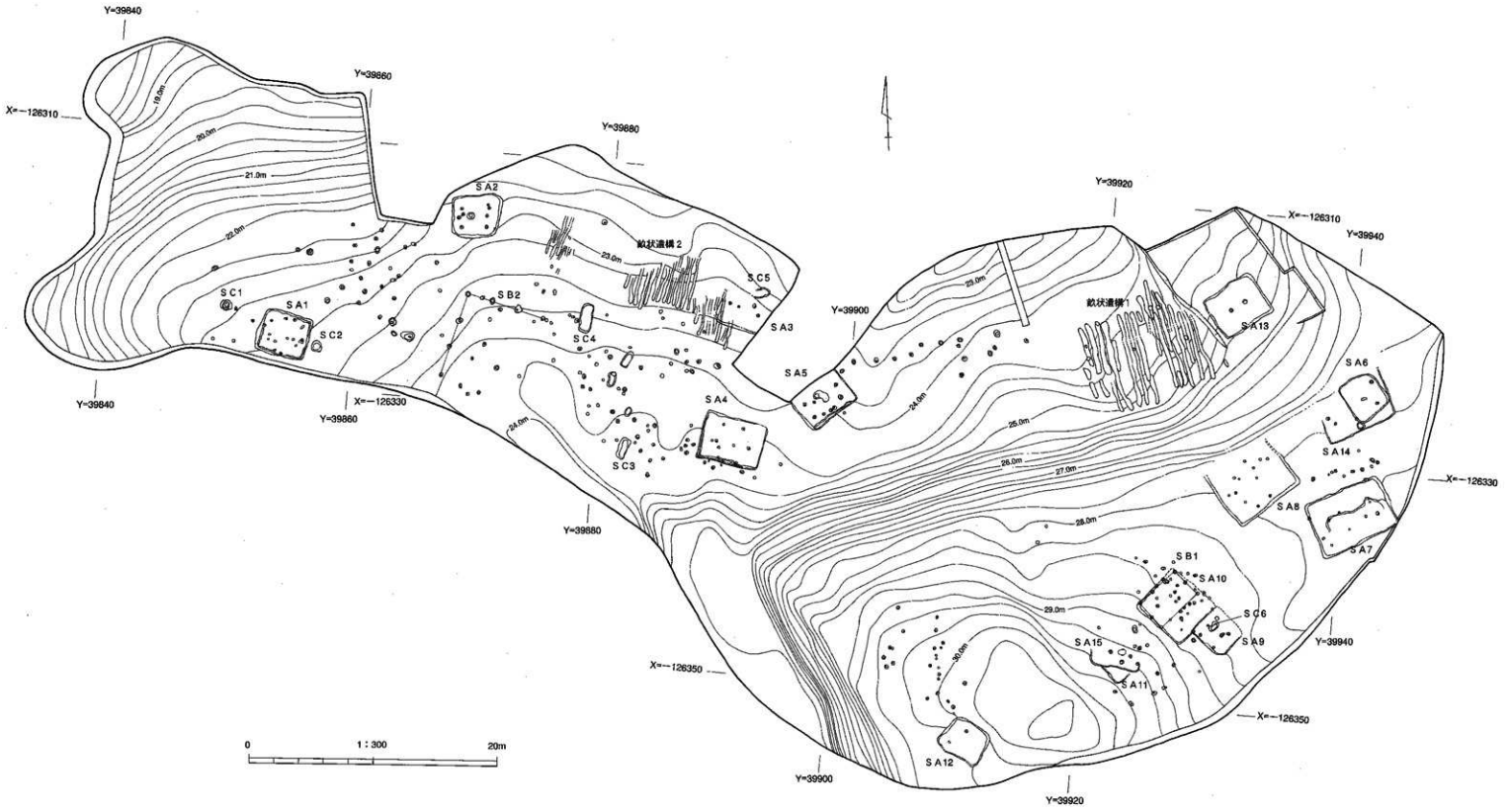
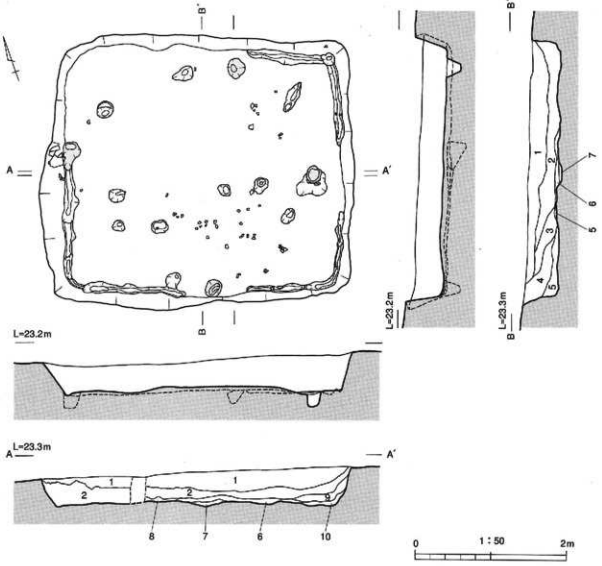

Y=39840
Y=39860
Y=39880
Y=39900
Y=39920
Y=39940
X=−126310
X=−126330
X=−126350
SA1
SA2
SA3
SA4
SA5
SA6
SA7
SA8
SA9
SA10
SA11
SA12
SA13
SA14
SA15
SB1
SB2
SC1
SC2
SC3
SC4
SC5
SC6
敷状遺構1
敷状遺構2
18.0m
20.0m
21.0m
22.0m
23.0m
24.0m
25.0m
26.0m
27.0m
28.0m
29.0m
30.0m
0
1:300
20m

図6　A-①区遺構分布図



1　にぶい褐色土～ややしまり有り。岩塊小片、ATが小ブロックを若干含む。土器片、炭化物粒を含む。
2　にぶい褐色土～やや軟質。岩礫小片、ATが小ブロックをわずかに含む。炭化物を多く含む。
3　にぶい褐色土～ややしまり有り。岩礫（3～4cm角）をやや多く含む。炭化物を下層に多く含む。
4　オリーブ色土～しまり有り。岩礫（2～3cm角）を多く含む。炭化物を若干含む。
5　にぶいオリーブ色土～やや軟質。岩礫（1～2cm角）を若干含む。炭化物を多く含む。
6　暗褐色土～やや軟質。岩礫小片、ATがブロックをわずかに含む。炭化物を多く含み黒色層がみられる。
7　にぶい暗褐色腐植質土～ややしまり有り。炭化物粒をわずかに含む。
8　にぶい褐色土～しまり有り。炭化物粒、岩礫粒、小林軽石粒混黒色土ブロックを含む。
9　暗褐色土～ややしまり有り。ATブロックをわずかに含む。炭化物を多く含む。
10　暗褐色土～やや軟質。炭化物を含む。

図7　SA1遺構実測図

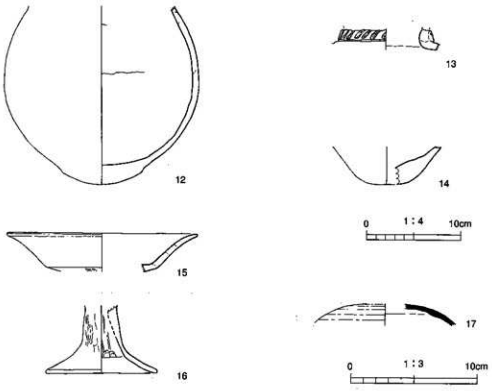


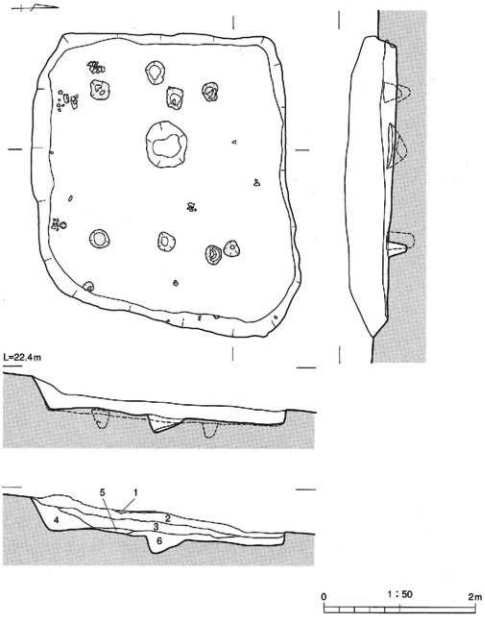
図8　SA1出土遺物実測図

て外反する。脚部はラッパ状を呈し、屈折部内面に稜を持つ。器面調整はいずれも丁寧なナデ、ヨコナデ、一部ミガキである。17は須恵器の坏蓋天井部である。

SA2（図9）

A-①区西寄り北側、第Ⅳ層面で検出した。主軸方位はN-85°-Wを指す。平面プランは、北東隅が張り出す不整隅丸方形を呈する。規模は長軸3.5～4.0m、短軸3.4m、検出面からの深さ0.2～0.4mを測る。床面は長軸方向はほぼ平坦であるが、短軸方向は地形に沿って北側に若干傾斜する。主柱穴は方形に配置された4基で、規模は径20～25cm、深さ20～25cmを測る。床面中央部やや西寄りに、径約60cmの不整円形を呈する土坑を検出した。断面形は西側が深い船底を呈する。深さは最深部で20cmを測る。埋土第1層に焼土が見られる。焼土は南西寄り中央部に、遺物は南側壁寄りに床面より浮いた状態で出土した。

出土遺物は図10に示している。18は甕の口縁部から胴部である。胴部が張らず、長い口縁部が内湾して立ち上がる。19は甕の底部と思われる。くびれを持ち裾端部が広がると思われるが、欠損のため不明である。平底またはやや上げ底を呈する可能性を持つ。20～22は壺である。20は口縁部から頸部で、内湾気味の短い口縁部が外傾して開く。21と22は底部で、22は平底を呈すると思われる。23と24は同一個体で、高坏の坏部である。受け部が浅く、体部が屈折して外反する口縁部が大きく開く。25は高坏の脚柱部である。太く、エンタシス状を呈し、裾部は屈折して大きく開く可能性を持つ。



1　赤褐色土～焼土を多く含む。炭化物を含む。
2　灰褐色土～炭化物を多く含む。
3　褐色土～きめ粗か。
4　青褐色土～被質。きめ細か。小礫径石を多く含む。炭化物をやや含む。
5　青褐色腐植質土～きめ粗か。炭盤をやや多く含む。
6　暗褐色土～岩盤粒（3～8mm）を含む。

図9　SA2遺構実測図

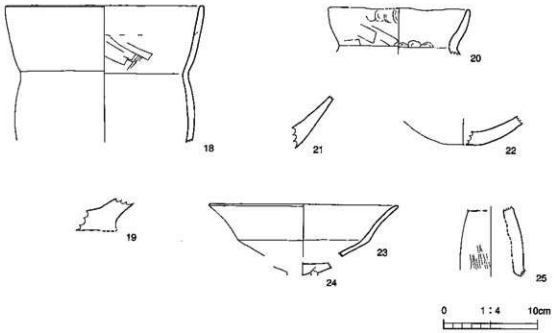


図10　SA2出土遺物実測図

SA3（図11）

A-①区中央北側に位置し、SC5と重複する。主軸方位はN-23°-Wを指す。第Ⅳ層面で遺構の検出を行ったが、東側は削平、北側は崩落または土の流出により平面プランの全形は明らかにできなかった。残存する壁面及び主柱穴の配置から想定すると、長方形プランが考えられる。検出面からの深さは約0.2mを測る。床面はほぼ平坦で、南西隅に硬化面が確認できた。主柱穴は遺構の中央部と思われる位置に2基検出し、規模は径25cm、深さ40～45cmを測る。北東寄りの床面近くに土器小片が集中し、その北側斜面に分布が広がるが、傾斜に伴う遺物の流出が考えられる。

出土遺物は図12に示している。26～28は甕である。26と27は同一個体と思われる。胴部は張らずに口縁部に最大径を持つ。口縁部はくびれて「く」字を呈する。胴部中位と口縁部に著しくススが付着する。底部はやや厚みのある平底を呈する。内外面ともナデで、一部ハケ状工具によるナデが見られる。28は口縁部で、内面に粘土の継ぎ目が残り、外面は丁寧なヨコナデが見られる。29～32は壺である。29は外傾して開く口縁部で、内外面とも丁寧なヨコナデ仕上げである。30はあまり肩の張らない球胴形を呈し、口縁部は直口するものと思われる。内外面ともハケ目が見られる。31は肩部が張り、直口する口縁部を持つと思われる。32は丸底気味の平底を呈する壺の底部と思われる。33～36は高坏の坏部である。33は体部に明瞭な稜を持たず、口縁部は外側に開いてまっすぐ延びる。内外面ともハケ目及びミガキ調整が丁寧に施されている。34の口縁部はまっすぐ、35と36は外反して開く。37は高坏の脚裾部である。脚柱部から屈曲して大きく開く。外面は丁寧なミガキ、内面はヨコナデである。38は坏の口縁部から体部と思われる。体部は椀状を呈し、口縁端部は外反する。内外面ともヨコナデ仕上げである。39は凝灰岩製の管玉である。

SA4（図13）

A-①区中央部、第Ⅴ層及び第Ⅵ層面で検出した。主軸方位はN-76°-Wを指す。平面プランは長軸

1　暗褐色部粘質土～軟質。炭化物粒を若干含む。
2　にぶい褐色部粘質土～ややしまり有り。1層ブロックを含む。
　　土器小片、炭化物を多く含む。

図11　ＳＡ３遺構実測図

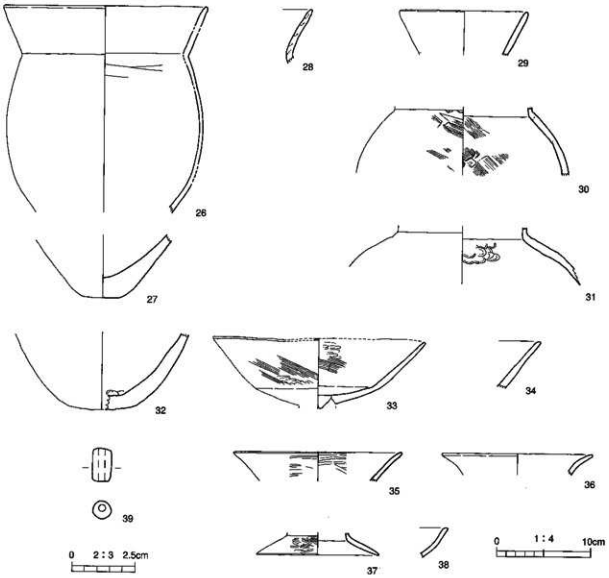
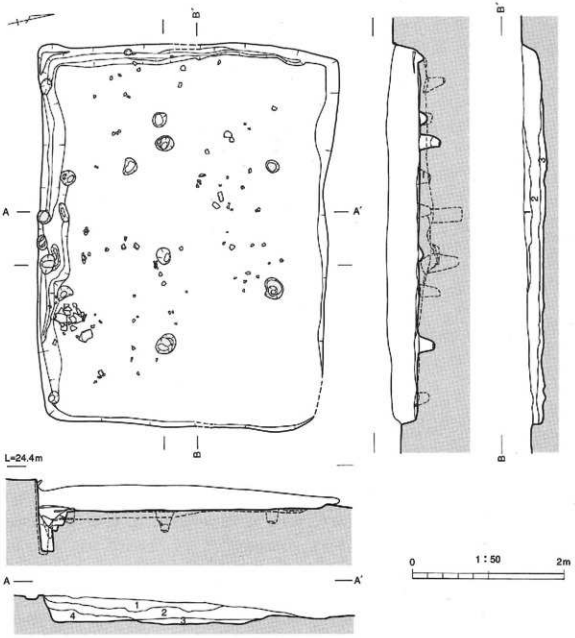


図12　SA3出土遺物実測図

5.1m、短軸3.9mの長方形を呈する。検出面からの深さは約0.3mで、床面はほぼ平坦である。床には貼り床及び硬化面が見られ、南壁面及び西壁面沿いに幅約10～15cm、深さ約5cmの壁帯溝を検出した。同心円上に並ぶ6基が主柱穴と思われるが、南壁沿い中央部に径20cm、深さ40cmのピット2基も確認できる。主柱穴は径20～25cm、深さ20～30cmを測る。遺物は床面近くで出土している。

出土遺物は**図14**に示している。**40**は甕である。胴部上位に膨らみを持ち、胴部最大径は口縁部径とほぼ同一である。口縁部は緩やかにくびれ、口唇部は平らに仕上げている。平底を呈する。胎土が脆く、風化が著しいが、外面くびれ部に横方向の工具痕が残る。**41**は壺の口縁部と思われる。口縁部は外反する。**42**は壺の頸部から肩部である。肩部はやや張り、小さくくびれた頸部から口縁部は外側に開く。**43**は丸底気味の壺の底部である。**44**～**47**は小型器種である。**44**～**46**は丸底壺、**47**は甕か鉢と考えられる。**48**と**49**は高坏である。**48**は体部に稜を持たない深い坏部を呈するものと思われる。**49**は「ハ」字状に開く脚柱部である。**50**は凝灰岩製の管玉である。



1　にぶい褐色土～硬質でしまり有り。炭化物粒を含む。AT小ブロックを若干含む。
2　ややにぶい褐色土～やや軟質。AT小ブロックを多く含む。炭化物粒を含む。
　　小林軽石混黒色土ブロックを若干含む。
3　にぶい褐色土～硬くしまる。ATと小林軽石粒混黒色土ブロックが多く混入。硬化面（貼り床か？）。
4　ややにぶい褐色土～硬質。ATブロックを多く含む。炭化物粒を含む。

図13　ＳＡ４遺構実測図

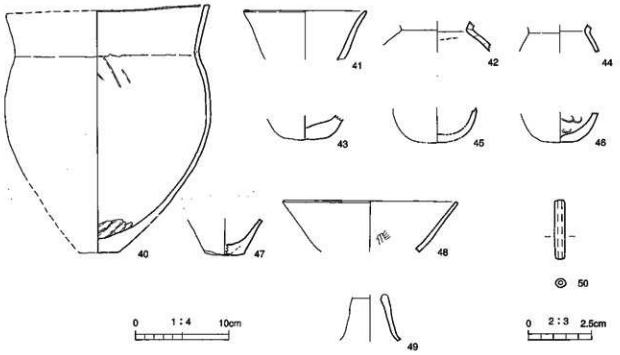
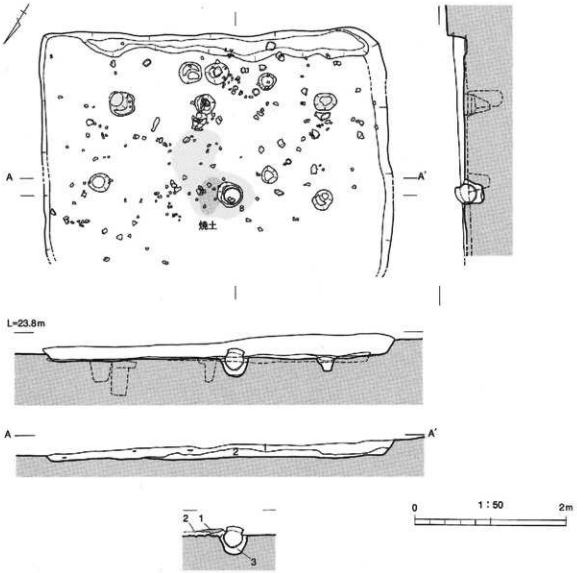


図14　SA4出土遺物実測図

SA5（図15）

A－①区中央、第Ⅴ層面で検出した。遺構の北西壁面は削平により消失している。主軸方位はN－57°－Eを指す。遺構の規模は長軸4.7mを測り、平面プランは残存部から長方形と推定される。検出面からの深さは約0.2mである。床面はほぼ平坦で、東側半分に硬化面が見られた。床面中央付近に埋甕がある。埋置土坑は径40cm、深さ30cmの円形を呈し、壁面が硬化している。土坑周囲には、東側を中心とした幅1.3mの範囲に、炭化物を多く含む焼土の盛り上がりがある。特に土坑の北東側30cmの範囲が著しく赤化していた。また、南東壁面沿いに幅約30cm、深さ約5cmの壁帯溝を検出した。主柱穴は検出した柱穴の配置から4本柱が想定されるが、遺構の消失のため南東部2基のみの検出となった。主柱穴の規模は径25～30cm、深さ30～40cmを測る。遺物は床面近くで出土している。遺物に敲石の出土が目立つが、類似する形の石が多く、好みの石材を利用していることが窺える。

出土遺物は図16・17に示している。51～53は甕である。51は小さい平底と胴部中位よりやや上に最大径を持つ球胴形を呈し、口縁部は緩やかにくびれて上方に延びる。外面は胴部最大径以下にススの付着と器面の剥落、内面には黒変が見られる。52は胴部中位に最大径を持ち、著しくススが付着している。口縁部は緩やかにくびれて上方に延びるが端部は外反する。53は口縁部で、内面はハケ状工具によるナデ仕上げである。54は頸部に貼付刻目突帯を持つ壺である。刻目は刺突気味に施されている。55はやや丸底気味の甕か壺の底部である。56は鉢の胴部から底部と思われる。円盤高台状の底部から内湾する胴部が立ち上がる。57～67は高坏である。坏部は深く、口縁部が開いて外反するものがほとんどで、屈折部に明瞭な稜を持つもの（59・60・66）、稜が不明瞭なもの（57・58・65）、稜を持たないもの（61）がある。脚部は、脚柱部がまっすぐなもの（62）、裾部が椀状を呈するもの（62・63）、脚柱部がハ字状に開き屈折して裾部が大きく開くもの（64）、ラッパ状を呈するもの（65・66・67）がある。68～71は小型丸底壺である。72と73は鉢と思われる。74と75は手捏ねの鉢である。77～80は砂岩製の敲石である。



1　ややにぶい褐色土～しまり有り。炭化物を多く含む。
2　ややにぶい褐色土～やや軟質。炭化物を多く含む。中央部は炭化物、焼土が混在し、黒色化。
3　灰褐色土～しまりなし。

図15　ＳＡ５遺構実測図

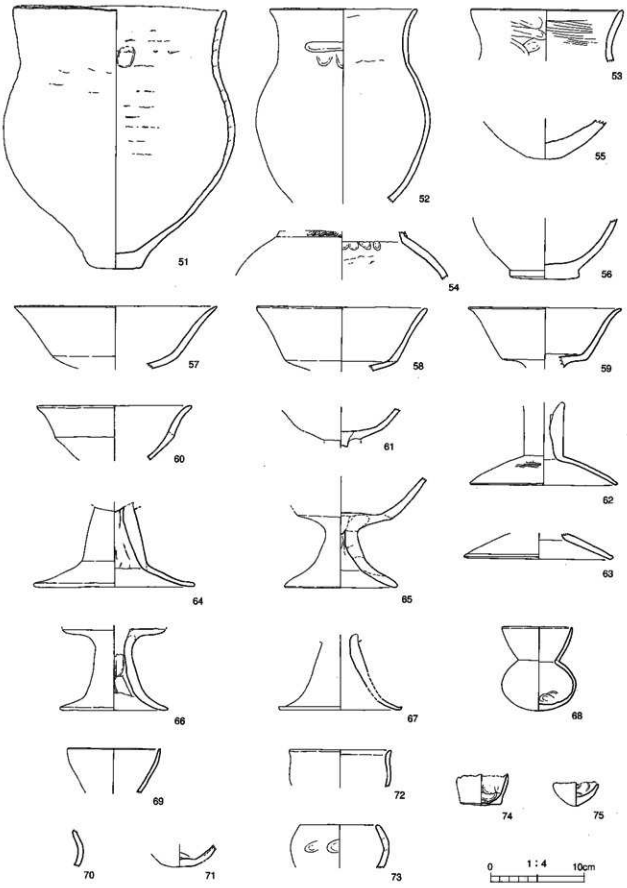


図16　ＳＡ５出土遺物実測図（１）

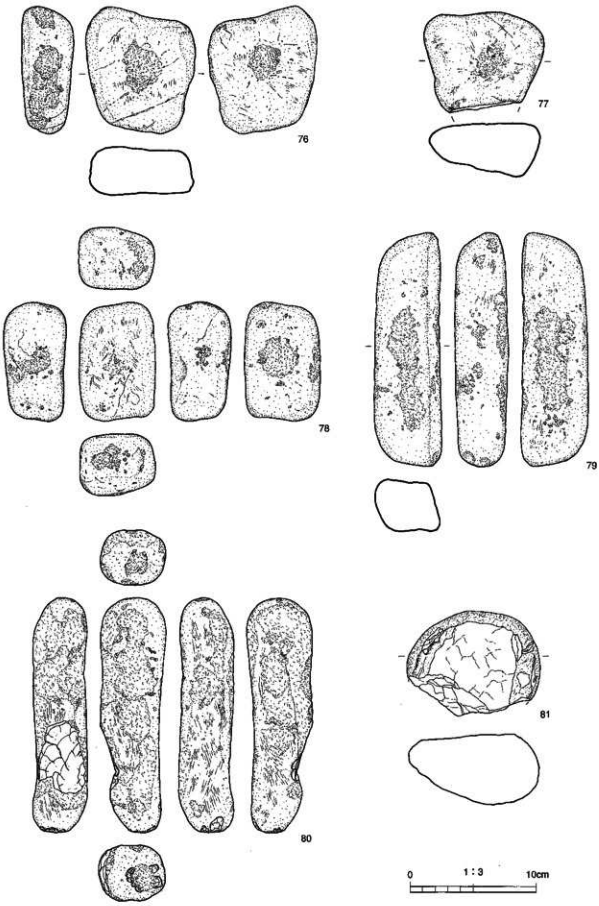
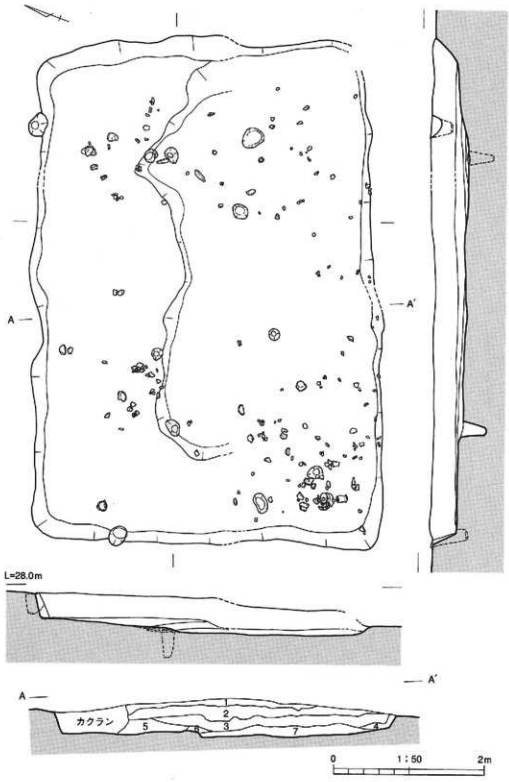


図17　ＳＡ５出土遺物実測図（２）



1　黒灰褐色土～粗粒土。炭化物少量含む。
2　灰褐色土～ややしまり有り。炭化物、岩盤粒（5～10mm）、土器片多く含む。
3　暗褐色細粘質土～しまり有り。土器片少量含む。
4　灰褐色土～岩盤粒（1～3cm）多く含む。土器片少量含む。
5　褐色土～きめ細か。岩盤粒（5mm以下）含む。土器片少量含む。
6　明褐色土～粗粒土。岩盤粒（1～3cm）多く含む。炭化物少量含む。
7　灰色土～きめ細か。土器片少量含む。

図18　SA7遺構実測図

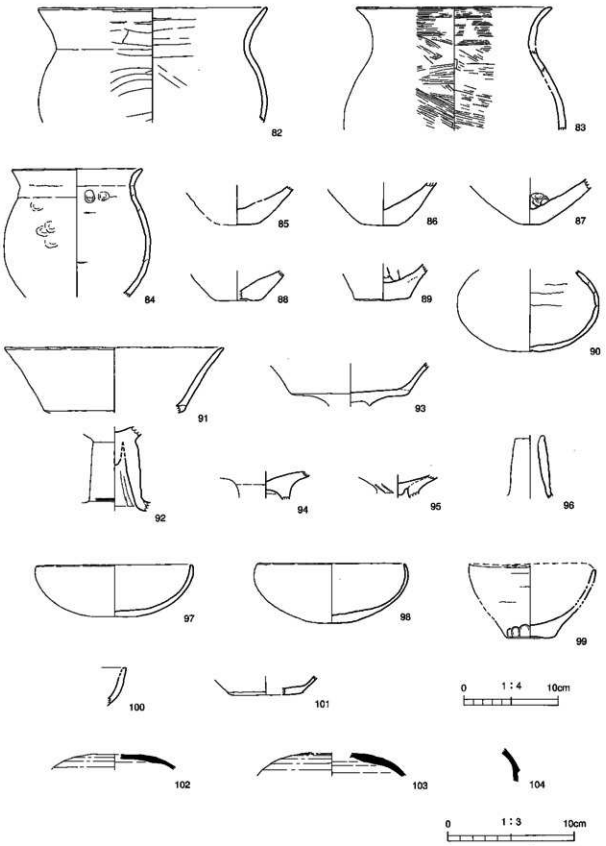


図19　ＳＡ７出土遺物実測図（１）

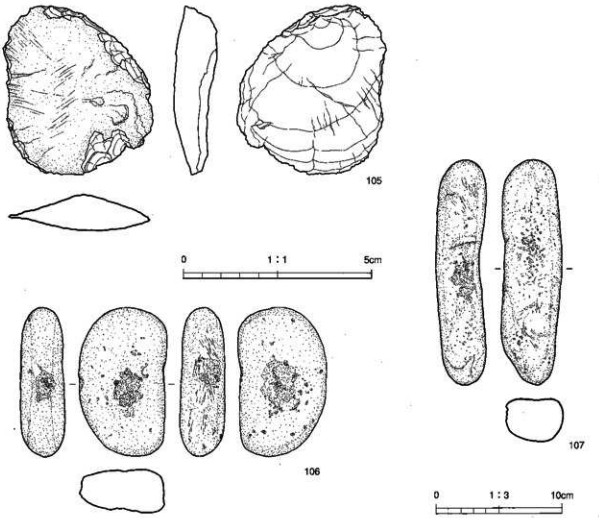


図20　ＳＡ７出土遺物実測図（２）

長軸９～10cm、短軸６～９cm、厚み４～５cmの長方形または台形礫を使用しているもの（**76・77・78**）、長さ18～19cm、幅５cm、厚み４cm程の棒状礫を使用しているもの（**79・80**）がある。**81**はチャートの原石である。

ＳＡ７（図18）

Ａ－①区の東端、岩礫混じりの第Ⅲ層面で検出した。主軸方位はN-67°-Eを指す。平面プランは、長軸6.8m、短軸4.6mの長方形を呈する。検出面からの深さは0.3～0.4mを測る。北壁から西壁沿いの床面に幅1.5～2.0mのベッド状遺構があり、その段差は約10cmである。主柱穴は長軸方向に２基検出した。主柱穴の規模は径20～25cm、深さ30cmを測る。遺物は床面から10～20cm程浮いた状態で出土している。

出土遺物は**図19・20**に示している。**82～89**は甕である。**82**は胴部上位に膨らみを持ち、口縁部径とほぼ同じ大きさを測る。口縁部はくびれて外傾して開く。胴最大径部にススが付着する。内外面とも工具ナデである。**83**は胴部中位に最大径を持ち、口縁部はくびれて頸部を形成し、口縁端部は外反する。内外面とも口縁部はヨコナデ、胴部はハケ目が見られる。**84**は小型の甕である。胴部中位に最大径を持ち、口縁部は緩やかにくびれて外反する。外面の胴部中位から上にススが付着する。**85～89**は底部である。平底でくびれを持たないもの（**85・86・87**）、平底で若干くびれを持つもの（**89**）、底部中央部が窪むも

の（88）がある。90は扁球形の胴部を呈する壺である。91～96は高坏である。91と92は同一個体と思われる。坏部は深く、屈折部に明瞭な稜を持ち、口縁部は外傾して延びる。脚柱部はまっすぐで厚く、屈折して裾部が開くと思われる。93は屈折部に明瞭な稜を持つ。96はまっすぐで細い脚柱部である。97と98は椀で、口縁部が内湾する。97は外面にススが付着する。99～101は鉢と思われる。102～104は須恵器の坏蓋である。104は天井部と口縁部の境に明瞭な段を持つ。105は剥片で、石材は頁岩である。106と107は敲石で、利用石材は砂岩である。

ＳＡ８（図21）

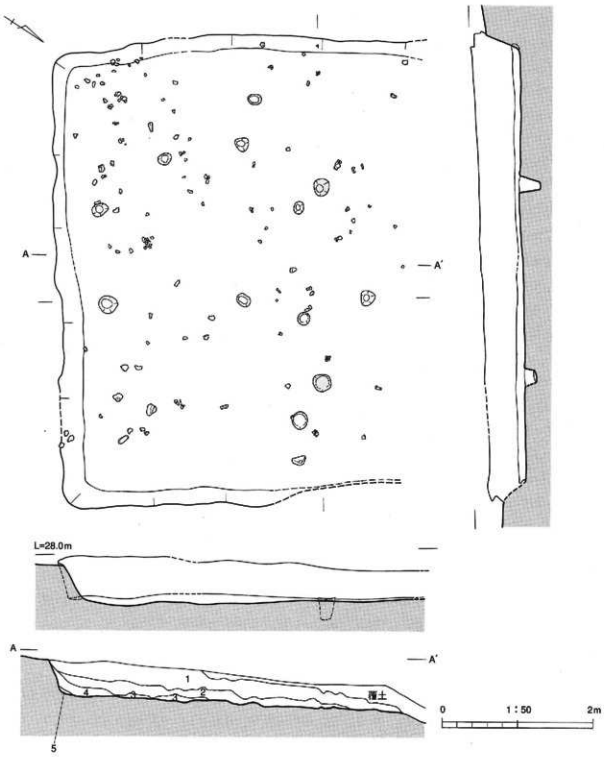
Ａ－①区の東側、岩礫混じりの第Ⅶ層面で検出した。主軸方位はＮ－58°－Ｅを指す。北東側壁は宮崎層群に掘り込まれ、北西壁面は地形の削平により検出できなかった。規模は一辺6.2ｍを測り、平面プランは残存部から長方形あるいは正方形と推定される。検出面からの深さは約0.4ｍで、床面はほぼ平坦である。床面中央寄りに検出した柱穴２基が主柱穴と思われる。規模は径20㎝、深さ15～25㎝を測る。土器小片が床面近くで散乱した状態で出土した。出土した弥生土器は埋土上位にあり、流れ込みのものである。

出土遺物は図22に示している。108は弥生土器の甕である。断面長方形の口縁部が「く」字形に開く。109と110は胴部上位の張る甕で、外面に著しいススの付着が見られる。109はハケ目が残る。111と112は甕の底部と思われる。111は平底でくびれを持ち、112は丸味のある小さな底を呈する。113と114は壺である。114は底部外面中央部を窪ませている。115～118は高坏である。115は深い坏部を呈し、屈折部に明瞭な稜を持つ。116と117は同一個体の脚部で、細い脚柱部から屈折して浅い椀状に裾部が開く。117は器面が厚く、ラッパ状に開く裾部と思われる。119は口縁部が内湾する椀で、内外面に丹塗りの痕が見られる。120～126は鉢である。121は口縁部が外反し、122はやや上げ底を呈する。126は手捏ねである。127～130は須恵器である。127は甕の胴部片で、外面に格子目タタキ、内面に同心円の当て具痕が残る。128と129は坏蓋で、天井部と口縁部の境に稜を持ち、口縁端部に明瞭な段を形成する。130は壺の口縁部であろうか。131は研磨用の軽石と考える。132はヘラ状の磨製製品である。頁岩製で、全面に研磨が施されている。133は砥石、134は台石で、いずれも砂岩を利用している。

ＳＡ９（図23）

Ａ－①区の南東側、第Ⅶ層面で検出した。遺構の北西側壁面はＳＡ10を切り、北東壁面は削平されて検出できなかった。主軸方位はＮ－50°－Ｗを指す。遺構の規模は長軸3.3ｍ、短軸推定3.0ｍを測り、平面プランは残存部から方形と考えられる。検出面からの深さは約0.25ｍで、床面はほぼ平坦である。主柱穴は南西側壁面沿いに２基、それと対を成して北東側に２基の合計４基と思われる。規模は径20～30㎝、深さ10～20㎝を測る。また、床面北西部に長軸0.95ｍ、短軸0.45～0.6ｍ、深さ0.2ｍを測る不整楕円形の土坑（ＳＣ６）を検出した。ＳＣ６からは弥生土器の甕（135）が出土しており、住居に伴う遺構ではないと思われる。遺物は南西側の床直上に分布が見られる。

出土遺物は図23に示している。135は弥生土器の甕である。口縁部に最大径を持ち、鉢状に口縁部が開く。上げ底を呈し、外面のほぼ全面にススが付着する。136は甕の底部と思われる。粘土に多くの小石粒が含まれ、内器面の剥落が著しい。137と138は高坏の坏部で、深い坏部を呈する。138は内外面ともミガキ仕上げである。139は椀で口縁部が外反する。140は鉢の底部と思われる。141は甕で親指大の把手



1　暗褐色土～硬質でしまり有り。岩盤粒（1cm程）多く含む。
2　にぶい暗褐色土～やや軟質。岩盤粒、炭化物粒、土器小片を含む。
3　にぶい暗褐色土～しまり有り。岩盤粒（3cm程）多く含む。
4　暗灰褐色土～しまり有り。岩盤粒、炭化物、土器小片を多く含む。
5　暗褐色土～岩盤粒を多く含む。

図21　ＳＡ８遺構実測図

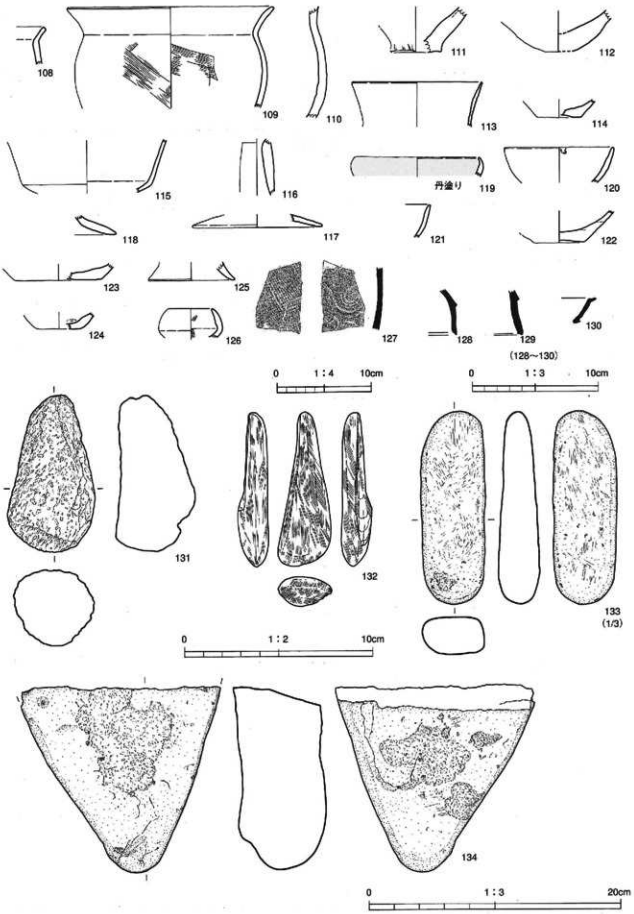


図22　ＳＡ８出土遺物実測図

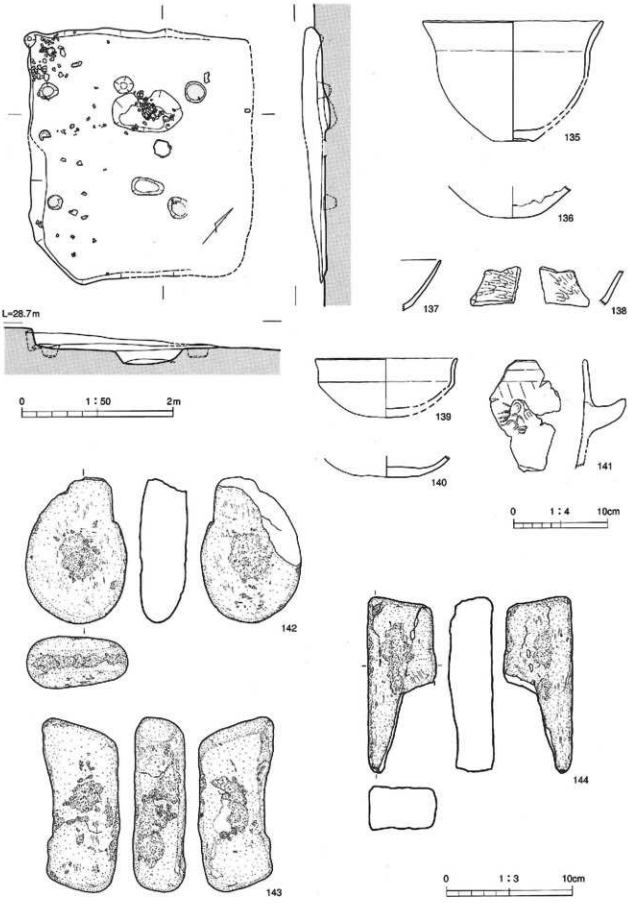


図23 SA9・SC6遺構及び出土遺物実測図

を持つ。142～144は敲石で、142は平面楕円形、143と144は平面長方形の扁平礫を使用している。石材は砂岩である。

SA10（図24）

南東壁面がSA9と接し、SA9に切られる。遺構の北東壁面は削平により検出できなかった。また、SB2との切り合い関係も確認された。主軸方位はN-45°-Wを指す。遺構の規模は長軸4.8m、短軸推定4.5mを測り、平面プランは南東壁のわずかな立ち上がりから推定すると方形と考えられる。検出面からの深さは南西側の最深部で約0.3mを測る。床面はほぼ平坦であるが、南西壁面沿いの幅約1mの範囲がわずかに低くなっている。柱穴配置から遺構中央寄りの4本が主柱穴と思われる。規模は径20～30cm、深さ10～70cmを測る。遺物は床面から約10cm程浮いた状態で出土している。

出土遺物は図25に示している。145～147は壺である。145は肩が張らず、口縁部が大きく開く。146と147は同一個体で、頸部に貼付刻目突帯が巡る土器である。148と149は甕の底部と思われる。150と151は壺の底部で150は厚手の平底、151は丸底を呈する。152は高坏の脚柱部である。153は口縁部が外反する椀である。154と155は鉢と思われ、丸底を呈する。156は須恵器の坏蓋である。天井部と口縁部の境に明瞭な稜を持ち、口縁部はやや外傾し端部にわずかに段を持つ。

SA11・SA15（図34）

A-①区の南東側、第Ⅶ層面で検出した。SA11とSA15は重複し、SA11の大部分がSA15により切られている。遺構のほとんどは削平により消失している。

SA11は南側コーナー及び主柱穴2本のみを検出した。主軸方位はN-45°-Wを指す。残存壁面と主柱穴配置から、平面プランは方形あるいは長方形と推定される。検出面からの深さは約0.15mを測る。主柱穴はSA15の床面上で検出した。規模は径25～35cm、検出面からの深さ20cmを測る。主柱穴の北東側に焼土が確認され、住居に伴うものと思われる。

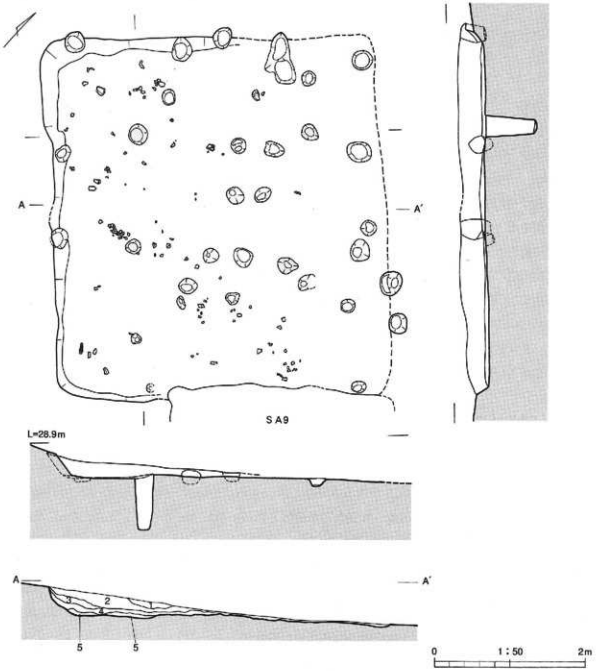
SA15は南西壁面を含む一部しか検出できなかった。主軸方位はN-77°-Wを指す。遺構の規模は一辺4.1mを測る。検出面からの深さは約0.15mである。床面はほぼ平坦であるが、西壁面沿いの幅約1mの範囲がわずかに低くなっている。主柱穴は検出できなかった。

出土遺物は図34に示している。157と158は甕で同一個体と思われる。あまり膨らみを持たない胴部中位に最大径を持つと思われ、口縁部は緩やかにくびれて直口する。底部は平底である。159は高坏の坏部である。坏部が深く、口縁部は外傾して延びる。屈折部に明瞭な稜を持たない。

SA12（図27）

A-①区南東側の南西向き斜面に検出した。遺構は岩盤層及び第Ⅶ層に掘り込まれている。主軸方位はN-57°-Eを指す。平面形は隅丸台形プランを呈し、規模は長軸短辺3.1m、長辺3.8m、短軸3.0mを測る。検出面からの深さは最深部で0.5mを測る。主柱穴は検出できなかった。埋土の第4層に焼土が見られるが、住居の南側中層程に焼土層が確認された。また、南西隅の床面にも焼土の広がりが見られた。遺物は床面から5～20cm程浮いた状態で出土し、北側ほど出土レベルが高くなる。

出土遺物は図28に示している。160は甕である。口縁部に最大径があり、口縁部はやや緩やかにくびれて外傾して延びる。胴部上位に膨らみを持ち、尖底を呈する。161と162は壺の頸部から肩部である。球



1　暗褐色弱粘質土～ややしまり有り。岩盤粒（3cm程）を含む。
2　暗褐色弱粘質土～しまり有り。岩盤粒（1.5～2cm）を多く含む。炭化物粒をわずかに含む。
3　ややにぶい暗褐色土～しまり有り。岩盤粒（1.5～2cm）を2層より多く含む。炭化物粒をわずかに含む。
4　にぶい暗褐色弱粘質土～しまり有り。岩盤粒（1～3cm）を多く含む。下層に炭化物粒を多く含む。
5　にぶい暗褐色弱粘質土～ややしまり有り。岩盤粒（1cm程）を含む。炭化物粒を多く含む。

図24　SA10遺構実測図

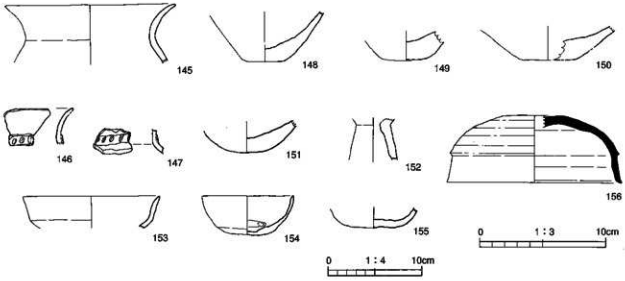


図25　ＳＡ10出土遺物実測図

胴形を呈し、口縁部が直口またはやや外傾すると思われる。162がより屑部が張る。163と164は高坏である。163は坏部が深く椀状を呈する。164は「ハ」字状に開く脚柱部である。165は砥石で、上面平坦部に擦痕、上下両端に敲打痕がある。石材は砂岩である。166は板状を呈した砥石で、利用石材は粘板岩である。

ＳＡ13（図29）

Ａ－①区の北東側、第Ⅲ層面で検出した。主軸方位はＮ－58°－Ｅを指す。平面プランは、規模が長軸4.6ｍ、短軸3.9ｍの長方形を呈する。検出面からの深さは最深部で約0.5ｍを測り、床面はほぼ平坦である。主柱穴は遺構の中央部に２基検出した。規模は径25～35㎝、深さ30～40㎝を測る。遺物は床面直上あるいは若干浮いた状態で、東寄りに集中している。

出土遺物は図30～32に示している。167～179は甕である。167と168は緩やかに屈曲したＬＩ縁部に貼付刻目突帯を持つものである。胴部にあまり張りを持たず、口縁部は外傾してわずかに開く。口唇部は平らに仕上げている。167は平底で、胴部外面全体にススが付着する。169は胴部上位に膨らみを持ち、口縁部は緩やかにくびれて外傾して延びる。底部は厚手の丸底気味平底を呈する。外面には著しくススが付着し、底部内面には著しい黒変が見られる。170と171は同一個体である。胴部中位に最大径を持つ球胴形を呈する。口縁部はくびれて上方に延びる。平底を呈する。172と173は小型の土器である。口縁くびれ部に明瞭な稜を持たない球胴形を呈した土器で、小さな平底を呈する。172の口縁部はやや外傾気味、173は外傾して大きく開く。174～179は底部である。丸底（174・175）、平底（176・177）、丸底気味平底（178）、平底で裾端部が張り出すもの（179）がある。180は多孔式甑で、底部には欠損のため３孔しか残存しないが、実際は４つの孔があると思われる。181～183は壺で卵状の胴部を呈する。181は二重口縁で、小さくくびれた頸部には貼付刻目突帯が巡る。底部は平底である。184～191は高坏である。坏部が深く屈折部に明瞭な稜を持つもの（187）と明瞭な稜を持たないもの（184・185）、坏部が浅く屈折部に明瞭な稜を持たないもの（188）、坏部がロート状を呈するもの（189）がある。脚部は「ハ」字状の脚柱部で屈折部に稜を持たずに裾部が開くもの（190）がある。192は丸底壺である。扁球形の胴部と内

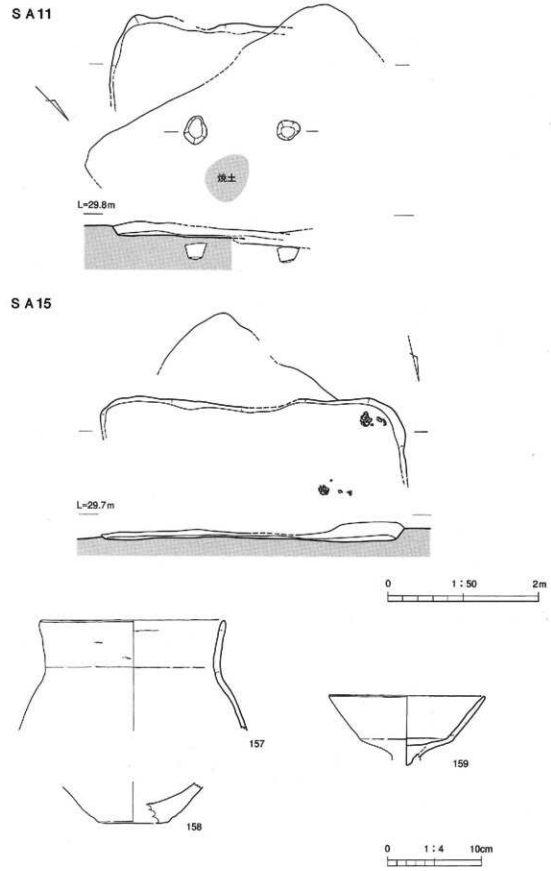
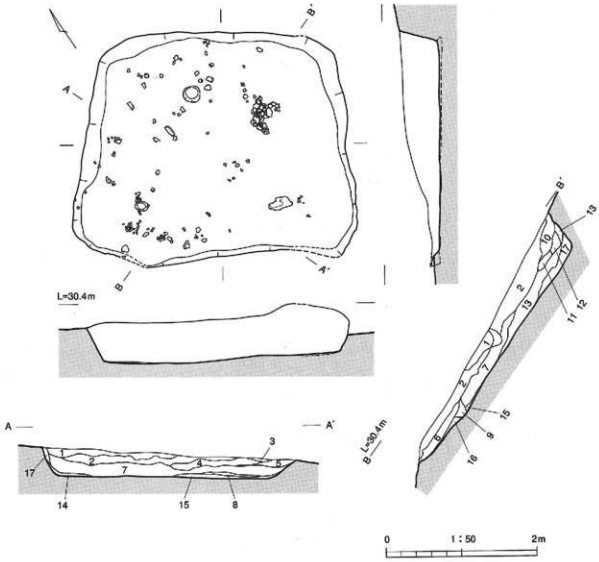


図26　SA11・15遺構及び出土遺物実測図



1　黒色土～軟質できめ細か。
2　褐色土～きめ粗か。ATを多量に含む。炭化物含む。
3　赤褐色粘土～硬くしまる。きめ細か。
4　暗褐色土～軟質できめ細か。岩盤粒（1cm以下）を多く含む。炭化物を含む。
5　暗褐色土～ややきめが粗い。岩盤粒（1～1.5cm）、土器片を多く含む。
6　褐色土～軟質でしまり有り。岩盤粒（1cm程）、土器片を含む。
7　にぶい橙黄褐色粘質土～しまり有り。岩盤粒（1cm程）わずかに含む。砦土塊（1～5mm）含む。
8　暗黄褐色土～軟質でしまり有り。ATを多く含む。後世の柱穴と思われる。
9　暗褐色部粘質土～ややきめが粗い。岩盤粒、土器片を少量含む。
10　黒色粘質土～岩盤粒、赤褐色粘土塊（3mm）を少量含む。
11　明黄褐色部粘質土～岩盤粒（0.5～1.5cm）を多く含む。
12　暗黄褐色土～きめ粗か。岩盤粒（1cm程）を多く含む。土器小片、炭化物を含む。
13　暗褐色粘質土～非常に硬くしまる。
14　褐色粘質土～硬質でしまり有り。黄色、赤褐色粘質土（2mm程）を少量含む。
15　黒色腐植質土～軟質土。
16　明黄褐色土～ややきめが粗い。岩盤粒（1～4cm）を非常に多く含む。炭化物量含む。
17　暗黄褐色土～しまり有り。後世の柱穴と思われる。

図27　ＳＡ12遺構実測図

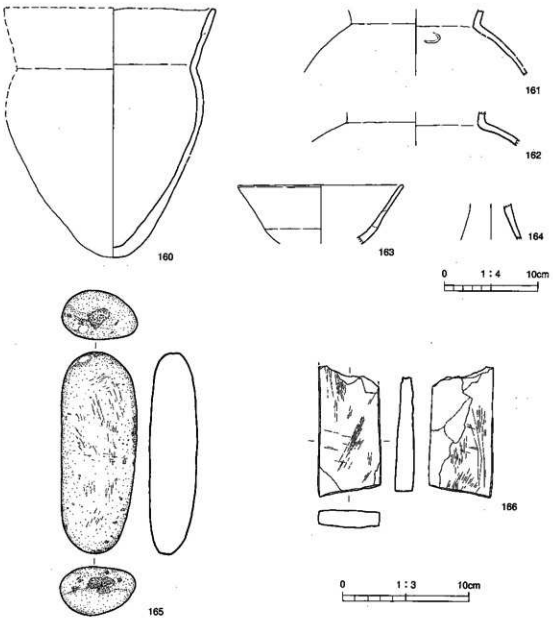
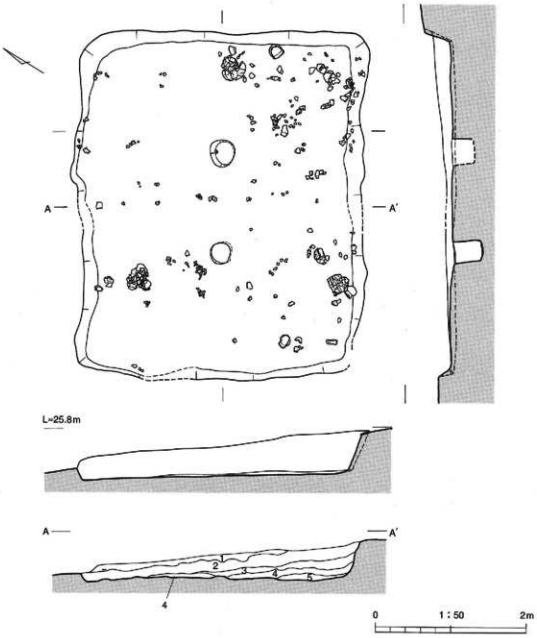


図28　ＳＡ12出土遺物実測図

湾気味に立ち上がる口縁部を呈する。193は小型丸底壺である。器壁は厚いが丁寧な成形がされている。194は小型壺の底部と思われる。外面底部をナデて窪ませている。195は粘板岩製の石庖丁である。丁寧な研磨で両刃を成形し、両端に擦り切りによる抉りを持つ。196は砂岩製の台石である。197は頁岩を利用石材とした剥片である。

ＳＡ14（図33）

Ａ－①区東端に位置し、ＳＡ６に切られる。主軸方位はＮ－70°－Ｅを指す。遺構の北西部は地形の傾斜により削平されている。遺構の規模は一辺7.0ｍを測り、平面プランは残存部から方形あるいは長方形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最深部で約0.3ｍを測り、床面はほぼ平坦である。主柱穴は馬蹄形状配置に４基検出したが、削平部を復元すると円形に並ぶものと思われる。主柱穴の規模は径20～30㎝、深さ10～20㎝を測る。また、南壁沿いの中央部に径60㎝、深さ10㎝の不整円形土坑を検出した。



1　暗黄褐色土～軟質でしまり有り。きめ細か。土器片含む。
2　褐色土～軟質でしまり有り。きめ細か。AT粒含む。
3　黄褐色土～軟質でしまり有り。きめ細か。AT粒含む。土器小片、炭化物を少量含む。
4　暗褐色砂質土～しまり有り。きめ細か。土器小片、炭化物を含む。
5　褐色土～しまり有り。きめ細か。土器片を含む。

図29　SA13遺構実測図

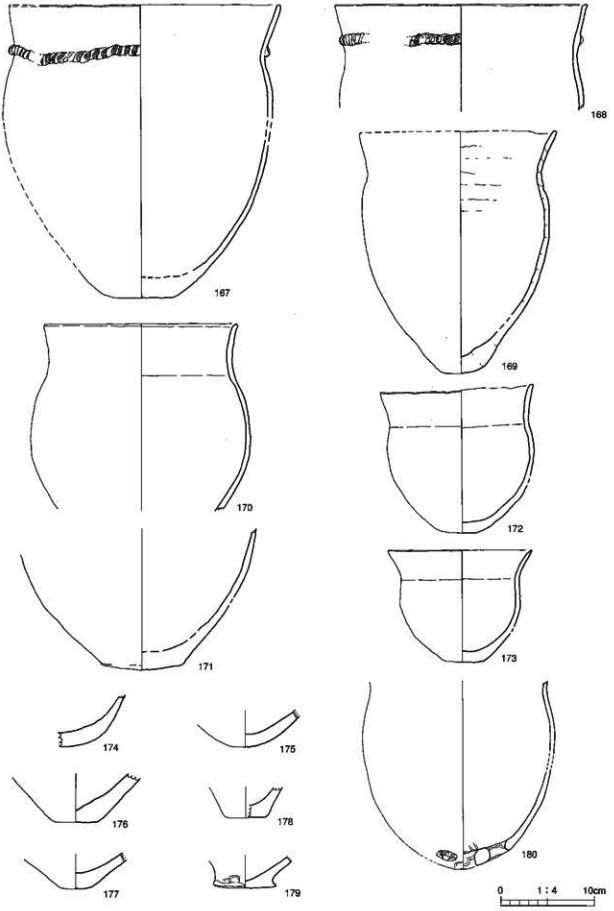


図30　SA13出土遺物実測図（1）

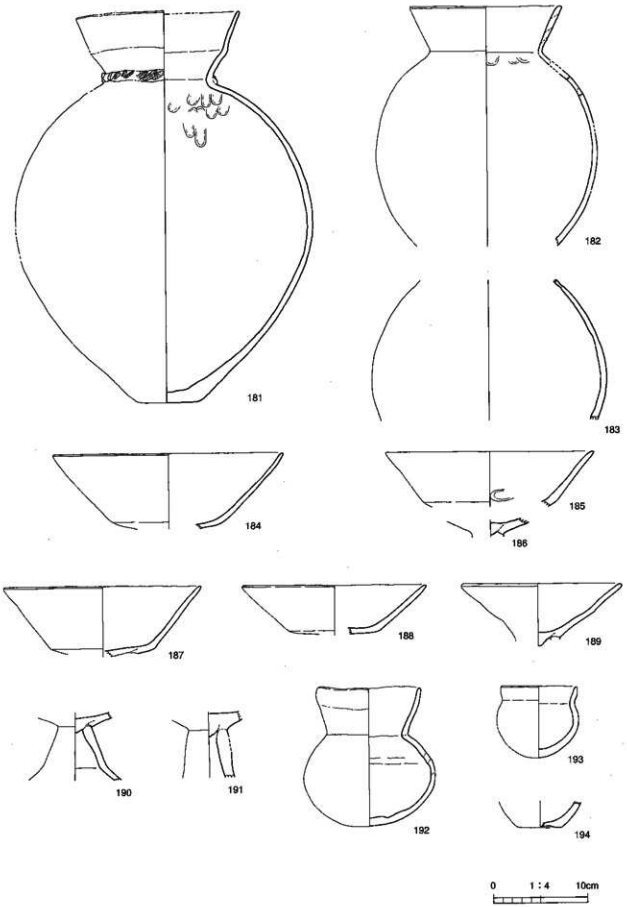


図31　SA13出土遺物実測図（2）

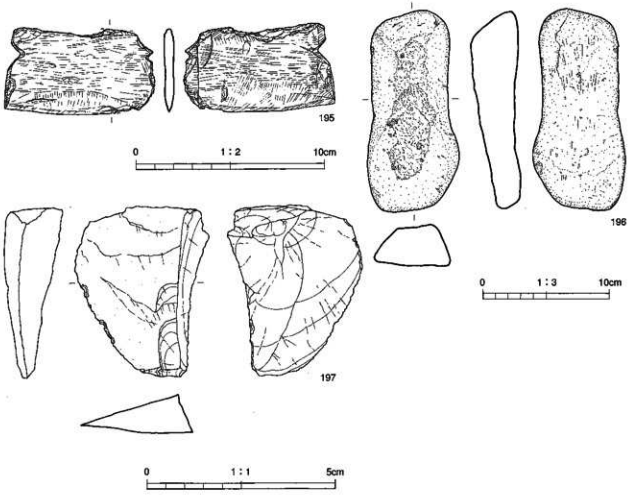


図32　SA13出土遺物実測図（3）

出土遺物は図33に示している。198は砂岩製の敲石で、両面中央部に敲打痕がある。199は須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は青海波文状の当て具痕が残る。

土坑（SC）

SC5（図34）

A－①区中央北側に位置しSA3と重複する。主軸方位はN－84°－Eを指す。遺構の西側は土層確認トレンチ掘り下げのため消失しているが、平面形は楕円形を呈するものと思われる。残存長軸1.3m、短軸0.75m、深さ約0.2mを測り、床面は東に傾斜する。遺構中央部に、ほぼ完形のつぶれた甕や壺が床面よりやや浮いた状態で出土している。傾斜地による土の流出でSA3との切り合いは確認できないが、202の壺とSA3出土の土器小片の接合が確認できることと出土遺物から見てSC5の方が古いと考える。

出土遺物は図34に示している。200は甕である。胴部中位よりやや上に胴部最大径を持ち、口縁部径とほぼ同じ大きさを測る。口縁部は「く」字形にくびれて内外面に明瞭な稜を持つ。底部は小さい平底を呈する。201は甕で小さい平底を呈する。202は卵形の胴部を呈する壺である。203と204は小型丸底壺である。205は高坏の坏部片で屈折部に稜が見られる。206は高坏の脚裾部である。

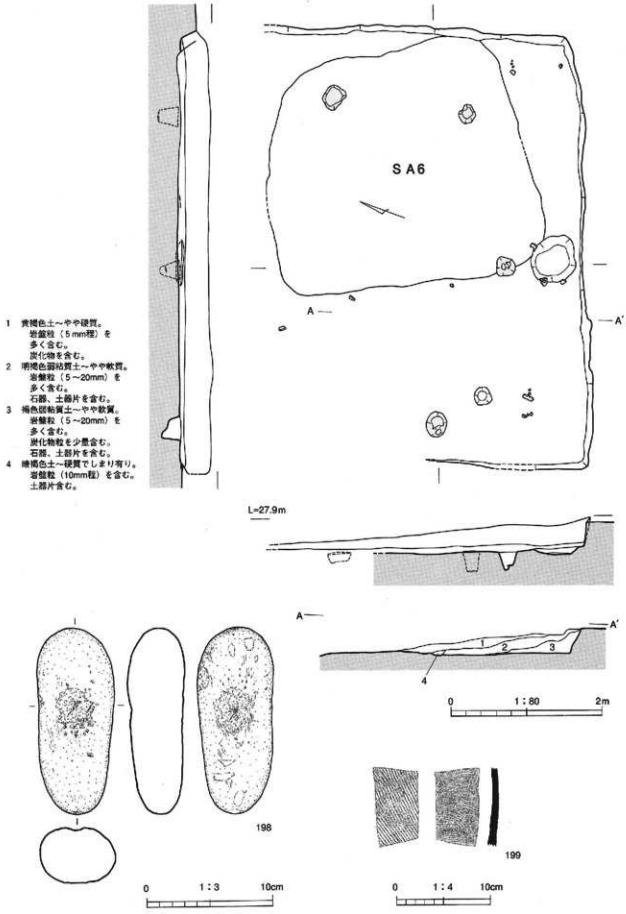


図33　SA14遺構・出土遺物実測図

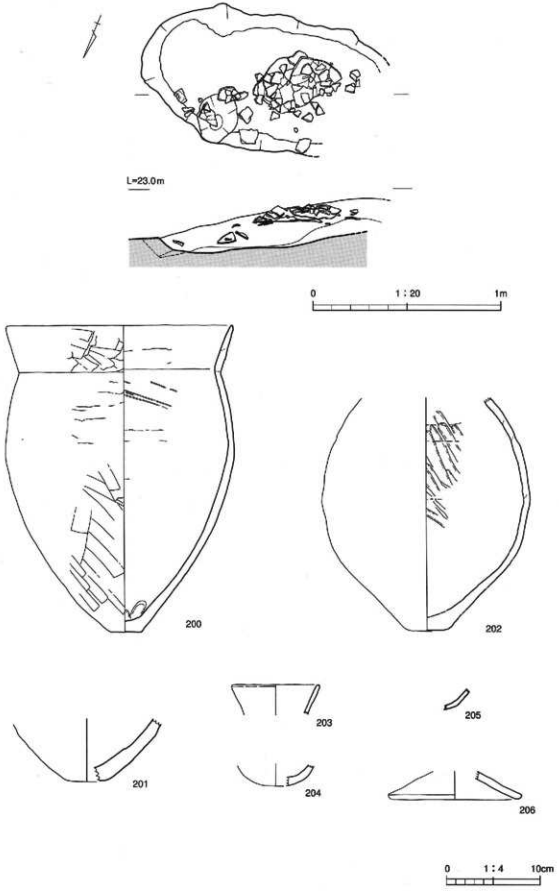


図34　A－①区ＳＣ５遺構・出土遺物実測図

遺構外出土の遺物

遺物分布は、A－①区西側の北西向き斜面C14・15、D15、E15グリッド、東側の住居が集中する平坦面とその北西下の谷側に位置するI15・16、J15～17、K15グリッドに見られる。出土層位は第Ⅲ層とⅣ層である。弥生土器の出土量は少なく、大半は竪穴住居と同じ時期の土師器である。わずかではあるが須恵器も出土している。

出土遺物は図35・36に示している。

207～213は弥生土器である。207と208は甕である。207は口縁部が「く」字形に屈曲し、ほとんど張らない胴部上位に断面三角形の貼付突帯が1条巡る。208は底部で、裾端部が若干張り出し上げ底を呈する。209～213は壺である。209は凹線文土器で、口縁端部に2条の凹線が巡る。210は壺の口縁部と思われる。外面に2条の貼付突帯と櫛描波状文が施されている。211～213は底部で、平底で立ち上がりが外湾気味のもの（211）、平底で立ち上がりが内湾するもの（213）、丸底気味のもの（212）がある。

214～259は土師器である。214～224は甕である。214と215は同一個体と思われる。胴部中位よりやや上に膨らみを持ち、口縁部は「く」字状に緩やかにくびれる。216～218は同一個体と思われる。胴部上位が張る土器で、外面には著しくススが付着する。219は口縁部に最大径を持ち、胴部があまり張らない土器である。220は球形の胴部を持つ小型の甕で、底部は丸底を呈する。外面底部中央部にわずかな窪みを持つ。221～224は底部で、平底のもの（221・222・223）、丸底気味の小さな平底で若干窪みをもつもの（224）がある。225～228は壺である。225と226は頸部に貼付刻目突帯を有する。227と228は丸底である。229～242は高坏である。坏部は深く、屈折部に明瞭な稜を持たない（229・230）。この他、231のように屈折部に明瞭な稜を持つものや坏部の浅いものも確認できる。232～242は脚部である。脚柱部が「ハ」字状を呈し、屈折部に明瞭な稜を持たずに裾部が広がるもの（232～235・241・242）、脚柱部にやや膨らみを持ち、屈折して裾部が広がるもの（236～238）がある。236は丁寧なミガキ、238は丹塗りが施されている。239～242は裾部である。239は椀状を呈し屈折部をもつ。240は端部を面取りしている。243～246は鉢である。243は浅鉢で、口縁部が内湾し外面胴部にススが付着する。246は高台状の底部を有する。247～256は丸底壺である。長い口縁部が大きく開くもの（247・250・251）、短い口縁部のもの（248・249・252）がある。253は扁球形の胴部を呈する。254は丸底、255は丸底で中央部が窪む。256は丸底気味の平底で中央部が窪む。257と258は小型の鉢である。259と260は須恵器である。259は坏蓋で天井部と口縁部の間に稜を持ち、口縁部は外傾する。260は坏身で立ち上がりが高く、端部に若干段が見られる。

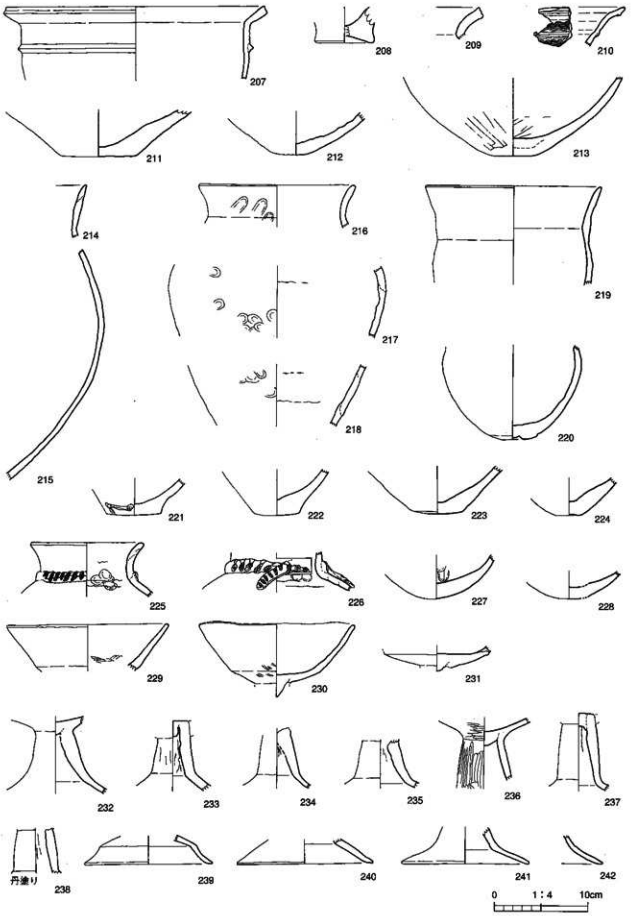


図35　A-①区遺構外出土遺物実測図（弥生～古墳時代）

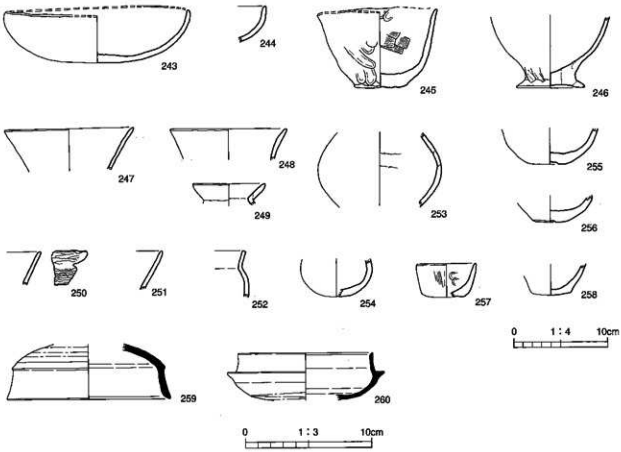


図36 A-①区遺構外出土遺物実測図（古墳時代）

（3）歴史時代の遺構と遺物

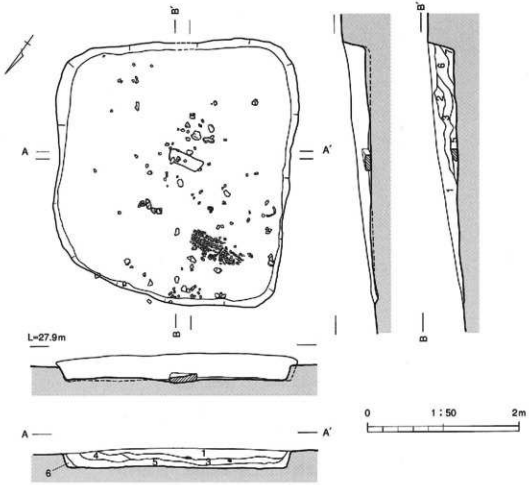
遺構はA-①区で古代の竪穴式住居跡を1軒、中世の土坑を1基検出している。また、A-②～④区には、中・近世の石塔群及び石塔の分布が見られる。遺物は土師器や須恵器の甕・坏、緑釉陶器、白磁、青磁、滑石製石鍋などが出土している。

竪穴式住居跡（SA）

SA6（図37）

A-①区東端に位置し、SA14と重複する。主軸方位はN-32°-Wを指す。平面形は隅丸台形プランを呈し、規模は長軸短辺2.8m、長辺3.6m、短軸3.1m、検出面からの深さは最深部で0.3mを測る。主柱穴は検出できなかった。床面中央に台石、西隅に炭化樹皮の塊が出土した。

出土遺物は図38に示している。261は甕の口縁部のくびれ部である。外面と口縁部内面にハケ状工具によるヨコナデが見られる。262～265は土師器坏である。いずれもヘラ切り底を呈する。266は鉢の体部から底部と思われる。267と268は同一個体の甕である。丸底で球形の胴部を呈する。269は壺の底部と思われる。270は高坏の脚柱部である。271は台石で、平面長方形の板状の砂岩礫を使用している。敲打と研磨作業での面の使い分けがされている。



1　暗灰褐色土～きめ細か。細かい岩盤粒を含む。
2　明黄褐色土～やや硬質。岩盤粒（2～3cm）を多く含む。炭化物をわずかに含む。
3　明褐色土～やや軟質。細かい岩盤粒を多く含む。炭化物を多く含む。
4　褐色土～やや硬質。岩盤粒をわずかに含む。
5　灰褐色土～岩盤粒を多く含む。
6　暗褐色土～岩盤粒を多く含む。
7　褐色細粒質土～岩盤粒を多く含む。

図37　SA6遺構実測図

土坑（SC）

SC3（図39）

A・①区中央部のG17グリッドに位置し、AT風成層面で検出した。遺構は南北軸1.7m、東西軸0.75m、深さ0.25mの隅丸長方形プランを呈する。上端と下端の主軸が若干異なるが、上端主軸はN-28°-Eを示す。埋土中位から土師皿や白磁碗の小片が出土している。

272は土師器の小皿でヘラ切り底を呈する。273は白磁碗で玉縁状の口縁を有する。

遺構外出土の遺物

遺物はA・①区西側北西斜面のC14・15、D15グリッド、東寄りの北側縁辺部I15、J15、K15グリッドに分布が見られ、第Ⅲ層及び第Ⅳ層から出土している。

出土遺物は図40に示している。

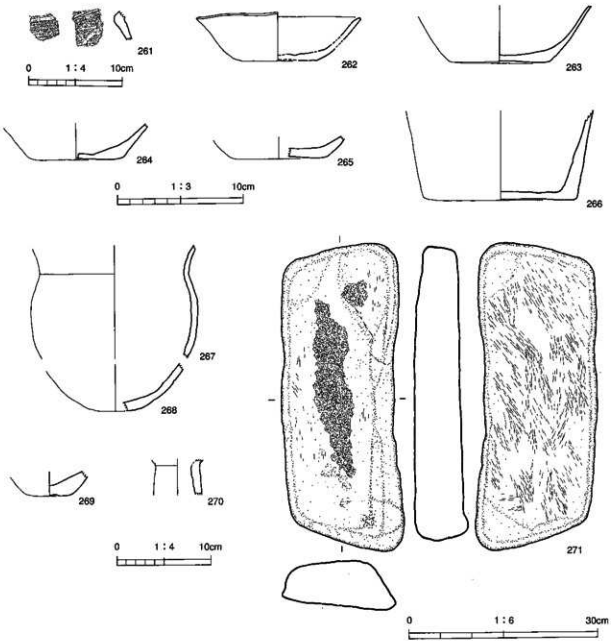
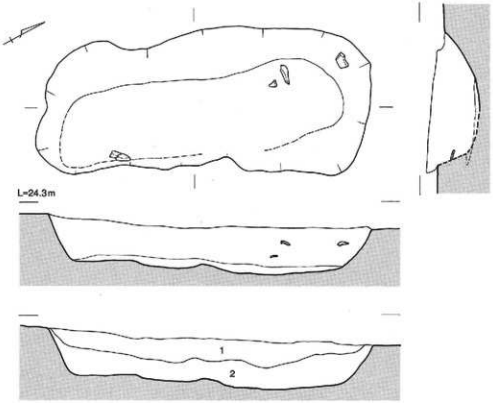


図38　SA6出土遺物実測図

274～290は土師器である。274～276は甕の口縁部である。胴部内器面を縦方向にケズリ上げ、屈曲部に稜を作り出す特徴を持つ。276は外面に著しくススが付着する。277～283は坏である。底部ヘラ切りで体部は直線的に延び、口縁部は外反する。278は須恵器の生焼けの可能性がある。280は丸味のある体部を呈し口縁部が外反する。内外面とも丁寧なミガキ仕上げである。281と282は円盤状高台、283は外傾する高台を呈する。284と285は黒色土器で内外面とも黒色化している。器面調整はミガキで、284は直立高台、285は外傾する高台を呈する。286は高台付鉢と考える。外面全体に丹が施されていると思われる。287は布痕土器である。288～290は糸切り底を呈する小皿である。

291～294は須恵器であるが、291と292は焼成不良である。291はヘラ切り底の坏で、体部が直線的に延びて口縁部がわずかに外反する。292は糸切り底を呈する皿と思われる。293は玉縁口縁を呈する椀である。白磁の模倣が考えられる。294は甕の胴部で外面は格子目タタキ、内面は同心円当て具痕が残る。



1　暗褐色土～しまり有り。ATブロックを少量含む。土器片含む。
2　褐色土～しまり有り。ATブロックを少量含む。

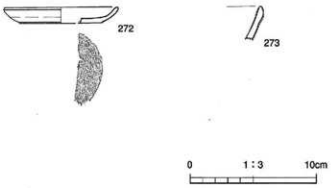


図39　A-①区ＳＣ３遺構・出土遺物実測図

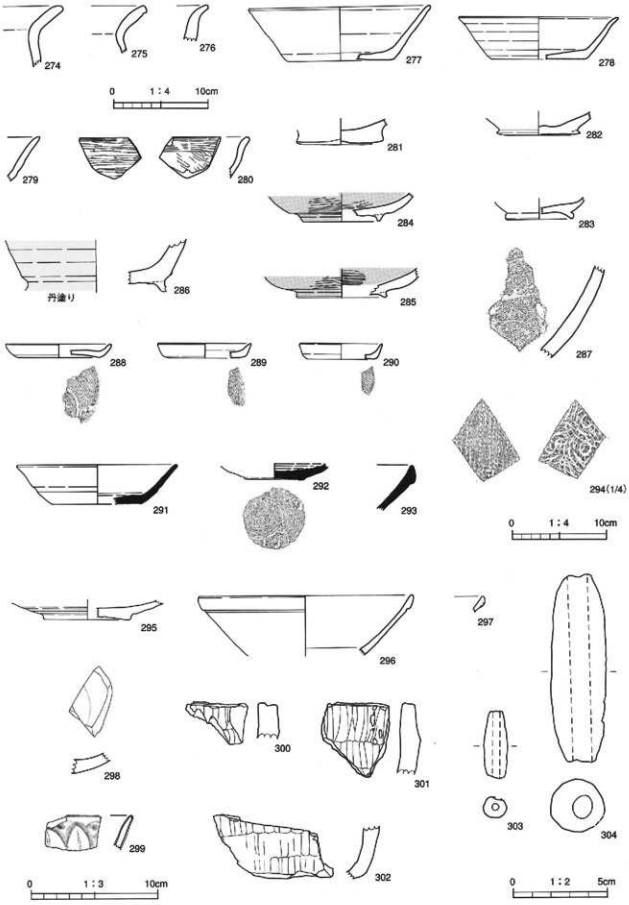


図40　A-①区遺構外出土遺物実測図（古代～中世）

295は緑釉陶器皿で、やや上げ底気味平底の削り出し高台を呈する。底部外面に圏線を有する。内外全面に施釉されている。9世紀後半。

296～298は白磁である。296と297は玉縁口縁を呈する碗で11世紀中葉～12世紀頃のものか。296は焼成不良で釉の発色が見られない。298は碗の体部下半で、内面見込みには1条の圏線状ヘラ描きがある。

299は龍泉窯青磁端反り碗である。外面体部に片切彫連弁文が描かれている。連弁は鎬をもつ。13～14世紀頃のものと思われる。300～302は滑石製石鍋である。鍔はなく、わずかに三角形突部を形成する。300は破損した石鍋を再加工・転用する際に使用された鋸の痕跡が残る。鋸の挽き溝の断面形はわずかに「W」字状を呈している。(1) 横挽き鋸を利用した可能性が考えられる。303と304は土錘である。

(1)「草戸千軒町遺跡調査研究報告書2」草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋　1998 広島県立歴史博物館

石塔群

調査区北側の東から北西方向に延びる標高16～30mの丘陵上に位置する。石塔は丘陵筋にある3つの頂部に確認され、A－②区、A－③区、A－④区と調査区の設定を行った（**図3**）。

A－②区は標高約30mの頂部で、西側が開口した馬蹄形状の土塁が巡る。土塁は内側裾部から50～60cmの高さがあり、土塁の内側裾部と上面に石塔の分布が見られる。土塁は自然地形を掘削して形成したもので、土塁内側は、厚さ約10cm程の表土を除去すると宮崎層群の岩盤に達する。土塁の西側が開口しているのは、北側にある参道からの入口と考えられる。石塔は五輪塔、板碑、宝塔、自然石等が総数約80基確認できる。完全なセットを成しているものはほとんどなく、二次的に設置されたものと思われる。土塁上の基礎石は北東側にL字状に4基、東側に2基、南東側に2基並び、元位置を保っていると思われる。東側基礎石の西側には、径5cm程の円礫が集中している。

A－③区は標高24.5mにある。北側寄りに川原石の分布が見られ、五輪塔の空・風・火・水・地輪をそれぞれ離れた位置で確認した。

A－④区は後世の道の造成により舌状丘陵地が分断され、島状を呈している。頂部は標高16mを測る。板碑や五輪塔の空風輪を斜面で確認した。

石塔の一部を図示する。（**図43～48**）

305～329はA－②区の石塔である。305～308は板碑である。305は正面に胎蔵界大日如来（ア）の梵字とその下に「為一字頂多躰理阿弥陀佛聖霊位」が刻字されている。また、「天正～」などの墨書も確認できるが風化のため判読は困難である。背面には金剛界大日如来（バン）の梵字が刻まれる。306は半分が折れ、4面に墨書が見られる。4面とも「空風火水地」が記され、正面には判読不明の梵字と「告慶長八～」の文字が見られる。307は月輪の中に墨書痕がわずかに残る。308は額部から上が折れたもので、正面に「宗～」の墨書が確認できる。309～311は3個体が積み上げられた状態で位置していた。全く別個体から成るもので、309は宝塔の相輪部分、310は二重円の線刻を軒4面に持つ五輪塔の火輪、311は306と同一個体の板碑の基部である。折れた後基礎として再利用したものか、受部状の窪みが見られる。312と313は五輪塔の空風輪である。314は基礎石で、2面に連弁が彫刻される。315～317、318～321、322～324、325と326、327～329はセットで積まれていたものである。315は五輪塔の火輪と思われる。軒4面に梵字の墨書が見られる。316は方柱状の石で枘穴を持たない。石には加工に伴う鑿痕が残る。317は基礎石で、石を加工する際の鑿痕が見られる。318～321は伊東塔と呼ばれるものである。宝塔を簡略化し変形したもので、伊東氏関係の人の墓に多く見られる造りからこう呼ばれる。318は宝珠部分を

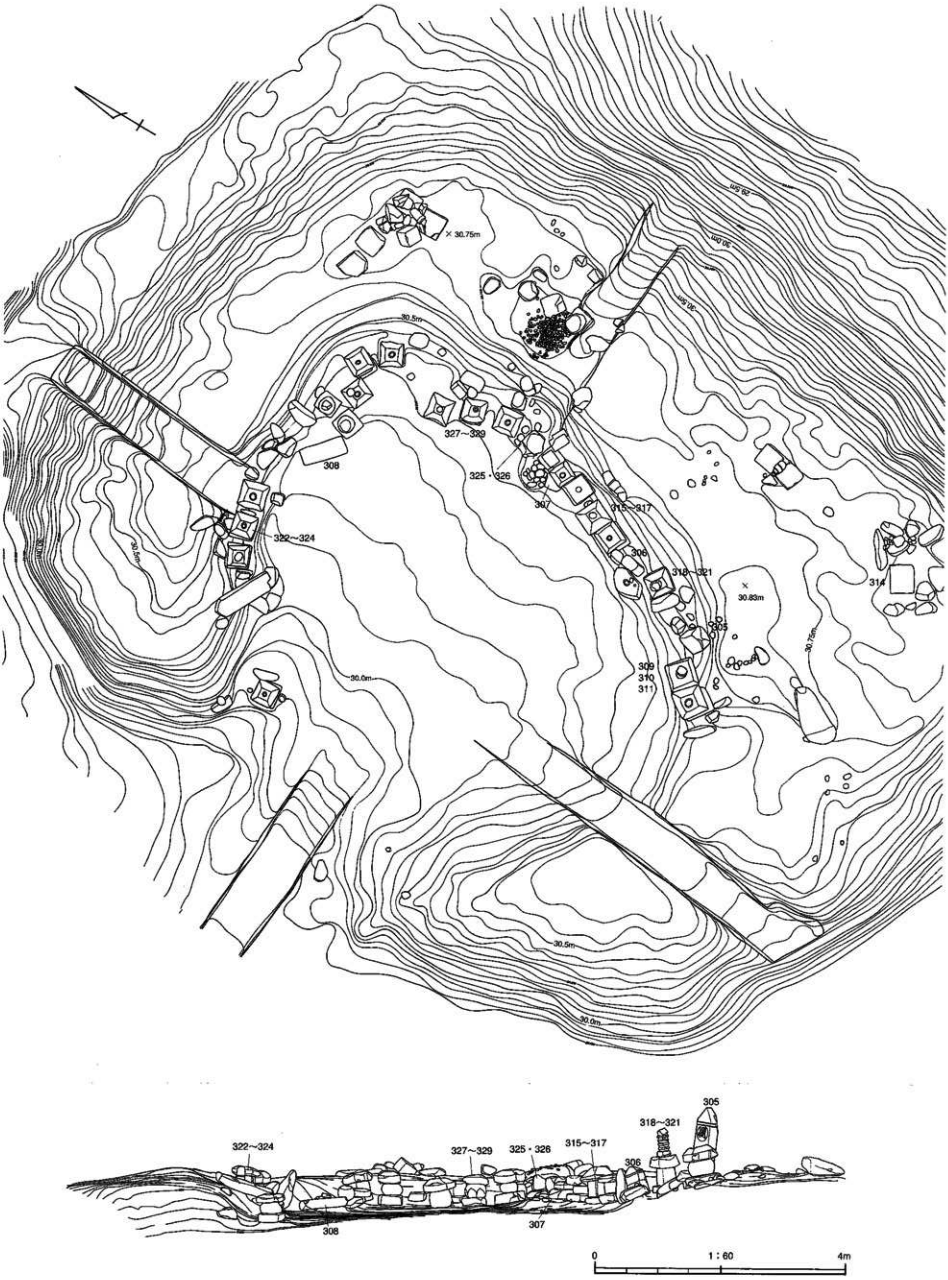


図41　A－②区石塔群実測図

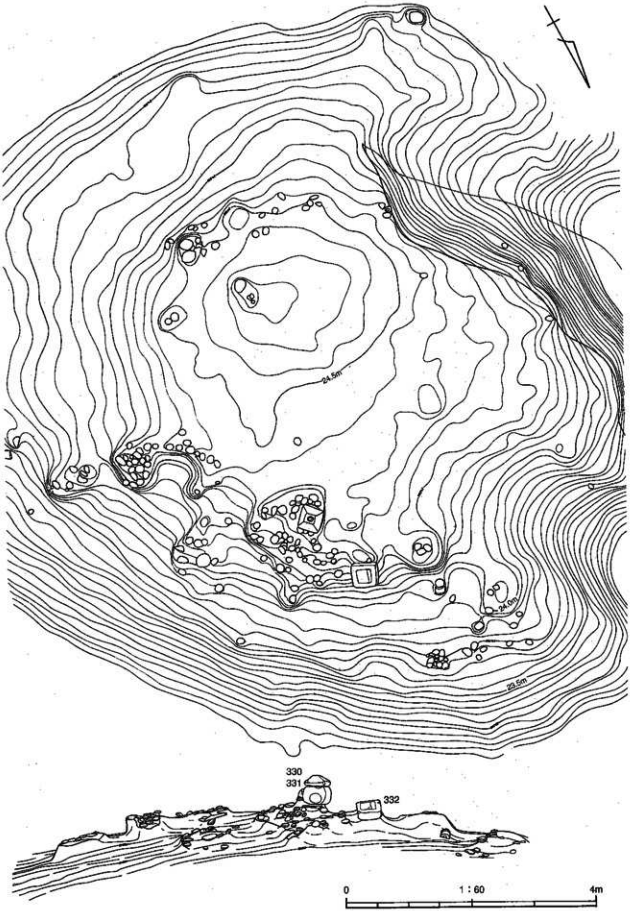


図42　A－③区石塔群実測図

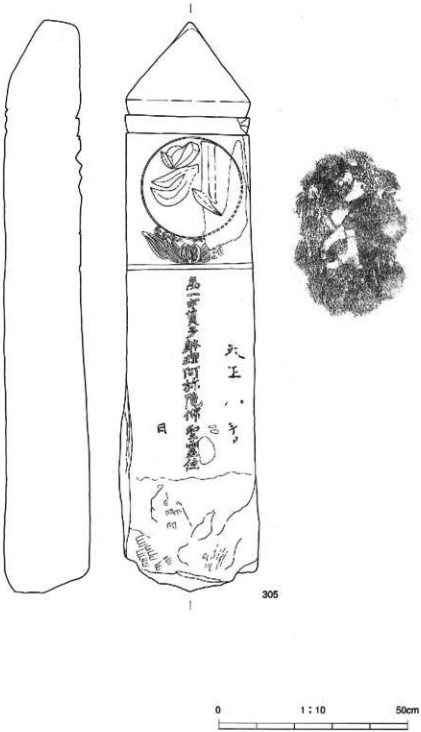
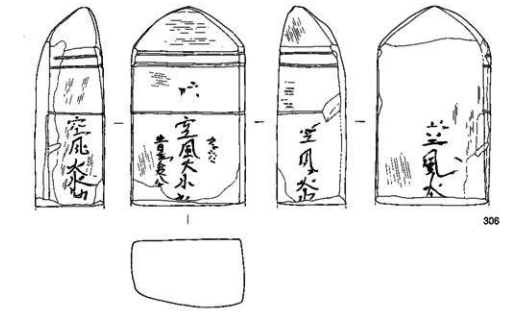


図43　石塔実測図（1）



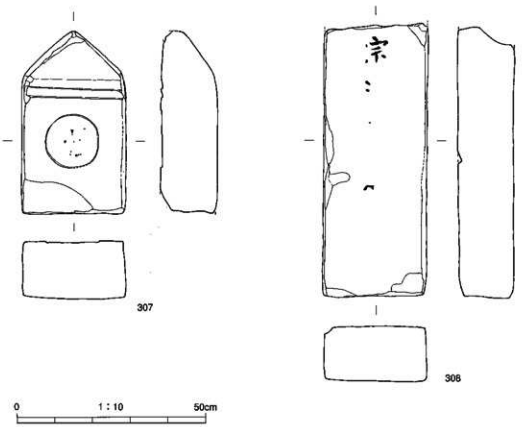


図44　石塔実測図（2）

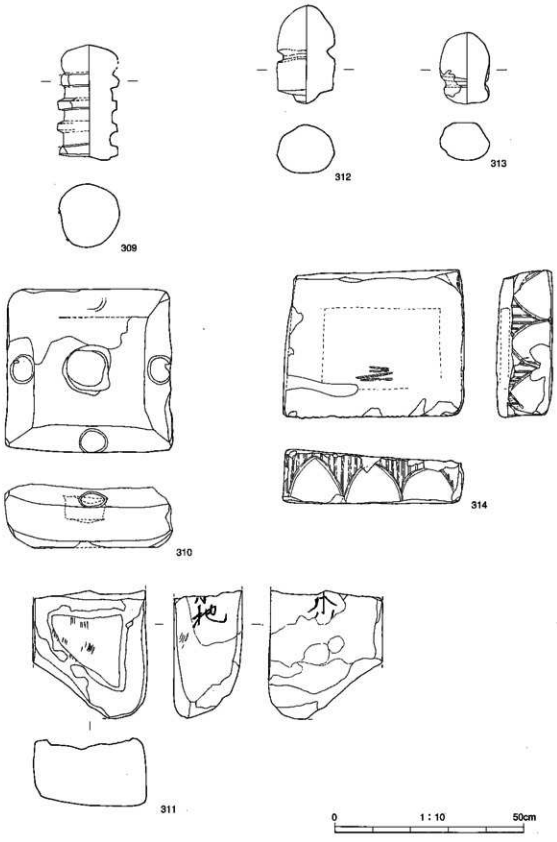


図45　石塔実測図（3）

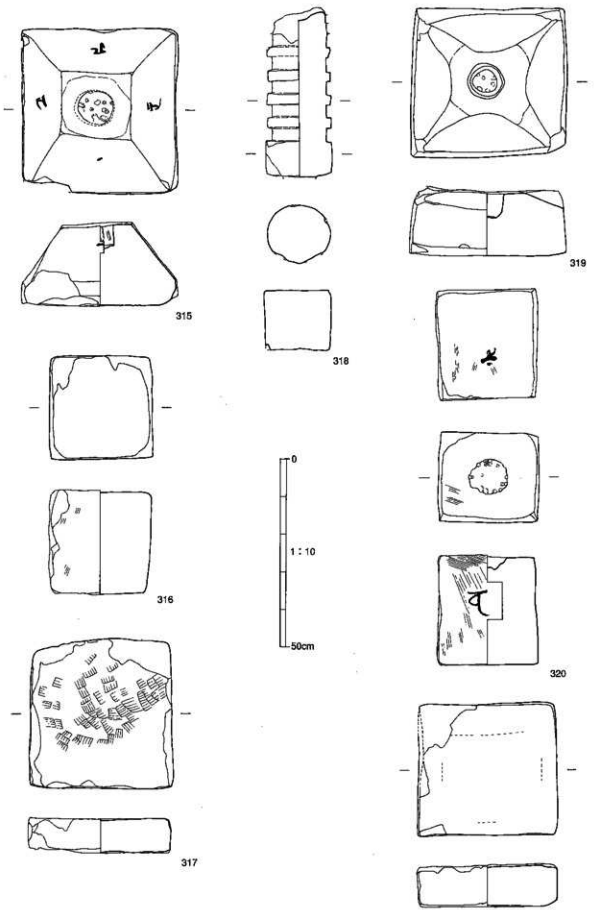


図46　石塔実測図（4）

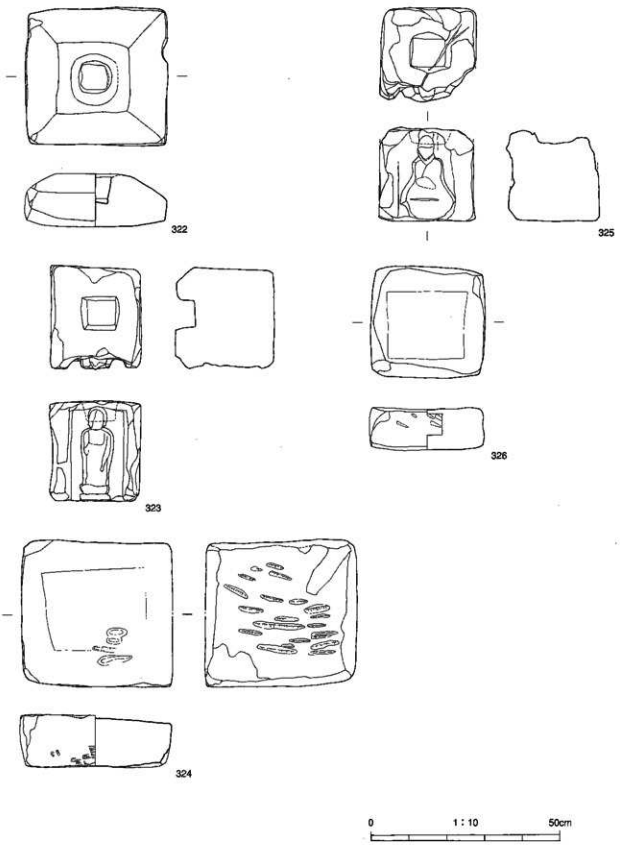


図47　石塔実測図（5）

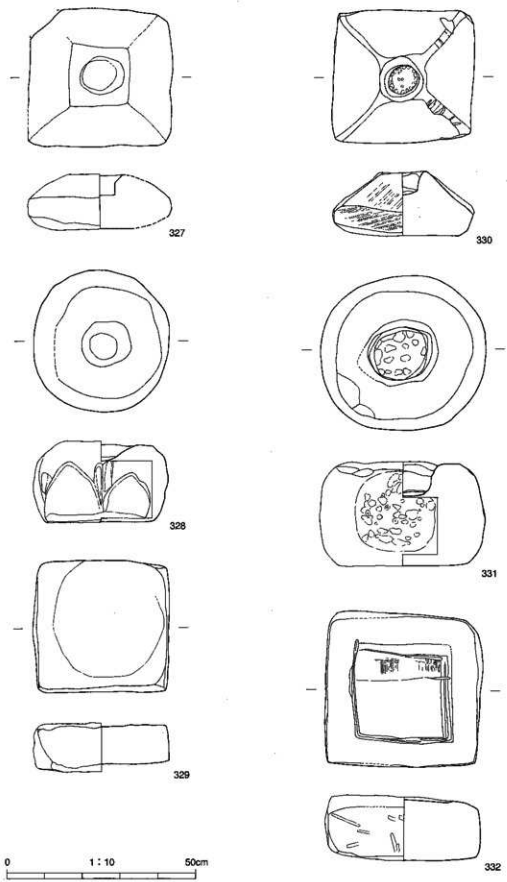


図48　石塔実測図（6）

欠損した相輪である。319は屋根、320は方柱状の石で納骨孔？を持つ。墨書の梵字が２面に残り、石を加工した鏨痕が見られる。321は基礎である。322は五輪塔の火輪か。323は方柱状の石に立像仏が彫られ、方形の納穴を持つ。324は基礎で鑿痕が残る。325は座像仏の彫られた方柱状の石である。326は基礎石である。327は五輪塔の火輪、328は水輪、329は地輪であろうか。328は連弁が彫刻され、円形の納骨孔を持つ。330～332はＡ－③区で確認された石塔である。330は五輪塔の火輪で、石を加工する際の鏨痕が残っている。331は五輪塔の水輪で、円形の納骨孔を持つ。石の加工時にできたものと思われるが、周囲に２つの平坦面が見られる。332は五輪塔の地輪で受部の窪みを持つ。

（4）時期不明の遺構と遺物

土坑（ＳＣ）

ＳＣ１（図49）

Ａ－①区西側に位置し、第Ⅳ層及び第Ⅴ層面で検出した。規模は長軸0.96ｍ、短軸0.78ｍで、不整円形プランを呈する。床面は中央がピット状に落ち込む。一段目までの深さは0.4ｍ、ピットはそこから0.16ｍの深さを測る。ピット上で333の砂岩製敲石が出土した。

ＳＣ２（図49）

Ａ－①区西側、ＳＡ１の東隣りに位置する。第Ⅳ層及び第Ⅴ層面で検出した。規模は長軸0.88ｍ、短軸0.82ｍ、深さ0.65ｍを測り、平面プランは不整円形を呈する。

ＳＣ４（図50）

Ａ－①区中央付近、第Ⅳ層面で検出した。規模は長軸2.3ｍ、短軸1.0ｍ、深さ約0.4ｍを測り、隅丸長方形プランを呈する。遺物は出土していない。

ピット（Ｐ）群と出土遺物

調査区平坦部でピット状遺構を検出しているが、建物として並ぶものは少ない。

出土遺物を図50に示している。334はＰ15出土で高台付坏の黒色土器である。丁寧なミガキ仕上げである。335はＰ16出土の砂岩製敲石である。

掘建柱建物跡（ＳＢ）

ＳＢ１（図51）

Ａ－①区の東側に位置し、ＳＡ10と重複する。建物は２間×２間の規模で、主軸はＮ－49°－Ｅを示す。規模は桁行3.9～4.0ｍで、西側柱間は北から1.9ｍ、2.0ｍ、東側柱間は2.0ｍである。梁行は2.6ｍで北側柱間は西から1.25ｍ、1.35ｍ、南側柱間は西から1.5ｍ、1.1ｍを測る。柱穴は径20～30㎝の円形や楕円形を呈し、検出面からの深さは15～30㎝である。

出土遺物はＰ１から須恵器皿の口縁部（336）、Ｐ２から土錘（337）が出土している。

ＳＢ２（図51）

Ａ－①区のＥ16・Ｆ16グリッドに位置する。Ｌ字状に並ぶ北側３間、西側３間を検出したが、対面す

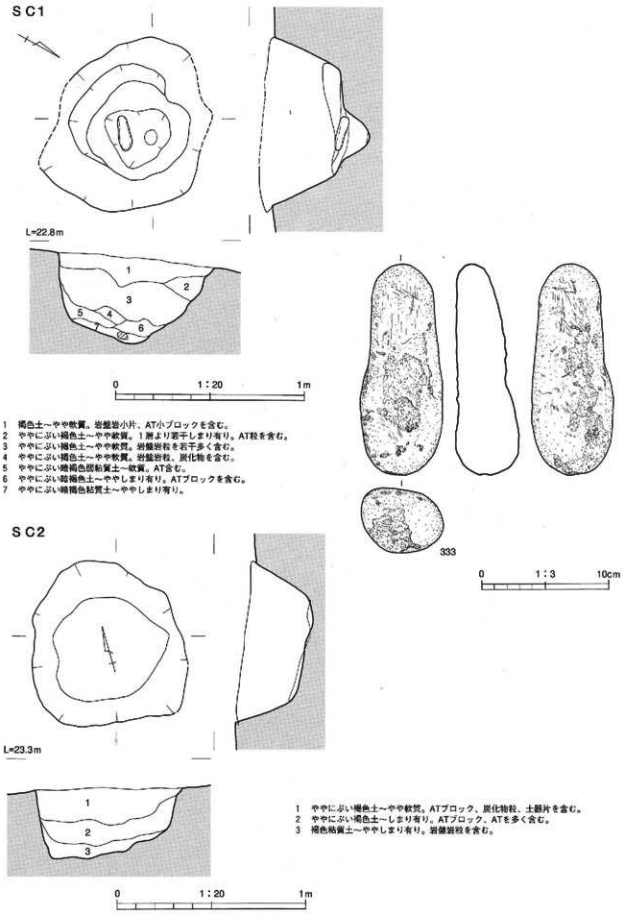
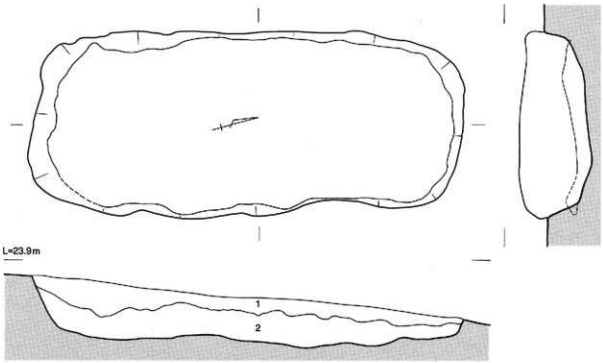
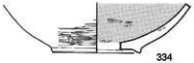


図49 A-①区ＳＣ１遺構・出土遺物及びＳＣ２遺構実測図



1 褐色土～きめ細か。乳白色・黄褐色ブロック（AT？）含む。
2 暗褐色土～ATブロックを多く含む。

0 1：20 1m



0 1：3 10cm

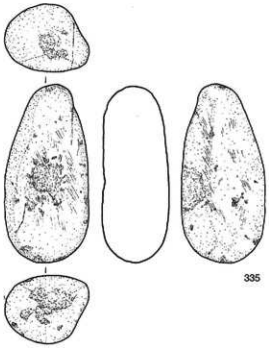


図50　A-①区ＳＣ４遺構及びピット出土遺物実測図

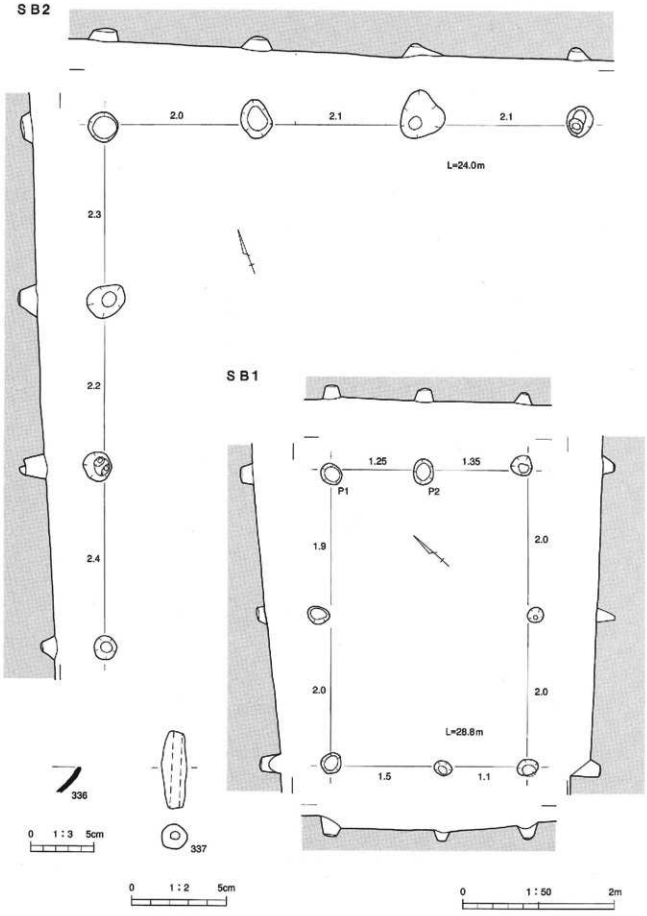


図51　ＳＢ１遺構及びＳＢ２遺構・出土遺物実測図

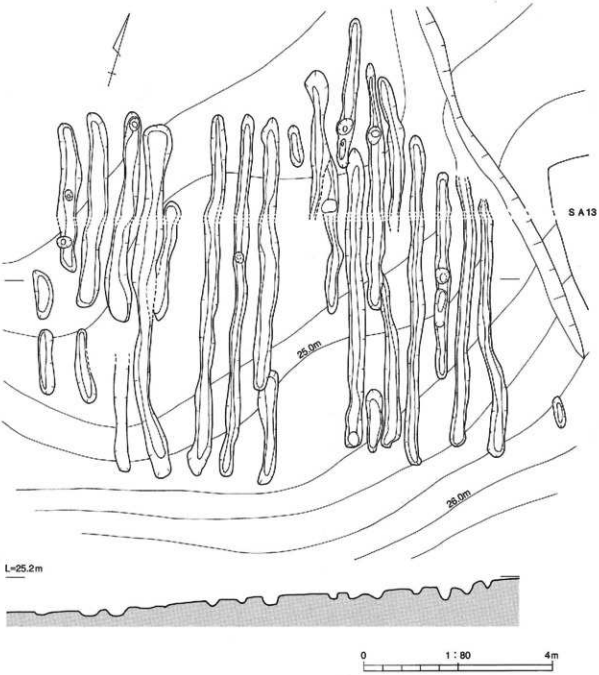


図52　畝状遺構１実測図

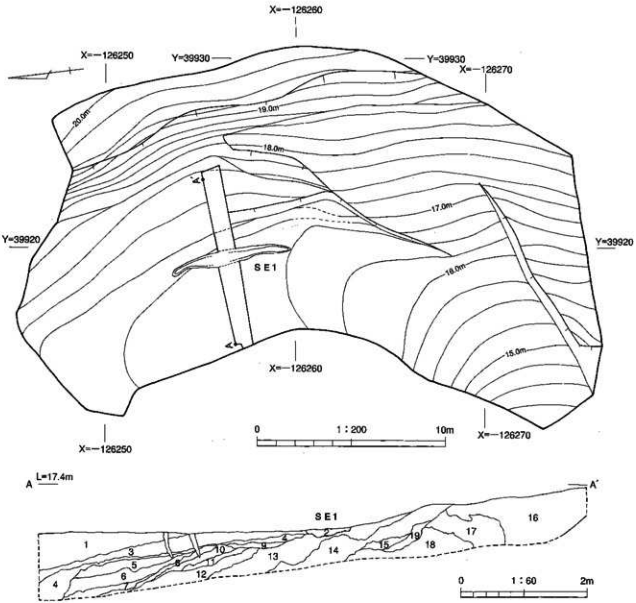
る柱列は確認できなかった。柱穴は地山の宮崎層群（岩盤）を掘り抜いている。規模は東西6.2ｍで柱間は西から2.0ｍ、2.1ｍ、2.1ｍ、南北6.9ｍで北から2.3ｍ、2.2ｍ、2.4ｍを測る。柱穴は径が30～50㎝の円形または不定形で、検出面からの深さは20～35㎝である。埋土はシルト質土である。

畝状遺構（図６・52）

Ａ・①区北西側縁辺部に畝状遺構１、中央に畝状遺構２を検出した。第Ⅲ・Ⅳ層面で暗褐色土の筋（小溝）として捉えられる。小溝は等高線に直交するもので、溝と溝の間は狭い。埋土は第Ⅲ層土に第Ⅳ層土小ブロックが混在するものである。畝状遺構２はＳＡ３上で検出されたが、詳細な時期については不明である。また、栽培種も明らかにされていない。

第2節　B区の調査

B区は西側谷に向かって傾斜する斜面中腹に位置する約455㎡のテラス面である（**図53**）。時間の都合上、表土剥ぎ取り面と土層確認のみの調査となった。遺構は地形に沿って北から南に延びる溝状遺構1基（ＳＥ１）である。長さ6.4ｍ、最大幅0.8ｍ、深さ0.1ｍを測り、断面形は皿状を呈する。自然流路と思われる。東側傾斜地はＡＴ層などの崩落、西側は土器小片を含む層の堆積が確認できた。



1　褐色土～しまり有り。白ボラを含む。
2　褐色土～しまりなし。白ボラを含む。
3　暗褐色土～ややしまり有り。白ボラを含む。
4　暗褐色土～ややしまり有り。きめ細か。白ボラを含む。
5　黒褐色土～ややしまり有り。高原スコリアを含む。
6　黒色土～ややしまり有り。高原スコリアを含む。
7　黒褐色腐植質土～ややしまり有り。高原スコリアを含む。
8　黒褐色土混褐色土～ややしまり有り。高原スコリア、遺物を含む。
9　黄褐色土～ややしまり有り。AT、遺物を含む。
10　黄褐色土～しまり有り。AT、遺物を含む。
11　黄褐色土～ややしまり有り。AT、遺物を含む。
12　明褐色土～しまり有り。ATを含む。
13　褐色腐植質土～しまり有り。ATを含む。
14　褐色腐植質土～しまり有り。AT、岩盤小礫を含む。
15　明褐色シルト質土～AT、岩盤小礫を含む。
16　明褐色土～しまりなし。AT、小林軽石混暗褐色土を含む。
17　暗褐色粘質土～しまりなし。AT、小林軽石混暗褐色土を含む。
18　明褐色土～しまりなし。ATを多く含む。暗褐色土を含む。
19　暗褐色土～しまり有り。ATを若干含む。白色砂粒を含む。
※　1～4：基本層序第Ⅰ層　5～8：基本層序第Ⅱa層　9～11：基本層序第Ⅳ層

図53　B区地形図

第3節　C区とC区テラスの調査

C区とC区テラスは調査区西側に位置し、「コ」字形の丘陵地に囲まれた低地部である。遺構は古代や近世の溝状遺構2条、土坑8基、ピット状遺構を検出した。遺物は谷の中央筋に集中が見られ、弥生～古墳時代、古代～中・近世の遺物が多く出土している。また、試掘調査時の植物珪酸体分析でヒエやイネのプラント・オパールが検出され、水田跡やはたけ跡が存在する可能性が指摘されたが、調査面の設定と時間の都合上の問題から遺構を面的に捉えることができなかった。

(1) 水田跡とはたけ跡について

植物珪酸体分析では、C区テラスのⅠ12グリッド付近の第Ⅲb層黒色粘質土層下部にヒエ、C区E9グリッド付近の第Ⅱ・Ⅲb層にイネのプラント・オパールが高い密度数値で確認された。上記の通り遺構を面的に捉えることはできなかったが、C区トレンチの土層断面で水田の畦畔的高まりを確認することができた（**図55**）。アミ8層部分が基本層序の第Ⅲb層に相当する。畦畔はアミ8層面に伴うもの（畦畔①・②）とその下層に擬似畦畔と思われる高まりを2箇所（擬似畦畔③・④）確認できる。

(2) 縄文時代の遺物

遺物はD11・12、E11、G10、H14、Ⅰ13グリッドで数点の土器片が出土しているだけである。遺物は小片で風化が著しいことから時期の判別は難しいが、黒色磨研系の後期の土器を中心としている。遺物の出土地がA-①区の縄文土器出土範囲下にあることや出土遺物の密度が薄いことなどから、流れ込みの可能性が大きいと思われる。

出土遺物は**図5**に示した**11**である。深鉢の胴部片と思われる。丸味のある胴部を呈し、外面に横位の浅い沈線が見られる。内面は横方向のナデである。

(3) 弥生時代から古墳時代の遺物

遺物包含層の掘り下げが全体に及んでいないため、正確な遺物分布を示すことはできないが、遺物はD10、E10・11・12、F10、H10・11・14グリッドで出土している。特にE11・12とH10・11に集中するが遺構の確認はできず、A区からの流れ込みと思われる。

出土遺物は**図56・57**に示している。

338～342は弥生土器である。**338**は貼付刻目突帯を持つ甕の胴部片で、下城式土器と思われる。**339**は突帯を貼り付けて口縁部を形成する甕である。**340**と**341**は甕の底部である。やや厚みのある平底で、**340**はハケ目仕上げである。**342**は壺の口縁部と思われる。頸部から大きく開く口縁端部外面に断面長方形の突帯を貼り付け、内面屑折部に断面三角形の突帯を貼り付け鍬先状口縁を形成している。

343～371は土師器である。**343～348**は甕である。胴部上位に最大径を持ち、口縁部は「く」字形にくびれて明瞭な稜を形成する（**343～345**）。**343**は外面平行タタキで尖底気味丸底を呈する。**344**は胴部上位に格子目タタキが見られる。**345**は器壁が薄い。**346**は胴部が張らず口縁部径とほぼ同じ大きさを測る。**347**は尖底気味丸底、**348**は平底で木の葉圧痕が見られる。**349**と**350**は甑で、**349**は耳状の把手である。**351～358**は壺である。**351**と**352**は二重口縁壺で、**351**は内傾する口縁部に櫛描波状文が施されている。**352**は口縁部が外傾する。**353**と**354**は同一個体で、肩の張る扁球形胴部と平底気味丸底を呈する。**356**～

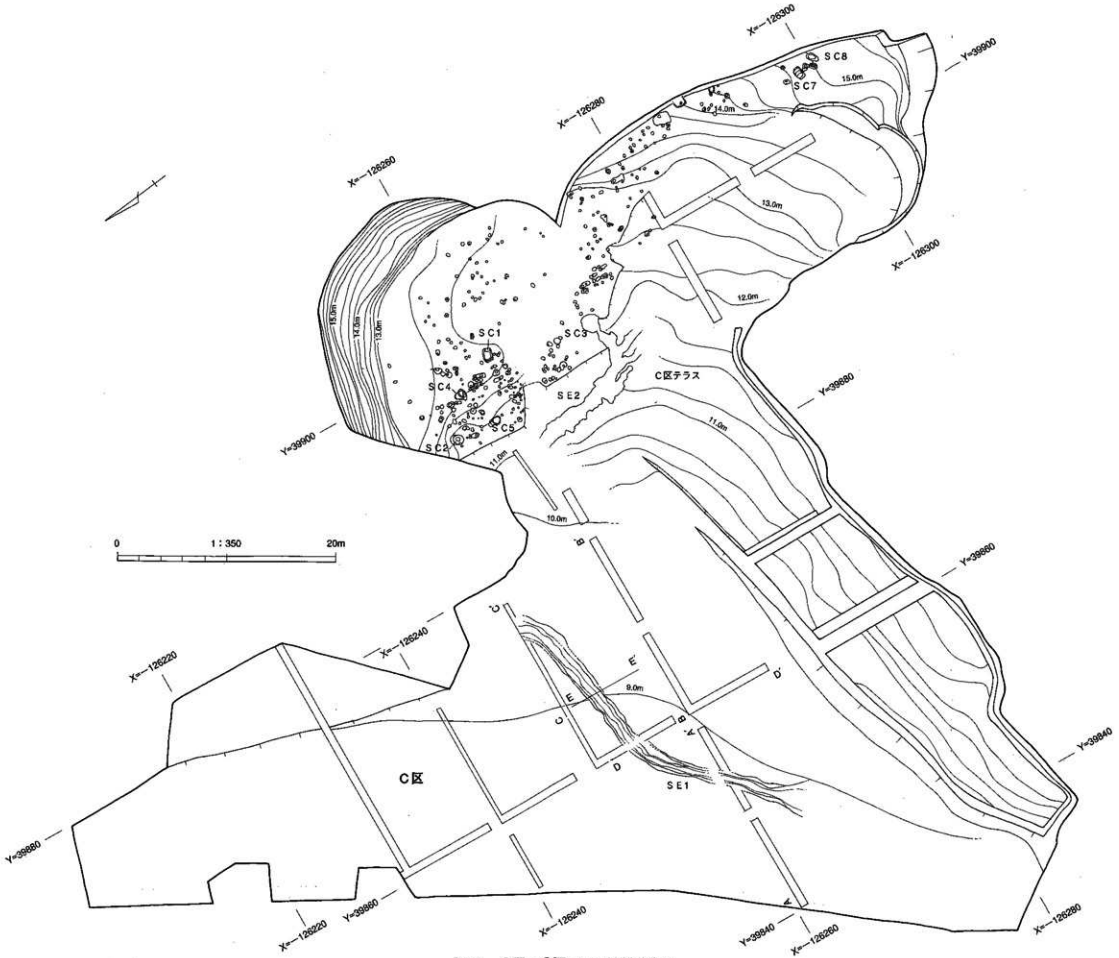


図54　C区・C区テラス遺構分布図

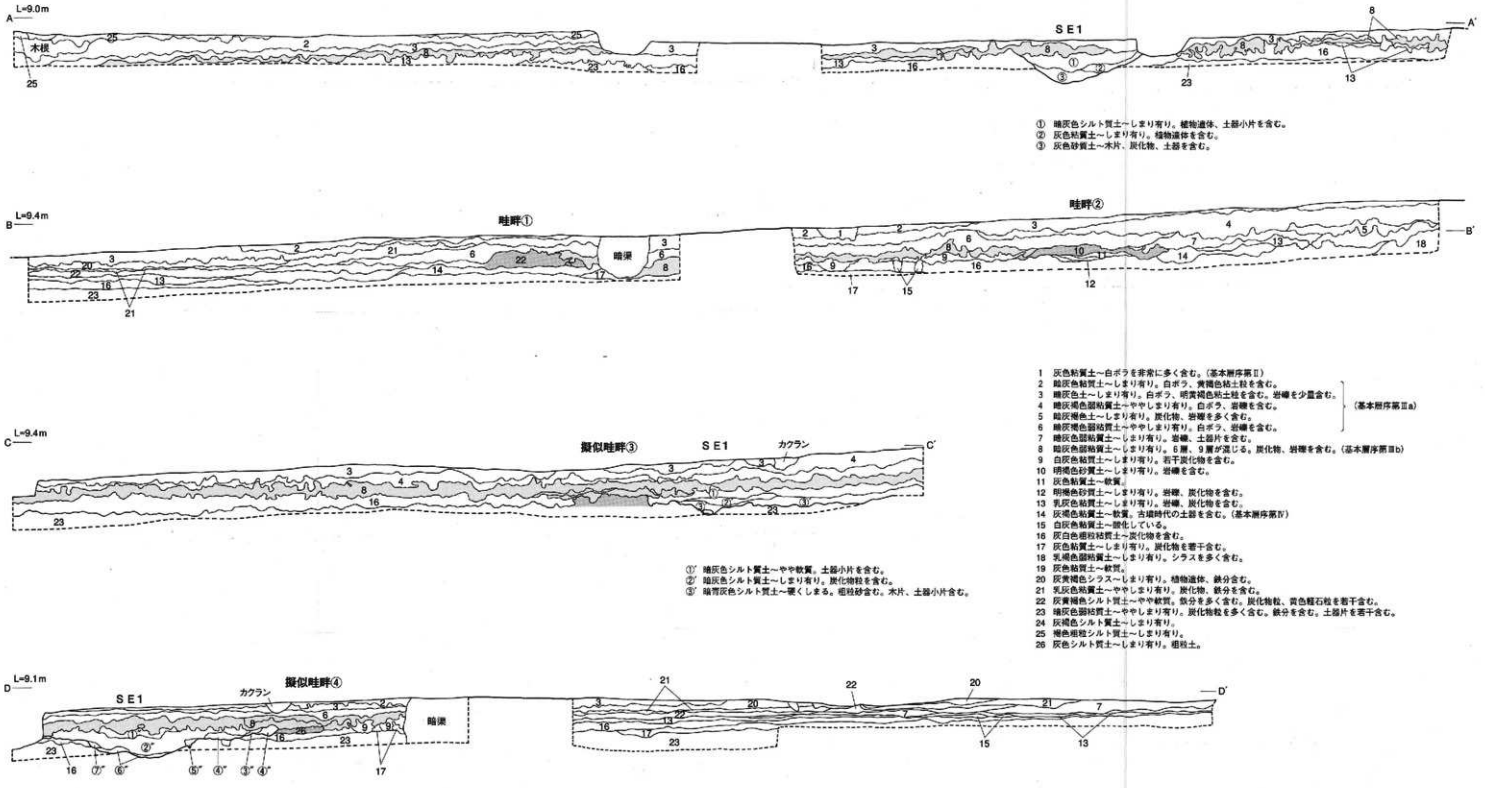


図55 C区水田層土層断面図

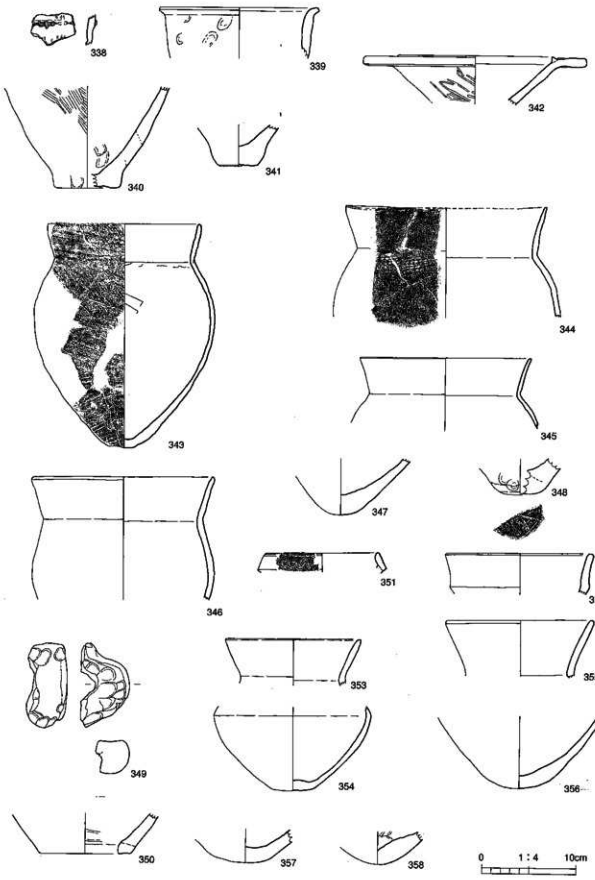


図56　C区・C区テラス遺構外出土遺物実測図（弥生～古墳時代）

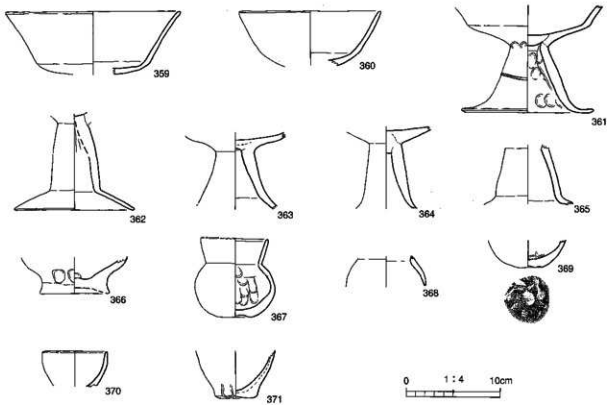


図57　C区・C区テラス遺構外出土遺物実測図（古墳時代）

358は底部で尖底気味丸底（356）、丸底（357）、尖底（358）がある。359～365は高坏である。359は深い坏部で口縁部は外反して開く。屈折部には明瞭な稜を持たない。360は椀状の坏部を呈する。361は屈折部に明瞭な稜を持たず、脚部はラッパ状に開く。脚柱部に2条の線刻か。362はエンタシス状の脚柱部を呈し屈折して内湾する裾部が広がる。363～365は「ハ」字状を呈する脚柱部で、裾部との間に稜を持たないもの（363・364）、屈折して稜を持つもの（365）がある。366は高台付鉢の底部と思われる。367～369は小型丸底壺である。367は底部外面中央部を窪ませている。369は底部外面中央部を窪ませ、その周辺を指で花弁状に押圧している。370と371は小型土器の鉢と思われる。

（4）歴史時代の遺構と遺物

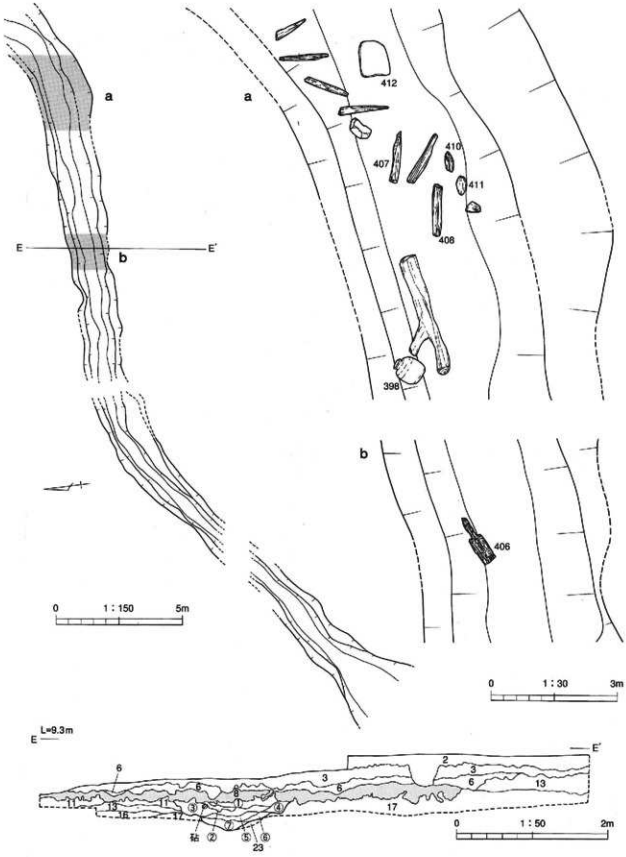
（古代から中世）

溝状遺構（ＳＥ）

ＳＥ１（図58）

C区中央寄り南側の第Ⅵ層面で検出した。北東から南西に向かって蛇行する溝状遺構である。時間の都合上、全容を把握することができなかった。規模は長さ約32m＋α、幅1.0～3.5m、深さ約0.3～0.4mを測り、断面形は浅い擂鉢状を呈する。遺物は古代の土師器坏や皿、須恵器壺、砧や木杭などの木製品が出土している。東側で確認された7本の木杭は、頭部を北または北西に向け、北東から南西の直線上に並んで倒れている。その周辺には木製品皿や加工石製品が木杭の流れに沿って出土している。木杭は溝との関係から堰などの性格が考えられるが、上流からの鉄砲水などで崩壊したと推測される。

出土遺物は図59～63に示している。



2・3・6・8・11・13・16・17・23は図55の土層注記と同じ。
① 暗灰色シルト質土～炭化物粒、岩盤岩粒を含む。
② 暗灰色シルト質土～粗粒砂、炭化物粒、岩盤岩粒、土器片を含む。
③ 灰色シルト質土～炭化物、植物遺体を若干多く含む。
④ 灰色シルト質土～炭化物、植物遺体を含む。
⑤ 灰色シルト質土～植物遺体を含む。
⑥ 灰色粘質土～灰色シルト質土を含む。炭化物粒を含む。
⑦ 青灰色シルト質土～下位に粗粒子堆積。炭化物、植物遺体を多く含む。

図58　ＳＥ１遺構実測図

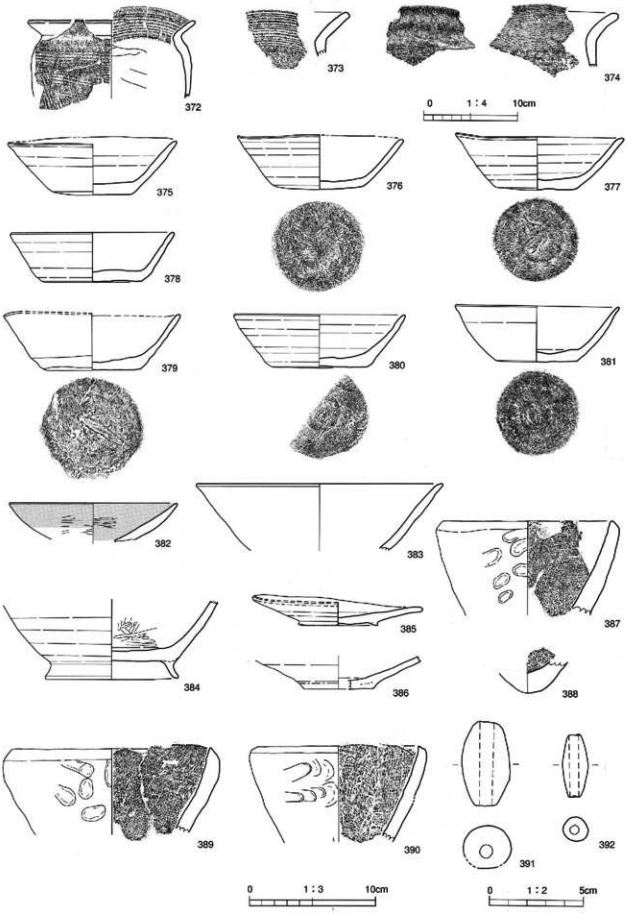


図59　ＳＥ１出土遺物実測図（１）

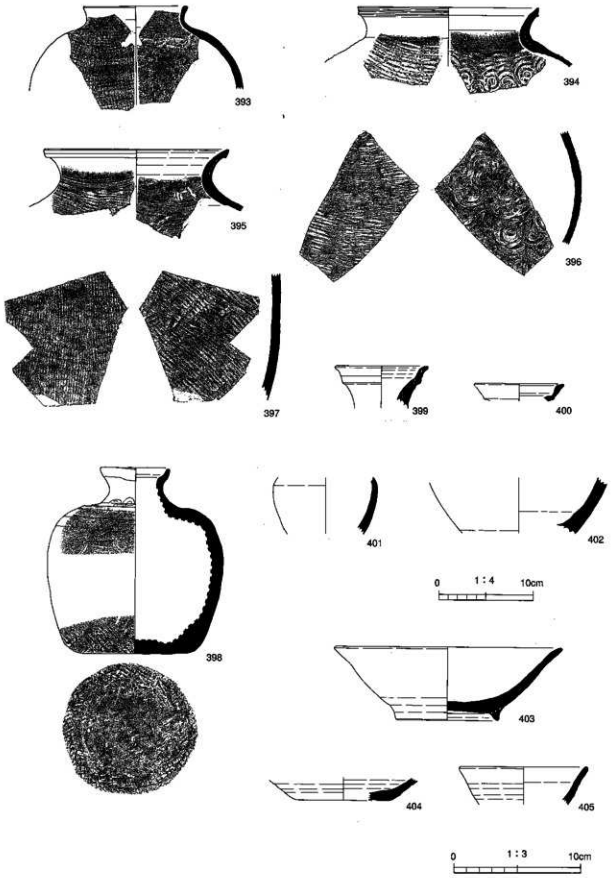


図60　ＳＥ１出土遺物実測図（２）

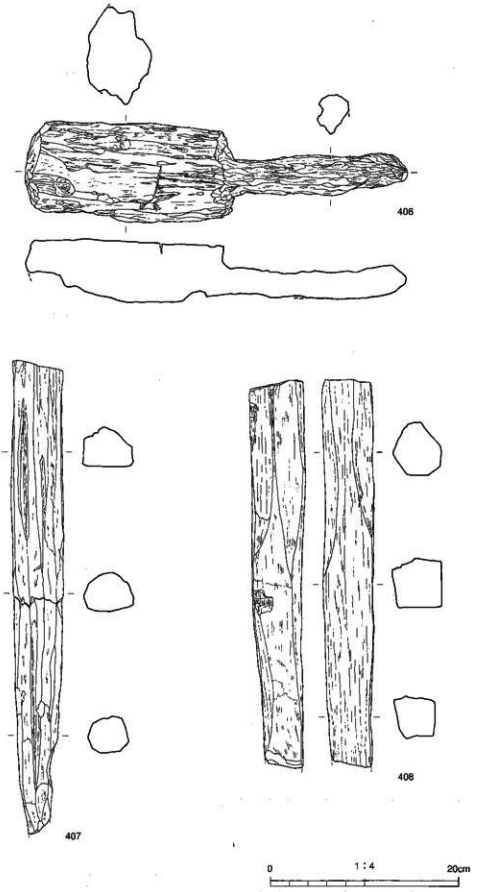


図61　ＳＥ１出土木製品実測図（１）

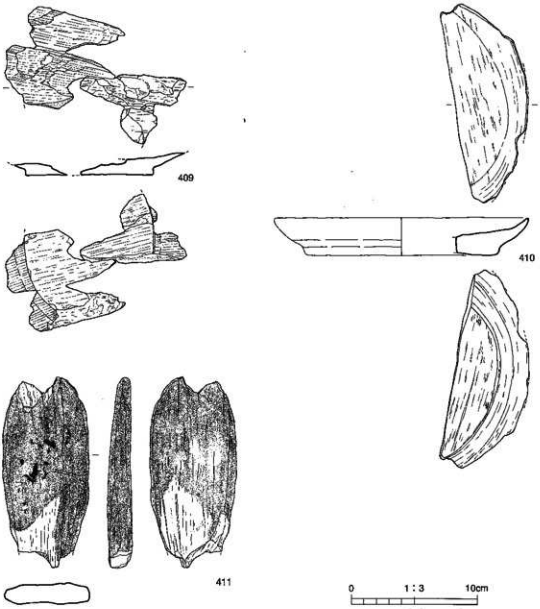


図62　ＳＥ１出土木製品実測図（2）

372～392は土師器である。372～374は甕である。口縁部が屈折して大きく開き、口縁部内面と胴部外面はハケ状工具によるヨコナデとナデ仕上げ、胴部内面はケズリにより屈折部に稜を作り出す特徴が見られる。372は胴部上位に膨らみを持つ。375～381は坏である。全てヘラ切り底である。体部が直線的に延びて口縁部がわずかに外反するもの（375～377）、体部から口縁部までまっすぐに延びるもの（378～380）、体部が内湾し口縁部がわずかに外反するもの（381）がある。382は黒色土器の皿である。内外面とも横ミガキである。383と384は椀である。383は体部が直線的に延び、口縁部がわずかに外反する。384は高台付の上器で内面はミガキ仕上げである。385と386は皿である。385は高台を持つ。器面の風化が著しいが高台外面の一部に丹塗りが見られる。387～390は布痕土器、391と392は土錘である。

393～405は須恵器である。393～397は甕である。口縁部が直口して端部を丸く仕上げたもの（393）、口縁部が開いて端部外面に沈線を持つもの（394・395）がある。397は大甕の胴部片と思われる。398～402は壺である。頸部が小さくくびれ、口縁部は二重口縁を呈する。398は俵型の胴部を呈し、肩部に

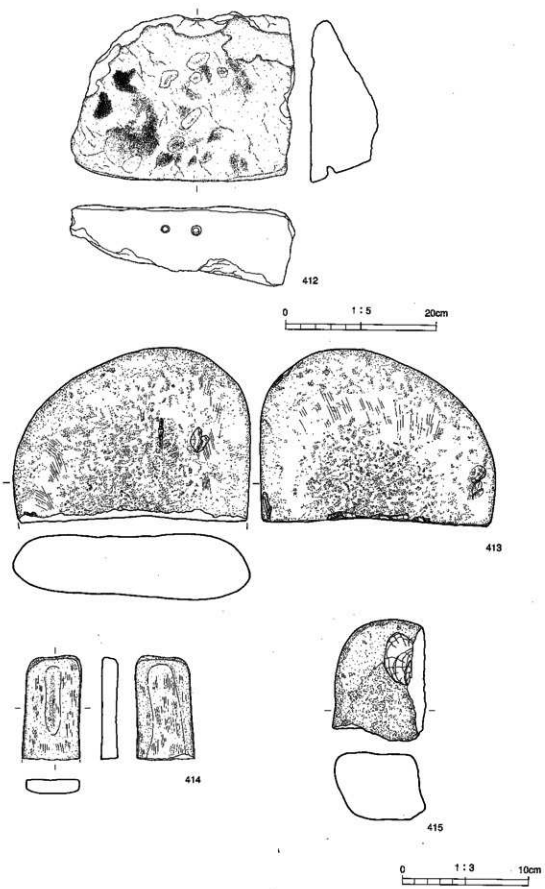


図63　ＳＥ１出土石製品実測図

部布目痕、胴部下位から底部に格子目タタキが見られる。399と400は口縁端部が外反する。403～405は坏である。403は高台付の土器で底部内面にはナデの痕跡と黒色物の付着が見られる。

406～411は木製品である。406は砧である。頭身部は2分の1程が欠損している。全長40.3㎝、頭身部最大長約20.9㎝、最大幅10.4㎝、最大厚6.55㎝、柄の最大長19.4㎝、最大幅4.2㎝、最大厚3.2㎝で使用木材はブナ科コナラ属アカガシ亜属である。407と408は木杭である。使用木材は砧と同じアカガシ亜属である。407は全長50.15㎝、最大幅5.4㎝、最大厚4.25㎝で、全体を削り丸杭に加工している。408は先端部が欠損するが、全長41.0㎝、最大幅5.3㎝、最大厚5.7㎝で407より面取りが少ない角杭である。409と410はセンダンで作った皿である。409は底部が楕円形になると思われる。411は先端をV字状に加工した道具の頭部と考える。柄が付くと思われるが、頭部は焼けて炭化及び黒変している。使用木材はブナ科コナラ属アカガシ亜属で、最大長15.3㎝、最大幅6.8㎝、最大厚1.7㎝を測る。

412～415は石製品である。412は凝灰岩で造られたもので器種は不明である。長軸29.55㎝、短軸22.45㎝、高さ10.5㎝で鋭角に面取りされた一側面には2つの孔がある。残存する平坦面にはススの付着が見られる。413と415は砂岩製の台石、414は砂岩製の砥石である。

遺構外出土の遺物

出土遺物は図64～69に示している。

416～456は古代の土師器である。416～423は甕である。胴部は張らずに口縁部は屈折して大きく開く。外面と口縁部内面のハケ状工具による調整、胴部内面のケズリ調整に特徴が見られる。424～444は坏である。体部から口縁部が直線的に延びるもの（424～427）、体部は直線的に延びるが口縁部が若干外反するもの（428・431）、体部が内湾し口縁部が外反するもの（429・430）がある。424は底部外面に「付太」？の墨書がある。429は底部外面に「×」印のヘラ記号が見られる。432と433は底部外面に文字線刻が見られる。432は「太」か。433は「大」か。434～444は高台付の土器である。434の高台接合面には花弁状の圧痕が施されている。外側に開く長い高台で端部は丸く仕上げているもの（435・436）、直立又はわずかに開く短い高台で端部が面取されているもの（437・438）、外側に開く短い高台で端部は丸く仕上げているもの（439～441）、円盤状高台を呈するもの（442～444）がある。445～451は黒色土器である。体部が内湾し口縁部が外反するもの（445・446）、底部は平底（447）、高台付（448～450）、円盤状高台付（451）のものがある。いずれも丁寧なミガキが見られるが、単位不明のものが多い。452と453は皿である。やや上げ底気味で盤状を呈する。454～456は布痕土器である。

457～471は古代から中世の土師器である。457は玉縁口縁を呈する椀で内外面とも丁寧なミガキが見られる。白磁の模倣が考えられる。458と459はヘラ切り底を呈する坏である。458は体部下に底部切り離し時に付いたと思われるヘラ先痕がある。460は糸切り底を呈する坏で体部は歪む。461～463は皿の底部と思われる。462と463は底部径が9.55～11.9㎝と大きく、ヘラ切り底を呈する。464～466はヘラ切り底を呈する小皿である。体部が内湾気味のもの（464）、体部が直線的なもの（465・466）がある。467～469は皿、470と471は小皿で糸切り底を呈する。体部が内湾するもの（467・470・471）、体部が内湾し口縁部が若干外反するもの（468・469）がある。

472～482は土錘である。

483～513は古墳時代から古代・中世の須恵器である。483は坏蓋の天井部である。484は坏身の受け部から体部である。485～491は甕である。口縁端部が玉縁状のもの（485）、口縁端部外面に沈線を持つも

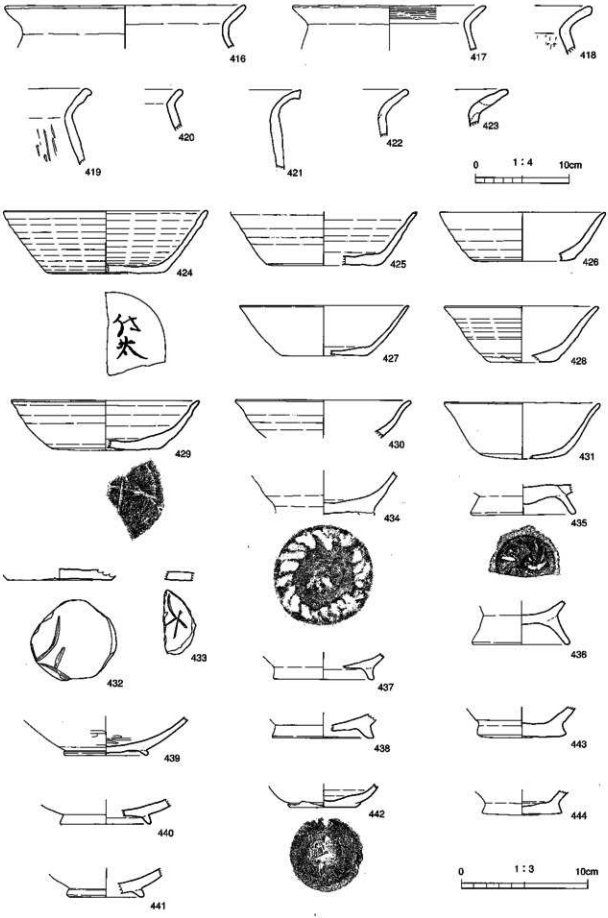


図64　C区・C区テラス遺構外出土遺物実測図（古代1）

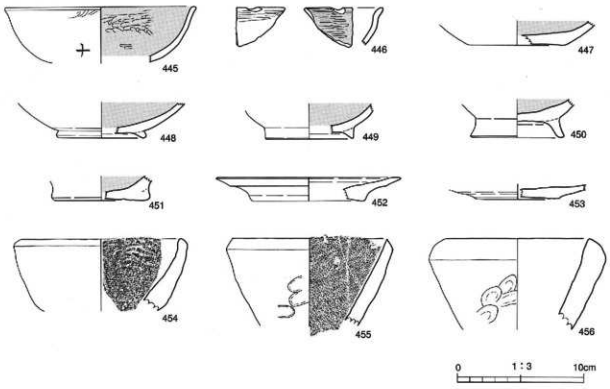


図65　C区・C区テラス遺構外出土遺物実測図（古代2）

の（486）、口縁端部を丸く仕上げたもの（487）がある。492～504は壺である。492は短頸壺で肩部が張り口縁部はやや内傾する。493と494は口頸部で外面に櫛描波状文が施されている。頸部が小さくくびれて肩部が張り、胴部が倭型を呈する小型壺は口縁部が二重口縁のもの（495・496）、単口縁のもの（498）がある。502の胴部外面には櫛描波状文、504には格子目タタキが施される。505～513は坏や椀である。ヘラ切り底を呈し体部から口縁部が外反する坏（505）・椀（506）、ヘラ切り底で体部が内湾する坏（508）・椀（507）、糸切り底を呈する坏（511・512）、高台付の坏か椀（509・510）がある。513は玉縁口縁を呈した椀の口縁部と思われる。

514は土師質のつまみ付蓋である。外面はハケ目と平行タタキ、内面はハケ目仕上げである。

515と516は土師質の紡錘車である。

517はヘラ状の鉄製品である。

517～539は古代から中世の陶磁器である。

518～524は緑釉陶器で9～10世紀頃のものである。518～520は皿である。521～524は椀で端反り口縁のもの（521・522）、直線的に口縁が延びるもの（523）がある。525は越州窯青磁碗で9～10世紀のものと思われる。526～534は白磁である。526～532は玉縁口縁を呈する碗で11世紀中葉～12世紀初頭頃のものか。533は体部が内湾する碗である。534は端反り口縁を呈する皿で15世紀頃。535～540は青磁である。535は同安窯系青磁碗で内面に櫛描き、外面に一条の圏線状線刻が施される。11～12世紀頃。536は青磁瓶の胴部である。537は玉縁口縁の碗で12世紀頃のものか。538は端反り口縁の碗、539は皿で15～16世紀頃のものと思われる。540は稜花皿で15世紀頃。541は備前の擂鉢で16世紀のものと思われる。

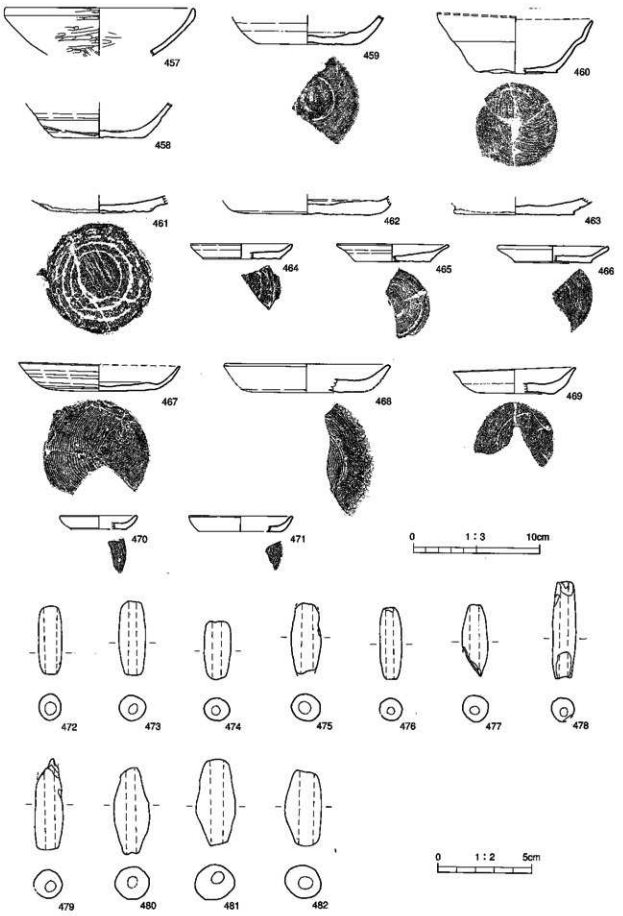


図66　C区・C区テラス遺構外出土土師器実測図（古代～中世）

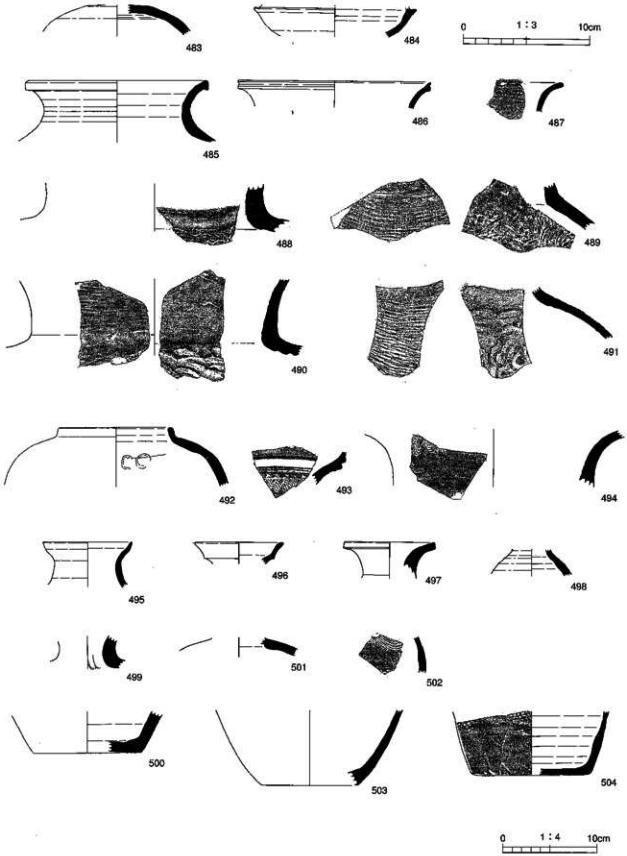


図67　C区・C区テラス遺構外出土須恵器実測図（古墳～中世）

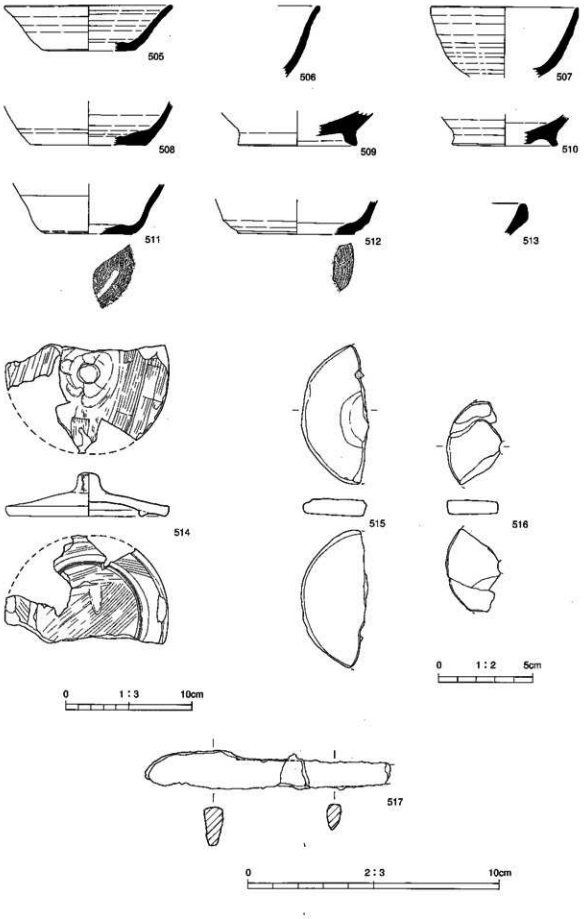


図68　C区・C区テラス遺構外出土遺物実測図（古代～中世）

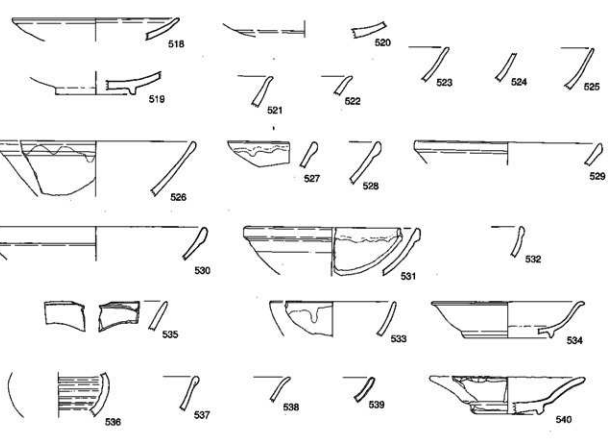


図69　C区・C区テラス遺構外出土陶磁器実測図（古代～中世）

（近世）

土坑（SC）

SC3（図70）

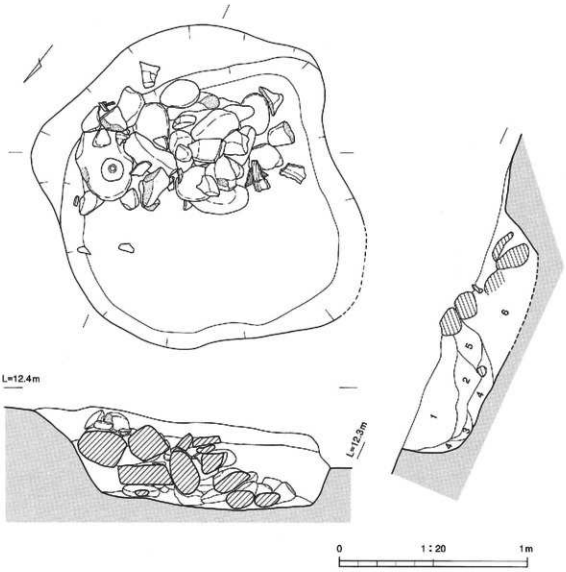
C区テラス中央の第Ⅳ層面で検出した。SE2と繋がる。長軸1.7m、短軸1.5mの不整形プランを呈する。検出面からの深さは約0.5mで、遺構の東側には、10～40cmの砂岩円礫と近世陶磁器が北東から南西に向かって流れ込んだように出土している。出土遺物は図71に示している。

542～544は肥前系染付である。**542**は端反碗で外面に折松葉文、見込みに二重圏線がある。19世紀代。**543**は小皿で見込み蛇ノ目釉剥ぎ、内面は二重斜格子文が描かれる。18世紀後半～19世紀初頭。**544**は瓶か徳利等の袋物で19世紀代のものか。

545～549は陶器である。**545**は土瓶の底部で三足が付く。外面はカキ目で褐色釉が施されている。**546**と**547**は擂鉢で、**546**は一単位9本、**547**は一単位11本の櫛描きで擂目を施している。**548**と**549**は同一個体の甕である。内外面全体施釉で底部外面に砂目痕が見られる。

SC6（図72）

C区テラス東側の丘陵地裾部で検出した。宮崎層群に掘り込まれた遺構で、検出面はほぼ床面近くで



1　暗灰褐色砂質シルト質土～非常に硬くしまる。白ボラを多く含む。
2　暗灰色土～ややしまり有り。白ボラを若干含む。
3　灰色シルト質土～ややしまり有り。
4　灰色細粒質土～ややしまり有り。
5　褐色土～しまり有り。炭化物粒を含む。
6　暗褐色土～軟質。円礫、陶磁器を含む。

図70　C区テラスＳＣ３遺構実測図

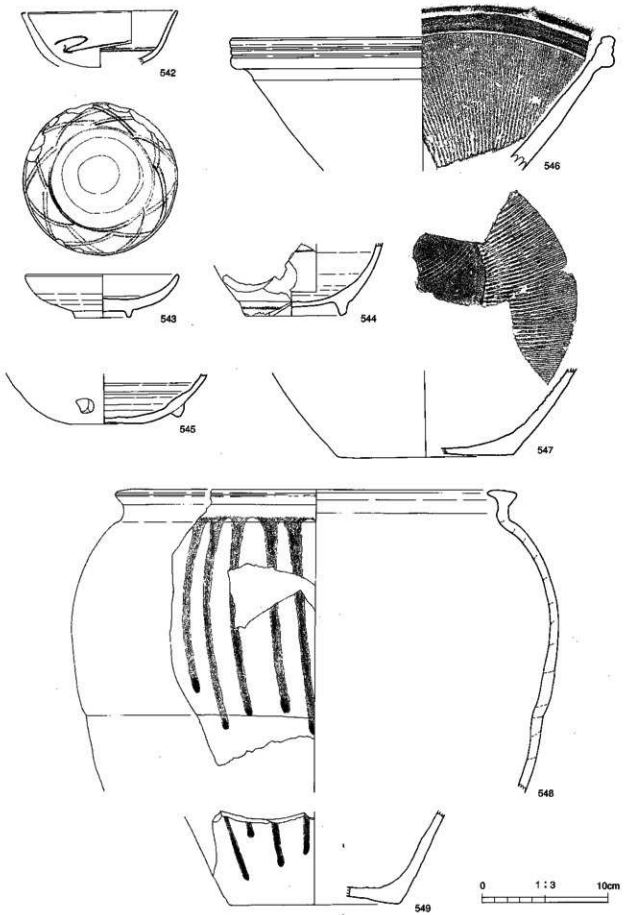


図71　C区テラスＳＣ３出土遺物実測図

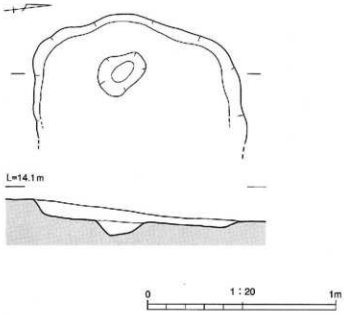


図72　C区テラスＳＣ６遺構実測図

あった。遺構の東側は検出できなかった。規模は南北1.1ｍ、深さ0.1ｍを測る。西側中央に床面からの深さ約0.1ｍのピット状遺構を持ち、床面からは動物遺存体が出土した。遺存体については、次のとおり沖田絵麻氏から玉稿を賜った。

枯木ヶ迫遺跡Ｃ区テラスＳＣ６出土の動物遺存体

はじめに

枯木ヶ迫遺跡のＣ区テラス中央奥部の土坑（ＳＣ６）から、動物遺存体が出土した。この動物遺存体の同定結果を報告する。

１．遺存体の概要

調査者の所見によれば、遺存体は1.1ｍ×0.8ｍ＋αの土坑の、南側にかたまって出土したということである。

共伴遺物などは伴わない。

破片であるため、接着剤により接合復原し、同定を行なう。

２．結果

同定の結果は表１に示す。すべてウマ*Equus caballus*（哺乳綱Mammalia奇蹄目Perissodactylaウマ科Equidae）の歯牙であり、上顎切歯および上顎臼歯が同定された。資料はいずれも灰白色から淡い黄褐色を呈している。大きさや咬耗状態に大差がないことから、同一個体に由来する可能性が高い。受熱による変色や人為的な破壊の痕跡は認められない。

以下、主な歯について記載する。なお、各部分の名称についてはK. M. Dyceほか（1990）に従う。

・上顎切歯

右上顎第１切歯・左上顎第１・２切歯が同定された。これらはエナメル質部分だけが残存し、セメン

ト質部分は失われる。咬合面には微細な擦痕がみられ、滑らかで光沢がある。咬合面の上面観は横楕円形に近い形状を呈している。

このほか、上下左右不明の切歯破片2点、分離した内エナメル輪3点がある。

・上顎臼歯

左上顎臼歯片が2点ある。いずれも頬側面の破片である。第4小臼歯か第1大臼歯の可能性があるが、破片のため特定は避ける。歯冠高は28㎜程度になると考えられる。咬合面には微細な擦痕がみられ、滑らかで光沢がある。

・その他

臼歯の破片が1点ある。

表1 出土資料同定表

分類群	左右	部位	破片数
ウマ	右	上顎第1切歯	1
	左	上顎第1切歯	1
	左	上顎第2切歯	1
		切歯片	3
		切歯 内エナメル輪	3
	左	上顎臼歯片	2
		臼歯片	1

3．まとめ

分析の結果、土坑出土の歯はウマの上顎歯であることが判明した。これらはウマ1頭分の4分の1にも満たない数であり、ウマ1頭が埋納されていたとは考えにくい。攪乱されていないとすれば、当初から部分的な骨だけが埋められたことになる。歯牙は土坑の南側にかたまって出土したということであり、本来は顎骨を伴って埋まっていたものが、脆い骨の部分は消滅し強い歯冠だけが残った可能性もある。部分的な顎骨あるいは歯牙だけが埋納されたとすれば、それがどういう行為であったのか、類例を収集して検討する必要がある。

このウマの年齢については、歯牙がいずれも完全な形状を保っていないため、正確な年齢判定は不可能であるが、永久歯であり、咬耗も進行していることから成獣であると考えられる。

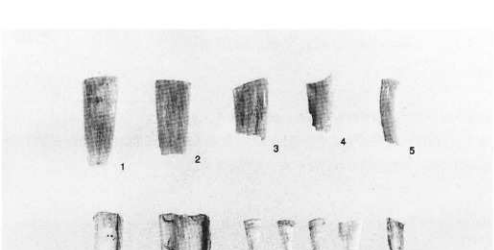
ウマは、5世紀の中頃に普及し、権威の象徴あるいは軍事的パロメータとして、深く支配層と結びついていたとされる（久保・松井，1999）。また、久保・松井（1999）の研究によれば、ウシ・ウマが解体されずに埋葬されることはむしろ稀で、多くの場合解体され資源として利用され、場合によっては儀礼や祭祀にともなう犠牲獣としても用いられたことが判っている。本遺跡の場合は断片的な出土であったため、その性格を議論することはできないが、今後類例の増加を待って、この地域のウマ利用を検討したい。

謝辞

分析の機会を与えていただいた宮崎県埋蔵文化財センターの高橋浩子さん、高岡町教育委員会の廣田晶子さんに感謝申し上げます。

〈引用文献〉 K. M. Dyce et al.（1990）「獣医解剖学」，山内昭二ほか訳，近代出版．
久保和士・松井 章（1999）家畜その2－ウマ・ウシ．「考古学と自然科学2 考古学と動物学」，西本豊弘・松井 章編，p.169－208，同成社．

（岡山理科大学 沖田絵麻）



1. 左上顎第1切歯　2. 右上顎第1切歯　3. 左上顎第2切歯　4～5. 切歯破片
6～7. 左上顎臼歯破片　8～10. 切歯（内エナメル輪）　11. 切歯破片　12. 臼歯破片

C区テラスＳＣ６出土ウマ歯牙

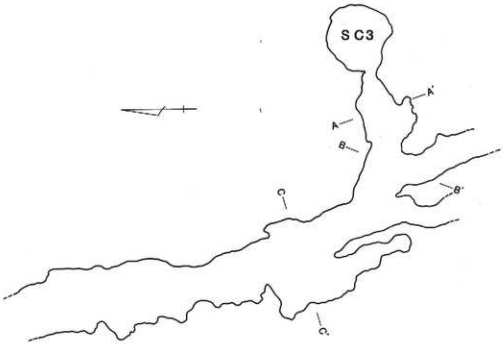
溝状遺構（ＳＥ）

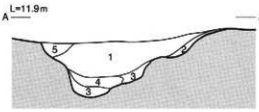
ＳＥ２

Ｃ区テラスとＣ区の間に位置する。Ｃ区テラスのＳＣ３と連結し、西側に湾曲して東から北に谷筋を走行する。溝は谷筋にできた自然流路が集約されたものである。溝の北側は、調査面設定の都合上削平され、全容を確認できなかった。規模は、長さ約14ｍ、幅0.9～1.7ｍ、深さ0.2～0.3ｍを測る。水の作用で底面は凹凸が著しい。ＳＣ３と同じく10～30㎝大の円礫や近世陶磁器を多く出土している。

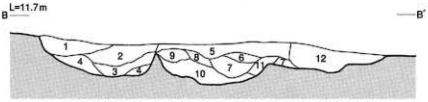
出土遺物は図74～76に示している。

550～571は肥前系の磁器である。**550～553**は染付丸形碗である。**550**は外面に二重網目文、**551**は外面に二重網目文、見込みに菊花丸文と二重網目文を施文する。18世紀後半～19世紀。**552**は小振りの碗で外面に暦文、内面口縁部に二重圏線と見込みに一重圏線を施文する。18世紀後半～19世紀初頭。**553**は短い高台が若干内傾し、見込みと外面体部にコンニャク印判による施文が見られる。18世紀中頃～後半。**554**と**555**は染付端反碗で18世紀半ばのものと思われる。**554**は見込み蛇ノ目釉剥ぎで重ね焼きの痕が残る。外面は草花文である。**555**は内面口縁部に連弧文帯、見込みに二重圏線、外面は折松葉文が施文される。**556**は染付広東碗で外面菊花繋ぎ文である。18世紀後半～19紀初頭。**557～560**は朝顔形の蓋付青磁

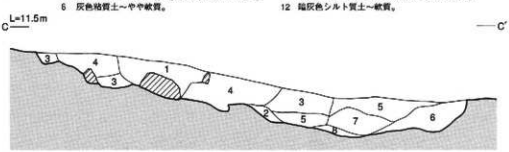




1 暗灰褐色砂質シルト質土～非常に硬くしまる。白ボラを多く含む。
2 暗灰色土～ややしまり有り。白ボラを若干含む。
3 灰色シルト質土～ややしまり有り。
4 灰色弱粘質土～ややしまり有り。
5 暗灰色粘質土～硬質。白ボラを含む。



1 暗灰褐色砂質土～しまり有り。岩礫を少量含む。
2 灰色粘質土～ややしまり有り。岩礫を少量含む。
3 灰色粘質土～軟質。
4 灰色シルト質土～やや軟質。岩礫をわずかに含む。
5 灰色粘質土～しまり有り。岩礫をわずかに含む。
6 灰色粘質土～やや軟質。
7 暗灰褐色粘質土～軟質。
8 灰色粘質土～軟質。
9 暗灰色シルト質土～やや軟質。
10 暗灰色粘質土～軟質土。
11 暗褐色シルト質土～ラス土ブロックを含む。
12 暗灰色シルト質土～軟質。



1 暗灰褐色砂質シルト質土～非常に硬くしまる。白ボラを多く含む。
2 暗灰色シルト質土～ややしまり有り。
3 暗灰褐色シルト質土～ややしまり有り。
4 灰色弱粘質土～ややしまり有り。
5 灰色シルト質土～しまり有り。鉄分を多く含む。
6 暗灰褐色シルト質土～非常に軟質。黒磁器片を多く含む。
7 暗灰色シルト質土～やや軟質。
8 暗灰色粘質～やや軟質。

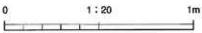


図73　ＳＥ２遺構実測図

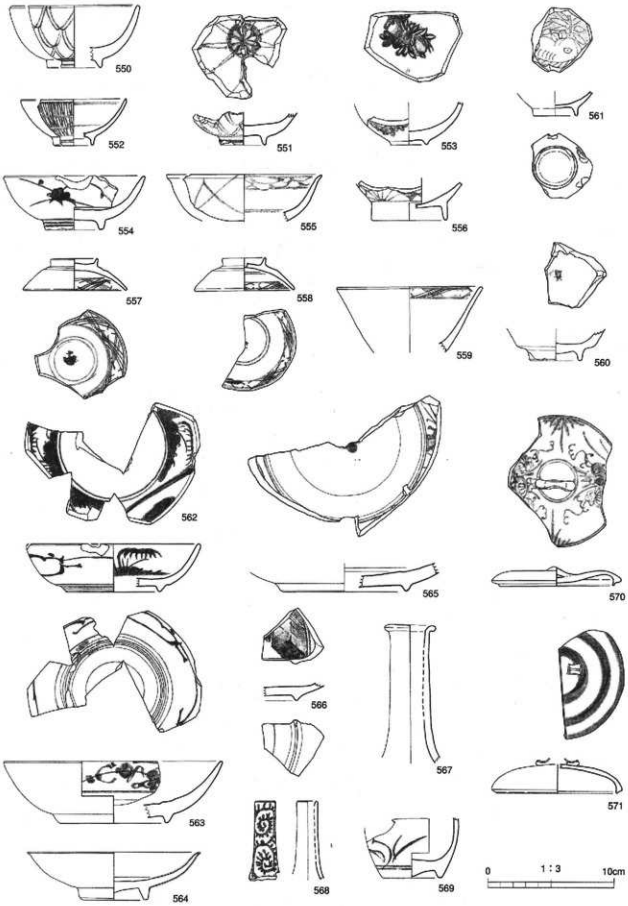


図74　ＳＥ２出土遺物実測図（１）

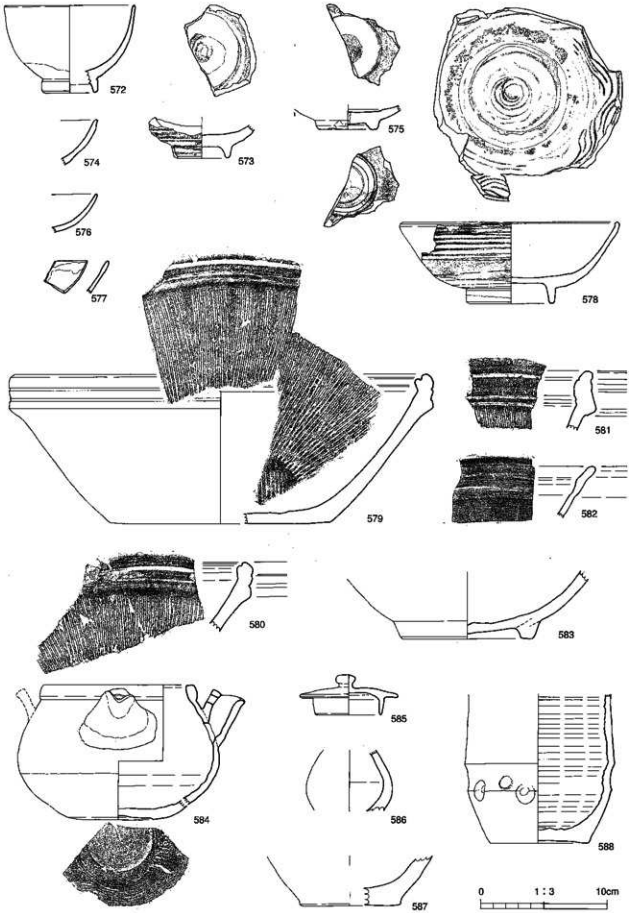


図75　ＳＥ２出土遺物実測図（２）

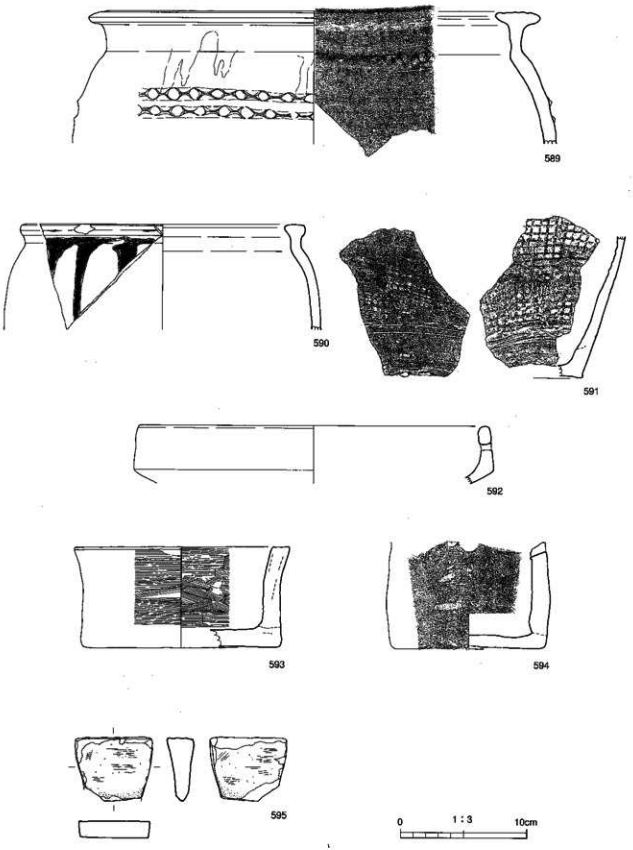


図76　ＳＥ２出土遺物実測図（３）

染付碗と蓋で18世紀後半のものである。内面口縁部には四方襷文、内面天井部には二重圏線とコンニャク印判五弁花文、見込みにコンニャク印判五弁花文が施文される。561は小振りの色絵付碗である。見込みは魚と水草が描かれ紫と緑色で塗られている。外面体部には朱で文字が書かれている。明治時代以降のものと思われる。562は染付五寸皿である。18世紀前半～中葉のもので内面に草文と笹文、外面に唐草文が施される。高台に砂が付着している。563は染付中皿で見込み蛇ノ目釉剥ぎ、内面に花唐草文が染付されている。564は青磁端反皿で見込みは蛇ノ目釉剥ぎが施される。565は染付皿で見込み蛇ノ目釉剥ぎで中央にコンニャク印判五弁花文が施文される。18世紀中葉～19世紀初頭。566は青磁染付の大皿で見込みに風景文、高台内に圏線が施文される。同一個体の高台内にはハリ痕が見られる。567～569は染付瓶である。567は内外とも施釉されている。568は蛸唐草文で18世紀後半～19世紀初頭。569は草文と二重圏線が施文される。570と571は段重か蓋付鉢の染付蓋である。鉦はどちらも鼈斗形を貼り付けている。570は花弁文、571は同心円文と思われる。

572～592は陶器である。572は内野山窯の丸形碗で外面に銅緑釉が施される。17世紀後半。573は唐津産の碗で、白化粧土を刷毛塗りした刷毛目文を描き透明釉を施している。見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。574と575は内野山窯の皿で見込み蛇ノ目釉剥ぎ、内外面に銅緑釉が施される。18世紀前半。576と577は皿で内外面とも透明釉が施釉される。578は唐津産の皿で高台の削りがシャープである。19世紀代。鉄釉を掛けた後白化粧土を刷毛塗りした刷毛目文を描いている。見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。579～582は18～19世紀の擂鉢である。579と580は外面口縁部のみ施釉し、一単位10本の櫛描きで擂目を施している。581も外面口縁部のみ釉が掛けられている。582は口縁端部断面形が三角形でなく薄手の器壁を呈する。内外面口縁に施釉し擂目は5本を一単位とする櫛描きであるが、溝は浅い。583は鉢である。幅広の高台を呈し外面に鉄釉、内面に灰白色の釉を施している。584と585は土瓶である。584は注ぎ口の形態から関西系のものと考えられる。外面胴部中位より上に灰色の釉が掛けられている。18世紀後半～19世紀。585は丸いボタン状の鉦を持ち外面のみにぶい黄褐色の釉が掛けられている。586と587は瓶である。586は内外面とも無釉と思われるが、外面上部に若干光沢を持つ。587は糸切り底を呈し内面には部分的に暗オリーブ色の釉が付着している。588は水指と考える。鉄釉を外面に掛け、ヘラ切りの底部は釉を落としている。胴部下位に丸い突起が1つと指による窪みが2箇所見られる。589～591は甕である。589は縄目突帯を持ち内面無釉、外面には釉を施している。口縁部平坦面は釉が剥がれている。17世紀後半頃のものか。590は内外面に釉が掛けられている。591は内外面とも無釉で外面に格子目タタキ、内面に格子目当て具痕が残る。592は焙烙である。口縁部に穿孔を持ち、内外面とも著しくススと炭化物が付着する。593と594は瓦質の焼き物でどちらも筒状を呈する。593は口縁端部を平坦に切り落としている。594は穿孔を持つ。595は頁岩を利用した砥石である。

遺構外出土の遺物

出土遺物は図77～79に示している。

596～624は肥前系の磁器である。596～602は染付丸形碗である。596～598は外面に雪輪草花文、高台内に「大明年製」のくずれ底裏銘を持つもので18世紀末～19世紀前半。598は「くらわんか」碗とよばれる波佐見製品と思われる。599は二重網目文である。600と601は小振りの碗で、600は二重線井桁文を施し18世紀中葉～後葉。601は外面に暦文、口縁部内面に二重圏線文、見込みに一重圏線内に五弁花文を施文している。602は見込み蛇ノ目釉剥ぎで外面にコンニャク印判による桐文が施される。18世紀後半～

19世紀初頭。603は体部から口縁部が直線的に延びる染付碗の口縁部である。外面文様は不明である。604は肥前現川（長崎）産の磁器碗と思われる。オリーブ黒色の釉を全面に施し、内面は白化粧土を刷毛塗りして刷毛目文を描いている。1690年～18世紀前半。605～607は朝顔形の蓋付青磁染付碗と蓋で18世紀後半。蓋は口縁部内面に四方襷文、内面天井部に二重圏線とコンニャク印判五弁花文を施す。碗は内面口縁部に四方襷文、見込みに二重圏線とコンニャク印判五弁花文を施文している。いずれも外面は青磁釉を掛けている。608は広東碗で外面は菊弁文？、見込みは一重圏線内に手書きの文様を染め付けている。19世紀前半。609と610は小坏で外面に笹文を施す。18世紀。611～617は染付皿である。611～613は碁笥底を呈する。611は内面に圏線と草文、外面文様は不明である。612は内面に二重圏線を巡らせ、文様を描くが不明である。外面口縁部に横縞文を巡らせ、下位に三角繋ぎ文を巡らす。613は見込みに圏線と草花文、外面体部下位に三角繋ぎ文を巡らす。614は碁笥底に近い高台を持つ皿で見込みに一重圏線と鳥の羽状の文様が染付されている。1640年代～50年代のもので畳付に砂が付着する。615は二重斜格子文を施文している。616は折縁形の小皿で外面は草花文と思われる。617は見込みに山水文を施文している。618と619は青磁皿である。618は折縁形の中皿で輪花口縁を呈し口唇部には口紅が塗られる。内面体部に片切り彫りの文様が施される。619は端反五寸皿である。620～622は染付瓶である。620は山水文で17世紀後半～18世紀前半のものである。621は笹文が施される。18世紀。622は体部下位に一重圏線、高台に二重圏線を巡らせる。623は白磁の猪口である。19世紀前半。624は段重か蓋付鉢の染付蓋である。文様は不明である。18世紀後半～19世紀前半。

625～643は陶器である。625～630は碗である。625は内野山窯の丸形碗で外面に鋼緑釉を施す。18世紀前半。626も同じく内野山窯の碗であるが、使用によるものか高台が著しく磨り減っている。17世紀後半。627～629は唐津産の碗である。628は17世紀末～18世紀前半のものと思われる。629は白化粧土を刷毛塗りした刷毛目文を描き透明釉を施している。見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。18世紀。630は端反碗で白化粧土で刷毛目文を描き透明釉を施す。見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。17世紀後半で福岡産のものか。631～633は皿である。631は内面に文様を型押しし、内外面に灰釉を掛けている。瀬戸美濃産で

17世紀前葉～中葉。632は外面に線刻文様を描き、内外面に白化粧土を掛けている。633は肥前陶器で見込みを蛇ノ目釉剥ぎした後鉄釉で文様を描いている。17世紀後半～18世紀前半。634は三島手の鉢で外面鉄釉、内面は文様を施し白化粧土と透明釉を掛けている。635と636は瓶である。635は外面に透明釉を掛けている。18世紀の肥前製品か。636は硬質の灰色胎土を呈する。外面に白化粧土を塗り圏線染付を施している。637と638は甕である。637は外面胴部に縄状突帯を持つ。無釉で内面には格子目当て具痕が残る。17世紀後半頃のものか。638は外面に緑色釉が掛けられている。639～641は擂鉢である。639は無釉で一単位８本の櫛描きで擂目を施している。640も無釉で一単位13本の櫛描きで擂目を施す。18～19世紀。641は一単位６本の櫛描きで擂目を施すが、一単位間が幅広で端部を揃えていない。17世紀前半頃のものと思われる。642と643は焙烙である。外面にススが付着する。

644は凹文を持つ丸軒瓦片である。

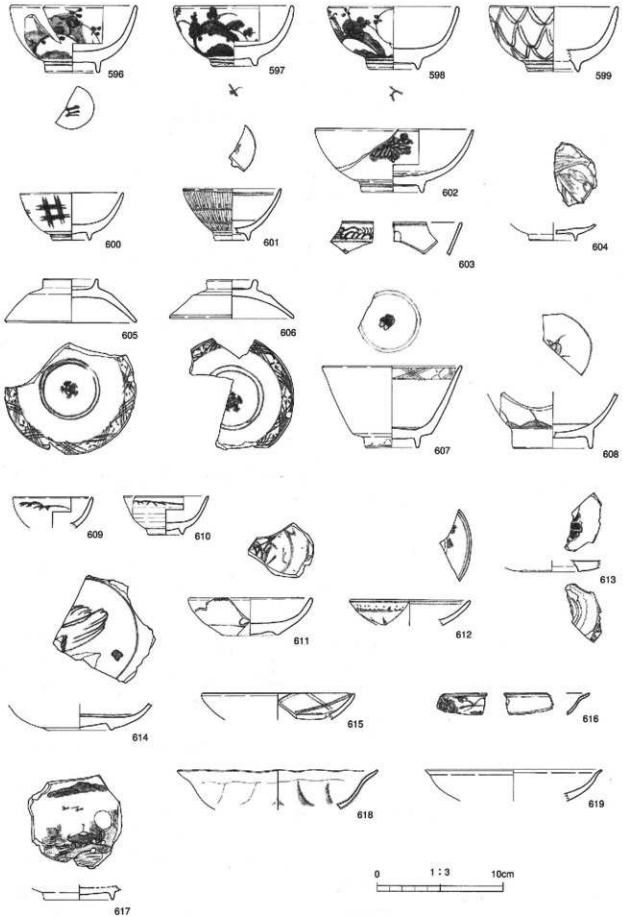


図77　C区・C区テラス遺構外出土遺物実測図（近世1）

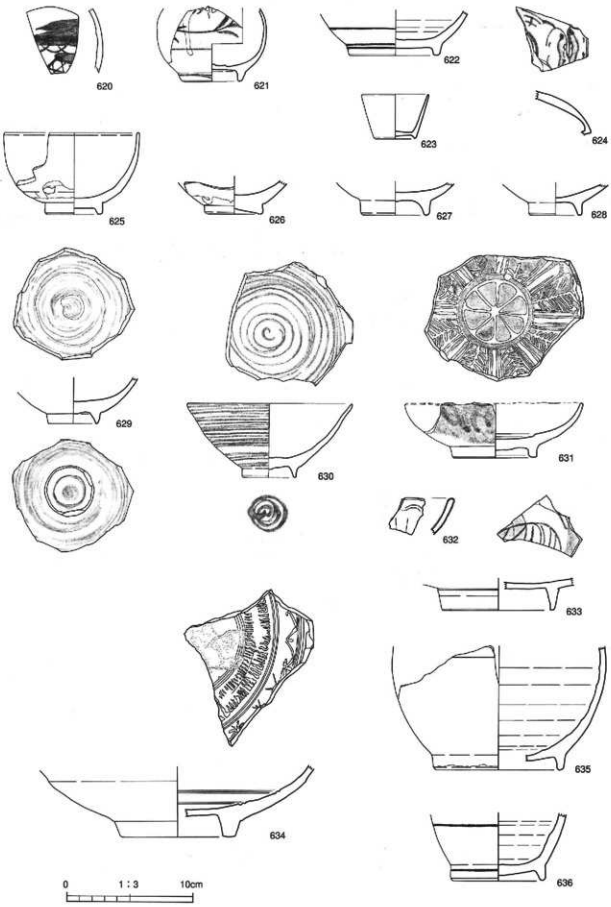


図78　C区・C区テラス遺構外出土遺物実測図（近世2）

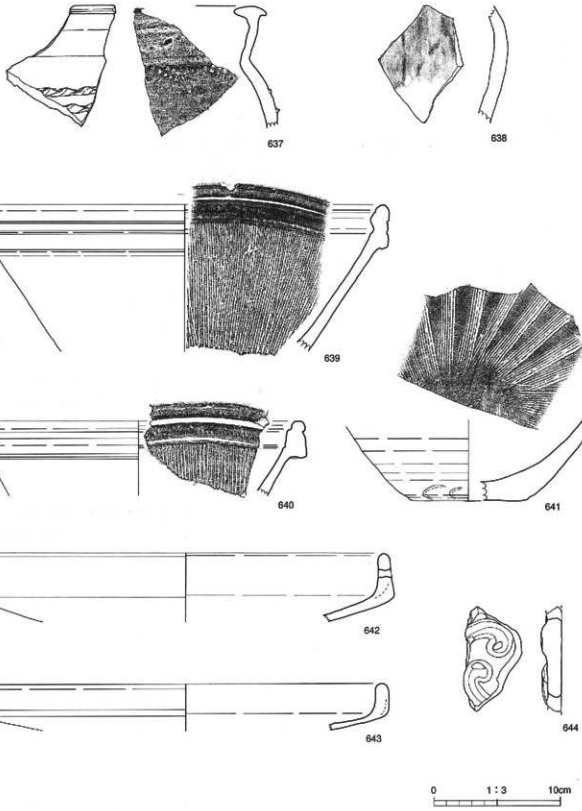


図79　C区・C区テラス遺構外出土遺物実測図（近世3）

（5）時期不明の遺構と遺物

時期不明の遺構は土坑6基及びピット群がある。

土坑（SC）

土坑は遺物を出土するものもあるが、小片で量が少ないため、流れ込みと判断し、時期不明の遺構として報告する。

SC1（図80）

C区テラス北側の第Ⅳ層面で検出した。主軸方位はN-72°-Wを指す。長軸1.36m、短軸0.85m、深さ0.35mの隅丸長方形プランを呈する。底面はほぼ平坦で、南東隅に床面からの深さ約0.1mの落ち込みを有する。埋土は岩盤層粘土ブロックを含む褐色シルト質土で、遺物は出土していない。

SC2（図80）

C区テラス北側の第Ⅳ層面で検出した。主軸方位はN-28°-Eを指す。長軸1.2m、短軸0.98m、深さ0.5mの楕円形プランを呈する。埋土は岩盤層粘土ブロックを含む褐色シルト質土で、上層から土師器片や礫が出土している。

SC4（図81）

C区テラス北側の第Ⅳ層面で検出した。一辺が1.0～1.15mの隅丸正三角形を呈する。検出面からの深さは最深部で0.27mを測り、底部南東側に平面プラン卵形の窪みを有する。埋土中から土師器坏が出土している。645は高台付坏の底部と思われ、内面は黒色化している。黒色土器であろうか。

SC5（図81）

C区テラス北側の第Ⅳ層面で検出した。長軸0.89m、短軸0.78m、深さ0.16mを測る。平面プランは扁平な卵形を呈する。埋土は岩盤層粘土ブロックを含む褐色シルト質土で、遺物は出土していない。

SC7（図81）

C区テラス南側の第Ⅵ層面で検出した。主軸方位はN-83°-Eを指す。長軸1.17m、短軸0.78mの隅丸長方形プランを呈する。深さは最深部で0.3mを測り、長軸東側に検出面からの深さ約0.1mのテラスを持つ。埋土は暗褐色土で遺物は出土していない。

SC8（図81）

C区テラス南側第Ⅵ層面で検出した。主軸方位はN-53°-Eを指す。長軸1.18m、短軸0.65m、深さ0.12mで、平面プラン楕円形を呈する。埋土は暗褐色土で遺物は出土していない。

ピット群

C区テラス東側の丘陵地沿いに分布し、第Ⅳ層と第Ⅵ層面で検出した。建物としての並びは確認できなかったが、北側のピット群には古代や中近世の土器が出土するもの、根固め石を持つもの、柱痕跡を持つものなどが確認できた。遺構埋土は岩盤層粘土ブロックを含むシルト質土や暗褐色土などである。

出土遺物は図82に示している。646はヘラ切り底の土師器坏である。底部内面に「大」？の線刻が見られる。647は陶器碗と蓋である。透明釉を施釉している。649は砂岩製の砥石である。擦痕を持つ面が6面あり、その内2面に敲打による窪みを有する。

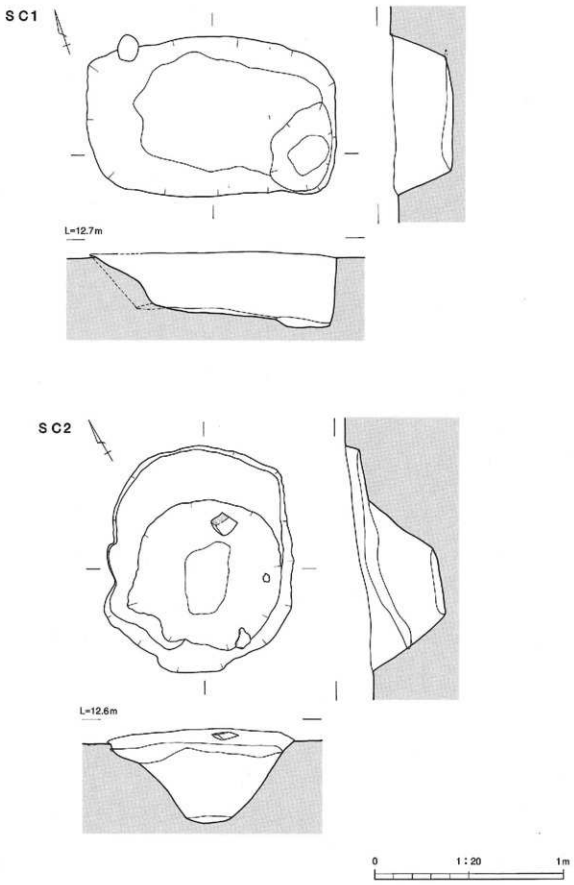


図80　C区テラスＳＣ１・２遺構実測図

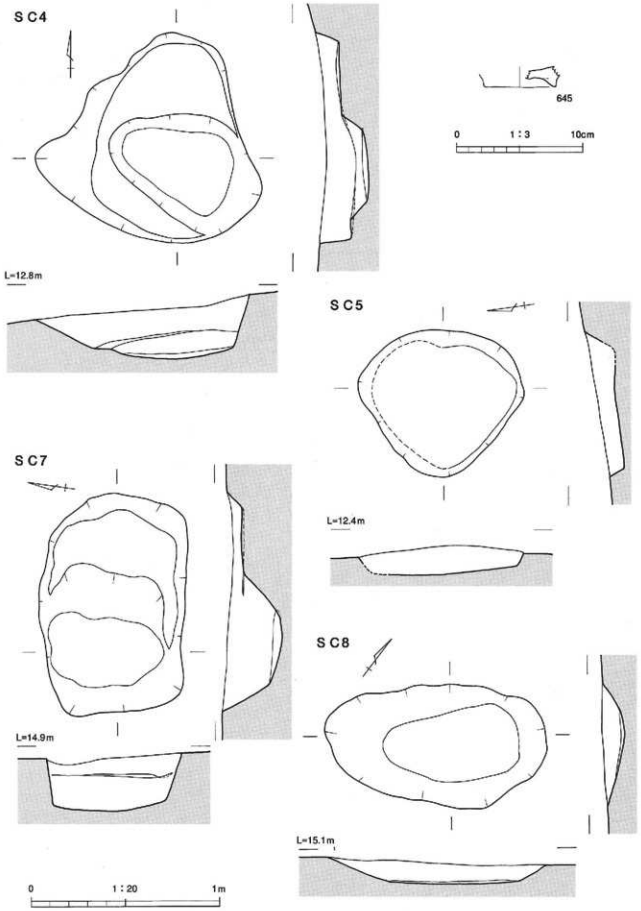


図81　C区テラスＳＣ４遺構・出土遺物及びＳＣ５・７・８遺構実測図

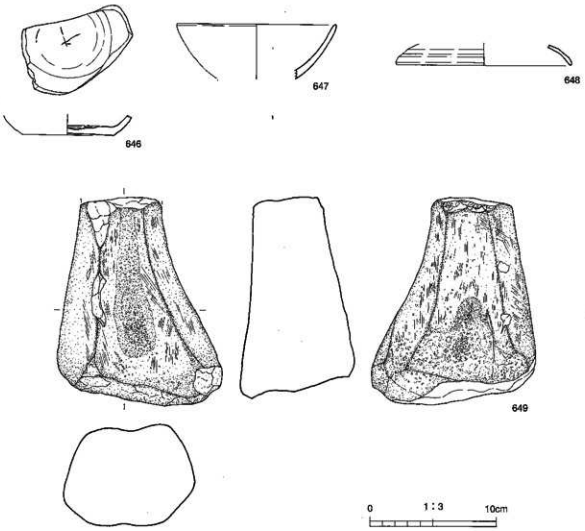


図82　C区テラスピット出土遺物実測図

第4節　D区の調査

A・①区北側斜面とC区テラス間に位置する標高13～15mの東西に細長いテラス面である。中程に谷が入り、西側が微高地となる。南側にはAT火山灰層や宮崎層群が露出するが、北側斜面、特に北西側には第Ⅳ層の堆積が残り、弥生土器や古墳時代の土師器が多く出土した。西側微高地と東側の斜面際に近世墓が位置し、それに伴う陶磁器などが散乱した状態で出土している。十数基の墓石と墓坑1基を検出した。

(1) 弥生時代から古墳時代の遺物

遺構外出土の遺物

出土遺物は図84に示している。650～652は弥生土器の甕である。650と651は同一個体で張らない胴部と屈折して大きく開く口縁部を呈する。底部は厚みを持つものと思われる。内外面ともハケ目で外面全体にススが付着している。652は胴部上位に最大径を持ち、口縁部はくびれやや外傾して開く。くびれ部下に貼付刻目突帯が巡る。器面調整は内外面ともナデとハケ目である。

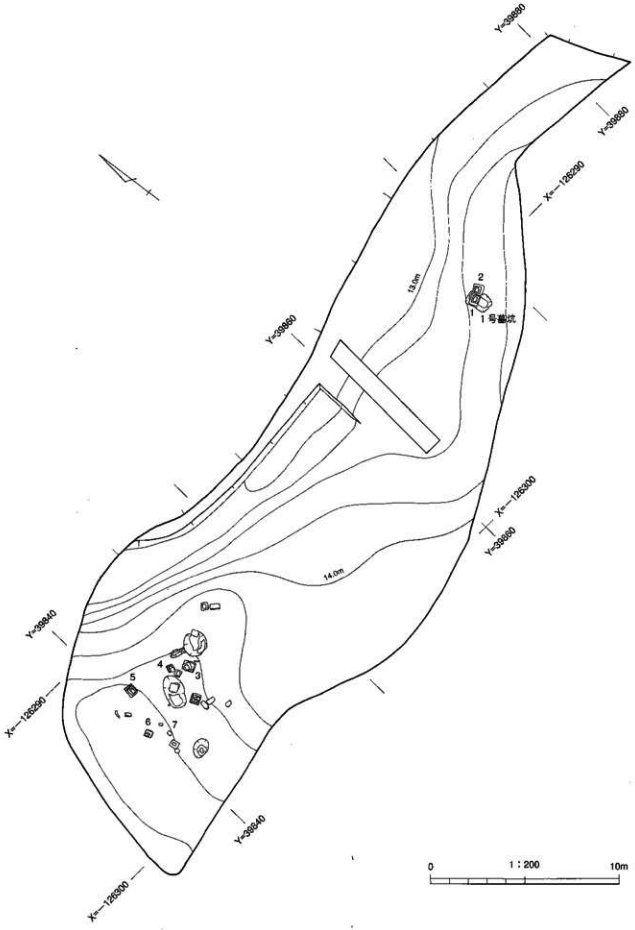

Y=39880
Y=39860
X=126290
Y=39860
13.0m
2
1
1号墓坑
X=126300
Y=39860
14.0m
Y=39840
X=126290
4
5
6
7
Y=39840
X=126300
0
1:200
10m

図83　D区遺構分布図

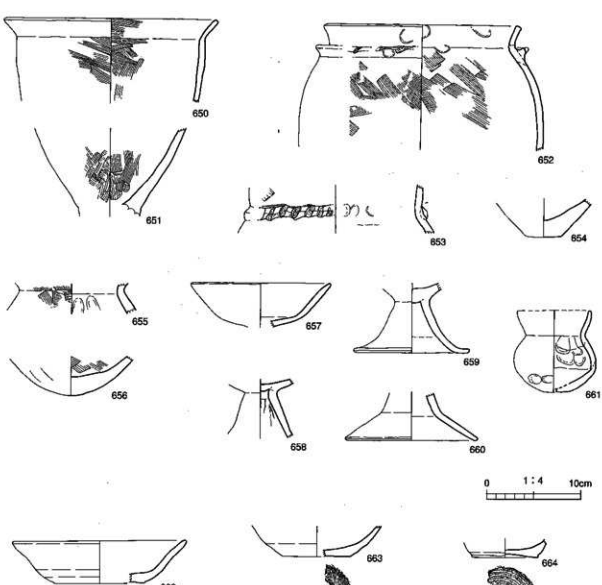


図84　D区遺構外出土遺物実測図（弥生～中世）

653～661は土師器である。**653**は口縁屈曲部に貼付刻目突帯を持つ甕で、胴部上位に膨らみを持つと思われる。**654**は甕の底部で平底を呈する。**655**と**656**は同一個体の壺である。肩の張らない丸底壺で長胴を呈するものと考えられる。内外面ともハケ目調整である。**657～660**は高坏である。**657**は坏が深く屈折部に稜を持たない。**658～660**は脚部である。脚柱部が「ハ」字状を呈するもの（**658**）、ラッパ状に開くもの（**659**）、屈折して裾部が大きく開くもの（**660**）がある。**661**は小型丸底壺である。口縁部は内湾する。

(2) 歴史時代の遺構と遺物

(古代から中世)

遺構外出土の遺物

出土遺物は図84に示している。662はヘラ切り底を呈する土師器坏で口縁部は外反する。663はヘラ切り底の土師器坏で体部は内湾する。664は糸切り底の土師器坏である。

(近世)

墓石について (図83・85・86)

調査区西側に墓石本体11基、東側に2基確認された。東側の2基の墓石は墓坑を伴うが、西側墓石及びその下部遺構については正確な調査を行っていないため、解る範囲で可能な限りの報告を行う。墓石の年号及び戒名等がおおよそ確認できるものは1～7 (図83・85) である。1と2の墓石については後で詳細を述べる。3は本体1石、台石2石の計3石から成る。石材は凝灰岩で、本体は位牌形を呈する。本体正面に「天保十巳□羊　釈 恒心位　七月十七日　俗名 利平次」の刻字がある。刻字内は墨入れされている。4は本体1石、台石1石から成り、石材は凝灰岩である。本体は位牌形を呈する。本体正面に「天保七□年　禅尼妙心未退位　～」の刻字がある。刻字内は墨入れされている。5は本体1石、台石2石の計3石から成る。石材は凝灰岩で、本体は位牌形を呈する。本体正面に「寛政二～　㊞尼？秋月禅定尼　九月三日」の刻字があり、刻字内は墨入れされている。6は本体1石、台石1石から成り、台石には受け部が形成されている。石材は凝灰岩で、本体は位牌形を呈する。本体正面に「寛政九子？巳天早世幻香童子位　二月二十日」の刻字があり、刻字内は墨入れされている。7は本体1石で尖頭方柱形を呈する。石材は凝灰岩である。本体正面に「寶暦三□西天　○眞空涼國？禅定門　七月粗？日」の刻字があり、刻字内は墨入れされている。

1号墓坑 (図86)

調査区東側の斜面際に位置する墓石と供養塔に伴う墓坑である。西側が墓石1、東側が供養塔2で、南に正面が向く。墓石1は本体1石、台石2石の計3石から成る。墓石本体には枘がないが、台石には墓石形の受け部が形成されている。石材は凝灰岩である。墓石の形式は位牌形で、本体の規模は高さ55㎝、幅24㎝、厚み17.5㎝を測る。本体正面には「文化十酉年　俗名釈僧現正定位　九月廿七日」の刻字がある。刻字内は墨入れされている。供養塔2は本体1石、台石2石の計3石から成る。石材は凝灰岩で、本体には枘がないが、台石には受け部が形成されている。本体は位牌形を呈し、規模は高さ49㎝、幅22㎝、厚み18㎝を測る。本体正面に「文化十一乃天　南無阿弥陀佛　九月廿八日」、側面に「攸？八郎」の刻字がある。刻字内は墨入れされている。墓坑はＡＴ火山灰風成層面で検出した。掘形の形態は隅丸長方形で、使用された棺は木製の方形棺と推定される。墓坑の規模は底面が長軸1.05ｍ、短軸0.43ｍ、深さ1.0ｍを測る。埋土下位より陶器皿や銭貨5枚が確認された。

出土遺物は図86に示している。665は唐津の陶器皿である。歪んだ口縁部を呈し、全体に透明釉を施釉するが口唇部には灰釉を口紅状に塗っている。17世紀後半のものと思われる。666～669は六道銭と思われる銭貨である。666は寛永通寶である。裏面には背合わせにもう一枚の寛永通寶が錆着し、毛髪と思われるものが付着している。667と668は寛永通寶、669は無文銭である。銭貨は裏、表、表、裏の方向で重ねられており、銭面は揃えられていない。

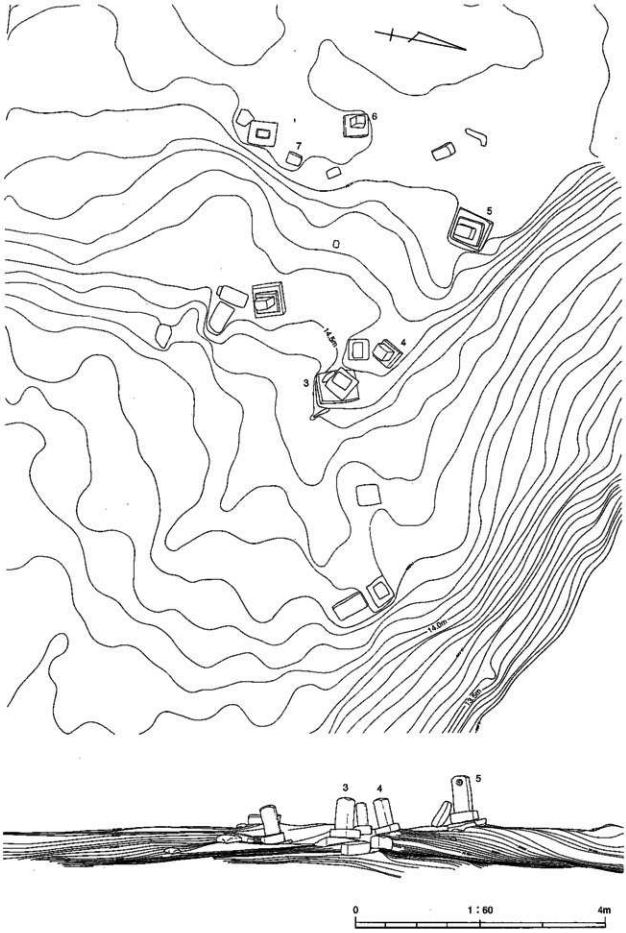


図85　D区近世墓群実測図

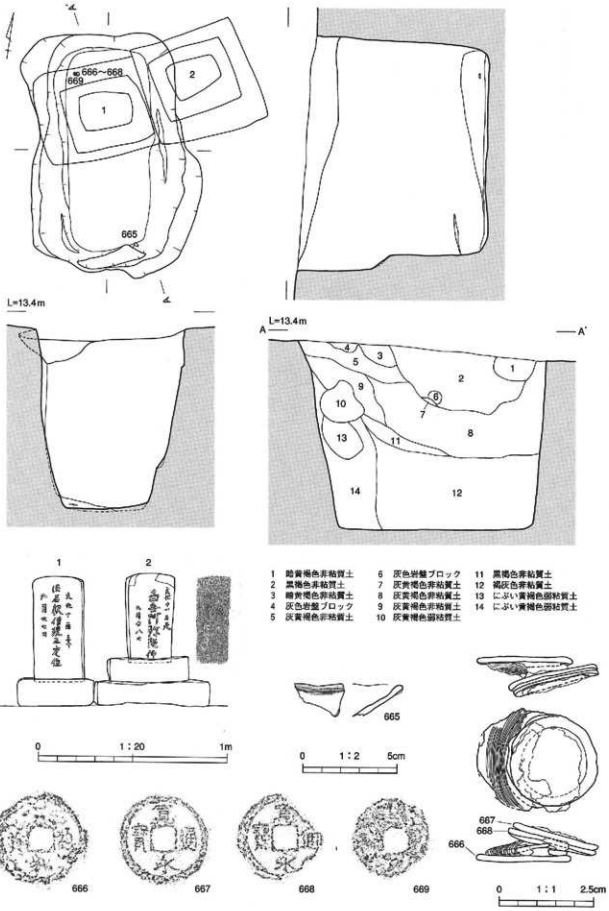


図86　1号墓坑及び出土遺物実測図

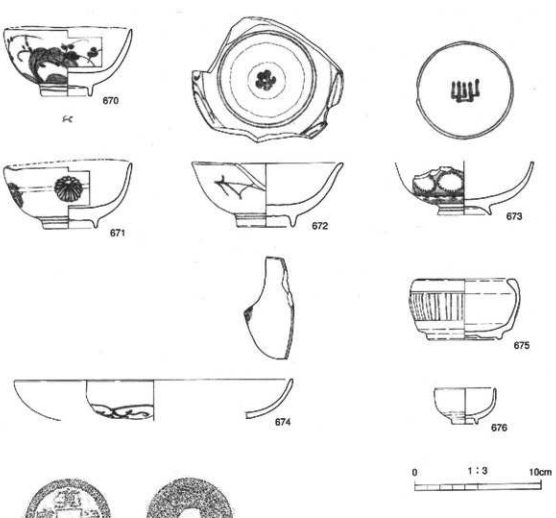


図87　D区遺構外出土遺物実測図（近世）及び遺跡出土銭貨拓影

遺構外出土の遺物

出土遺物は図87に示している。670と671は肥前系染付丸形碗である。670は外面に雪輪草花文を描く。底裏銘は「大明年製」のくずれたものか。18世紀後半～19世紀初頭。671は外面にコンニャク印判による菊花文が施文される。18世紀後半～19世紀初頭。672は肥前系染付端反碗で外面に折松葉文、見込み蛇ノ目釉剥ぎで二重圏線とコンニャク印判五弁花文、内面口縁部に連弧文帯が施文される。18世紀中頃。673は蓋付碗と思われる。高台が撥状に広がり、外面は雪輪文、見込みは二重圏線内に手書きで文様が描かれている。18世紀中葉～後葉。674は肥前系の中皿で口唇部に鉄釉で口紅を施し外面には唐草文を描く。内外面とも著しく貫入が入っている。675は青磁の火入である。蛇ノ目凹型高台でやや丸味のある浅筒形を呈する。18世紀中頃のものか。676は陶器小坏で白色釉を施している。

677は遺跡一括遺物の「寛永通寶」である。

第5節　石器

全調査区の遺構外出土石器を掲載する。遺構外出土の石器については時期を特定することが困難であるため、器種別に記述を行う。

出土遺物は図88～91に示している。678と679は石核である。678は剥離順序に規則性の見られない残核であるが、表面の剥離面を打面として剥離を行っている。石材は頁岩である。679はサイコロ状を呈する残核で利用石材は石英である。680～683は剥片である。680は片面に自然面が残る剥片で左側縁部に微細剥離が見られる。石材はチャートである。681は片面に自然面を残す砂岩の剥片である。682はホルンフェルスの縦長剥片である。683は頁岩で下部が欠損している。684と685は石庖丁で、684は両端に抉りをもつ。著しい研磨が施され両刃を形成する。石材はホルンフェルスである。686と687は頁岩製の板状砥石である。688は砂岩、689は凝灰岩の磨石である。690は砂岩を利用した凹石である。691～700は棒状及びやや扁平な縦長礫を利用した敲石である。石材は全て砂岩である。敲打痕が表裏側面と長軸端部にあるもの（691～693）、長軸端部に敲打痕がないもの（694～700）がある。701と702は短軸断面形が三角形を呈するもので表面に擦痕が見られる。石材は砂岩で砥石としての利用が考えられる。703は両面に擦痕をもつ台石である。石材は砂岩である。

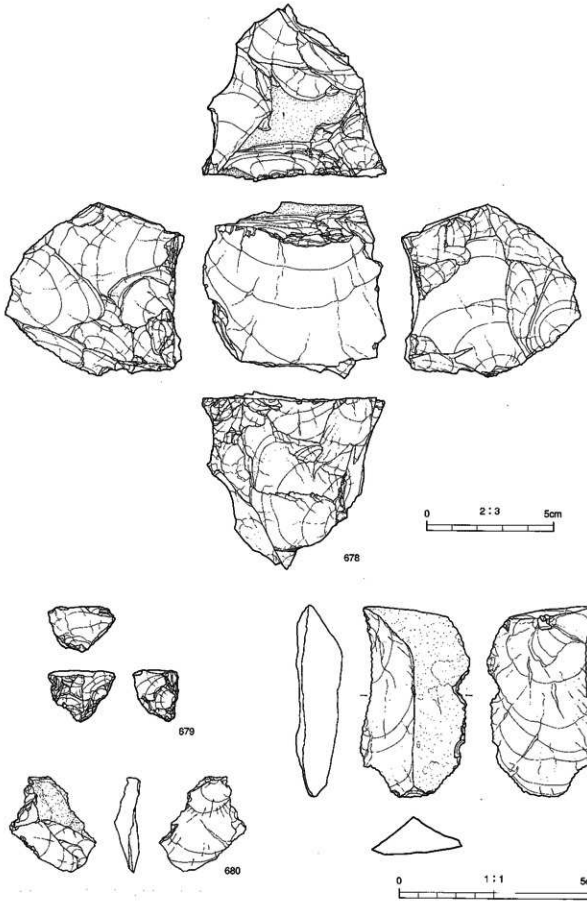


図88 石器実測図（1）

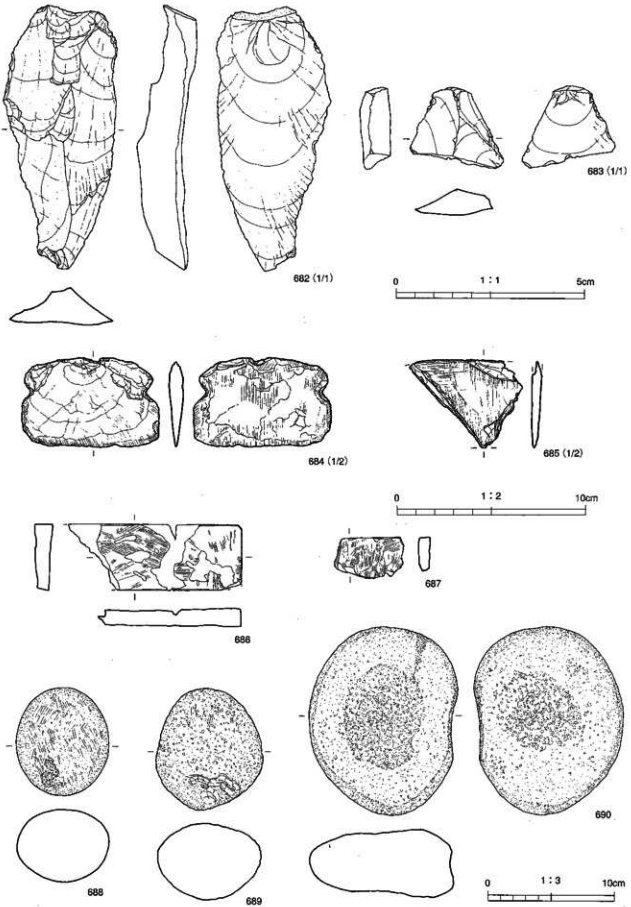

682 (1/1)
683 (1/1)
0 1:1 5cm
684 (1/2)
685 (1/2)
0 1:2 10cm
686
687
688
689
690
0 1:3 10cm

図89　石器実測図（2）

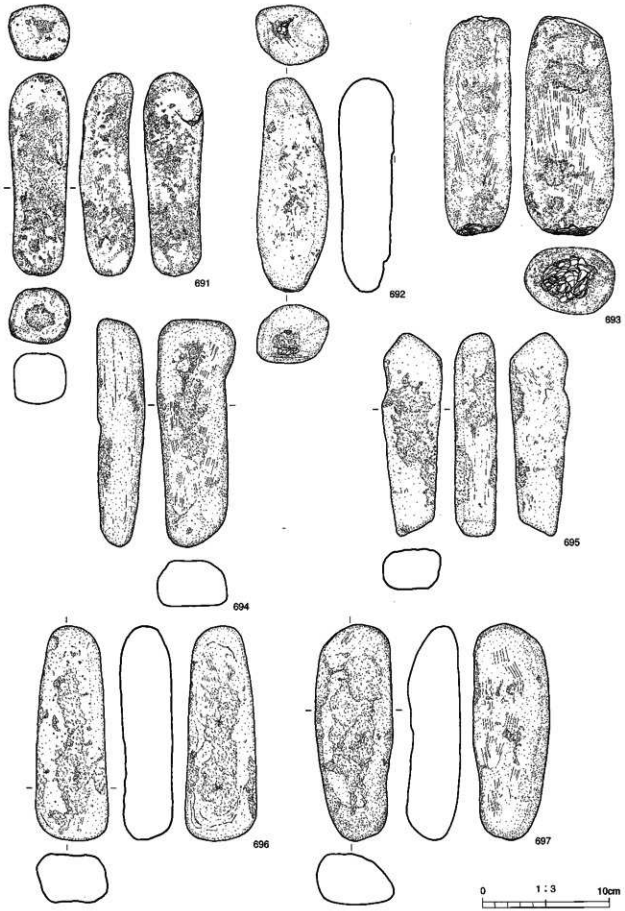


図90　石器実測図（3）

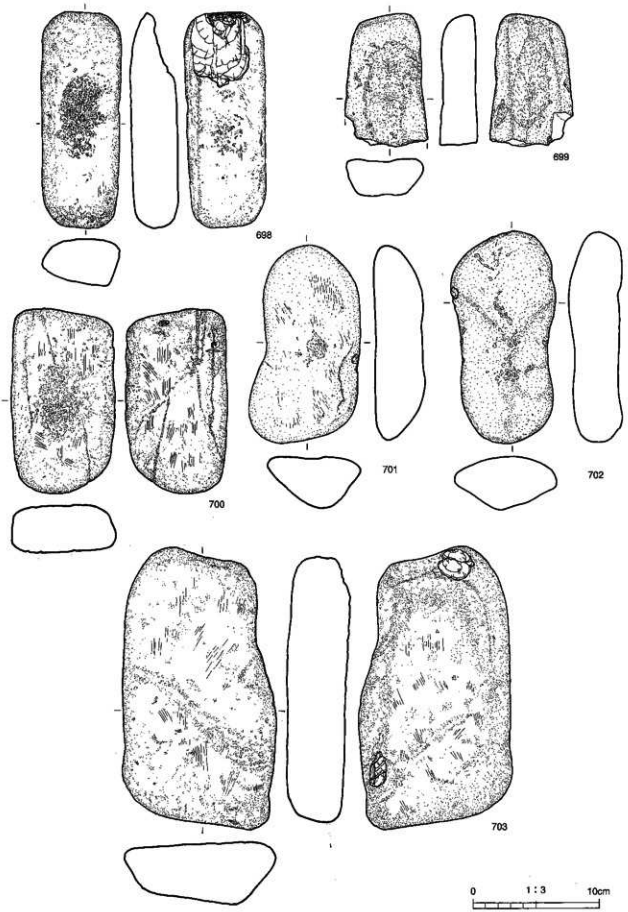


図91　石器実測図（4）

第Ⅳ章　まとめ

枯木ヶ迫遺跡では、縄文時代から近世までの遺構・遺物が出土している。古墳時代中期を中心とする集落が営まれ、古代以降は緑釉陶器、輸入陶磁器など外来系の遺物が出土しており、交易の要衝として発展した遺跡と考えられる。また、中・近世の石塔群、近世墓も確認され、近年まで地域と深い関わりを持った遺跡といえよう。以下、今回の調査結果について簡単に述べ、まとめとしたい。

古墳時代

古墳時代に属する遺構は竪穴式住居跡14軒（ＳＡ１～５・７～15）、土坑１基（ＳＣ５）である。遺物は甕、壺、高坏、坏、鉢、椀などが出土している。出土遺物の編年によって住居の時期分類を行い、住居形態も含めて当遺跡における古墳時代集落の変遷をたどってみたい。

住居の時期は次の４期に分けられる。Ⅰ期：前期末～中期前半（ＳＡ２・３・４・12・13）、Ⅱ期：中期後半（ＳＡ１・５）、Ⅲ期：中期末～後期初頭（ＳＡ７・８・10・11？）、Ⅳ期：後期後半（ＳＡ９）である。

Ⅰ期　前期末～中期前半（ＳＡ２・３・４・12・13）

甕は、胴部上位がやや張るものと胴部中位に胴部最大径を持つものとがある。口縁部は屈曲して外側に開き、口辺部が長く、内湾するものも見られる。底部は尖底気味丸底か小さな平底を呈する。器面調整はナデで、工具痕も見られる。壺は、球胴形及び卵形を呈する直口壺や二重口縁壺があり、底部は丸底や平底である。ＳＡ13出土の丸底壺（192）は小型丸底壺の系譜が考えられる。高坏は坏受け部が浅いものと深いものとがある。脚柱部はやや膨らみを持ってエンタシス状を呈する。ＳＡ４・13は小型丸底壺（44～46・193）を出土する。小型丸底壺には平底のもの（194）も見られる。この時期に属する資料は、宮崎学園都市遺跡群・宮崎市熊野原Ｃ地区遺跡ＳＡ７や新富町八幡上遺跡３号住居、新富町上薗遺跡10号住居址が挙げられる。40・160・167・169の甕は、宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察(1)（1995）で吉本正典氏が提示した甕の分類において2－1型式、2－2型式に属し、布留式の新段階に相当すると考えられる。ＳＡ３と重複するＳＣ５は、口縁部の屈曲が明瞭で、小さな平底を呈する甕の様相から見て古墳時代初頭の年代が与えられよう。

Ⅱ期　中期後半（ＳＡ１・５）

甕は、口縁部屈曲がやや不明瞭な胴部上位の張る球形胴甕（51）がある。底部は丸底や平底を呈する。器面調整はナデで、粘土の継ぎ目を残すものもある。壺は球胴形や長胴形を呈する直口壺になると思われるが、頸部に貼付刻目突帯も見られる。底部は丸底気味平底である。高坏は、Ⅰ期と比べ若干坏の小型化が見られる。坏部は浅いものと深いものとがあり、脚柱部はやや膨らみのあるエンタシス状のものがある。裾部は碗状のもの（62・63）とラッパ状に開くもの（65・66・67）とがある。ＳＡ５は埋甕（51）を有することから６世紀前後の年代も考えられるが、62・63の高坏や68の小型丸底壺など古い様相の土器も見られるため当期に分類している。この時期に属する資料は新富町上薗遺跡で出土しており、上薗遺跡ではＴＫ208段階の須恵器を伴っている。

Ⅲ期　中期末～後期初頭（ＳＡ７・８・10・11？）

甕は、Ⅱ期に比べ口縁部の屈曲の稜が不明瞭となる。底部は平底を呈する。壺は、扁球形胴を呈する

もの（90）や頸部に貼付刻目突帯を持つもの（146・147）が見られる。高坏は、坏部が深く、細い脚柱部を呈し、裾部は屈折してラッパ状に大きく開く。椀は口縁部が内湾する（98・119）。これらの特徴を有する土師器は共伴する須恵器坏蓋の形態からＴＫ23～ＴＫ47段階に併行すると思われる。

Ⅳ期　後期後半（ＳＡ９）

この時期の住居は１軒であるため資料が少ない。須恵器坏身を模倣した椀（139）が出土している。このような形態の土師器は、上関遺跡でＴＫ43段階併行期からやや下る時期の年代観が与えられている。

各期の住居の形態及び立地について概観してみる。Ⅰ期は調査区北側の傾斜地を中心に立地する。平面プランは長方形で、平均床面積10～13㎡の小型住居と17～19㎡の中規模の住居が混在する。壁帯溝を持つものが認められる。Ⅱ期は調査区西側に延びる舌状丘陵地の北及び西向き斜面に分布する。平面プランは長方形で、壁帯溝や埋甕を持つものが見られる。平均床面積は15㎡と規模が集約される。Ⅲ期とⅣ期は調査区東側の尾根筋に集中する。Ⅲ期のＳＡ７・８は床面積30㎡を超え、ＳＡ10も約22㎡を測り、住居の規模が最大化する時期である。Ⅳ期のＳＡ９は推定床面積10㎡と小型化し、古代の住居ＳＡ６とほぼ同規模である。

埋甕を有するＳＡ５は、埋甕の初現が古墳時代中期後半まで遡る可能性をもつ住居である。今後、当該期における出土遺物と炉の形態についての更なる検討が必要とされ、資料の増加を期待したい。

古代

古代に属する遺構は竪穴式住居跡１軒（ＳＡ６）、溝状遺構１条（ＳＥ１）が検出されている。

古代の土器は、土師器、黒色土器、布痕土器、須恵器、緑釉陶器、越州窯青磁など９世紀後半から10世紀代のものが出土している。

土師器坏は、体部が直線的に延びるものまたはやや丸味を帯びるものがあり、須恵器の成形にみられる回転ナデ調整のものが多く認められる。底部に円盤状の粘土を貼り付ける円盤状高台や輪高台貼り付け時に生じると思われる花弁状圧痕も確認できる。土師器椀は出土量が少ないが、体部が直線的またはやや丸味を持ち、高台を有すると思われる。土師器皿の高台を持つものには輪高台と円盤状高台が見られる。土師器甕は底部まで確認できるものはないが、あまり張りを持たない胴部から口縁部が大きく外側に屈折する器形を呈する。外面と口縁部内面に刷毛状工具によるヨコナデ、胴部内面は縦方向の削り上げ調整の特徴を持つ。

黒色土器の坏は、体部に丸味を持ち口縁部が外反するものが多い。底部は平底、輪高台、円盤状高台が見られる。ほとんどが内黒であるが、284と285の坏は外面まで、382の皿は外面の体部上位まで黒色を呈する。

須恵器は、坏や椀の出土量が少なく、甕、壺を中心に出土している。隣りに位置する市位遺跡では、蓋・坏といった供膳形態を持つものが多く出土している。この出土器種の差異は何に所以するものであろうか。

緑釉陶器は、椀と皿が認められる。椀は軟陶と硬陶があり、口縁部が、端反りと直口のものがある。皿の底部が２点出土している。295は硬陶で圏線を持つ上げ底気味平底の削り出し高台を呈する。９世紀後半の山城系と考える。519は硬陶で輪高台を呈する。高台は削り出しと思われ、10世紀前葉頃の山城系と考える。

文字をもつ土器

文字の確認できる土器は土師器坏の424と黒色土器の445（墨書）、土師器坏の432・433・646（線刻）である。時期的には9世紀後半から10世紀前半頃のものと思われる。424は底部外面に「付？太」、445は体部外面に「ナ」？が認められる。445は「大」か「太」のどちらかが考えられる。432と433は底部外面に線刻文字が認められ、432は「太」、433は「大」か「太」が考えられる。646は底部内面に「人」？の刻字が見られる。県内で「大」や「太」の文字をもつ古代の土器は、宮崎学園都市遺跡群・宮崎市陣ノ内遺跡、同遺跡群・清武町赤坂遺跡、宮崎市余り田遺跡の「大」（墨書）、高原町立山遺跡の「太」（墨書）、高原町荒迫遺跡の「大」（墨書と刻書）等の出土が挙げられる。

C区ＳＥ１の出土遺物について

（土器）

まず土師器であるが、坏は口径12.7～14.0cm、底径6.4～7.8cm、器高3.9～4.7cmの値を示す。体部は直線的なものとやや丸味を持つものがあり、底部は全てヘラ切りである。椀は体部が直線的またはやや丸味を持つものがあり、輪高台を有する。皿は輪高台と円盤状高台を呈するものがある。須恵器の坏と椀についても土師器と同じ様相がみられる。403の高台付椀は、見込みにナデ仕上げの痕跡が顕著に見られ、黒色物の付着が確認できる。その他、土師器の甕、布痕土器、須恵器の甕、壺などの器種が認められる。

これらと特徴や器種構成が類似する資料として、高岡町蕨野遺跡土器焼成土坑出土遺物や宮崎学園都市遺跡群・清武町小山尻東遺跡１号竪穴住居出土遺物が挙げられる。小山尻東遺跡１号竪穴住居出土土器は、土師器坏・椀・甕、篠窯系須恵器、布痕土器、緑釉陶器皿、越州窯系青磁碗などで構成されており、篠窯系須恵器の年代観から10世紀前半とされている。蕨野遺跡土器焼成土坑出土土器は坏、椀、皿などがあり、９世紀後半の資料とされているが、円盤状高台坏が皆無であることから10世紀前半に位置付けられるのではないか(2)と考えられている。円盤状高台坏がみられないことと高台付皿（385）や高台付椀（403）の特徴については、特に蕨野遺跡土器焼成土坑出土土器に近似している。

（木製品）

木製皿が２点（409・410）出土している。県内における木製食器の確認例は少ない。全国的にも土器研究（土製食器）と比べて木製食器の研究は遅れており、これからの研究発展が期待される現状にある。その中で、日本食器史において、弥生時代開始期と中世開始期とに大きな転機があり、その間にかなり特徴的な木製食器と土製食器の関係が存在している(3)ことが述べられている。食器様式には、基本的に、Ａ：素材の性質を生かした、形・装飾を採用する。品質と量の関係はピラミッド型をなさない。Ｂ：素材を越えた写しの関係を作る。品質と量の関係がピラミッド型をなす。の二つの型があることを提示し、弥生変革はＡ主Ｂ従からＡ従Ｂ主へ、中世変革は逆にＡ従Ｂ主からＡ主Ｂ従への変化としている。ＳＥ１出土の木製皿は、共伴する土器から見て10世紀前半頃のものと思われ、ちょうどＢ型様式の時期にあたる。共伴土器の385・386や遺構外出土の452・453の皿との写しの関係が推測される。

中世

中世に属する遺構はＡ－①区検出のＳＣ３があり、遺物としては土師器、須恵器、白磁、青磁、滑石製石鍋等が出土している。

土師器に小皿の出現が認められる。Ａ－①区検出のＳＣ３からヘラ切り底を呈する小皿と玉縁口縁の白磁碗が出土している。白磁は大きな玉縁で、Ⅳ類に属する。ＳＣ３の性格は不明であるが、規模から

見て土壙墓の可能性も考えられる。

白磁には碗と皿がある。碗は口縁が玉縁のものと直口のものがある。玉縁が小さめのものもあり、若干の時期差は考えられるが、ほとんどがⅣ類に属すると思われる。皿は15～16世紀頃に位置する端反り口縁のものが確認できる。土師器の**457**や須恵器の**293・513**は玉縁口縁を呈するが、白磁の模倣が考えられる。

青磁は、碗、皿、瓶が見られる。**535**は同安窯系の碗で11～12世紀頃のものと思われる。**536**は瓶で、時期は不明であるが、釉調が越州窯系青磁碗の**525**と似る。碗は口縁が玉縁、端反りのものが確認できる。**299**は龍泉窯系端反り青磁碗で外面に鎬連弁文を持つ。13～14世紀の年代が与えられる。皿は口縁が直口のものと端反りのものが見られ、**540**は見込み中央に釉剥ぎが見られる稜花皿で、15世紀頃のものと思われる。

石塔群について

元号の確認できるものは、板碑の**305**と**306**である。**305**は「天正」（西暦1573～1591年）、**306**は「慶長八」（西暦1603年）の墨書が確認でき、石塔群は中世から近世のものであることが解る。一番古い石塔は、年号と薬研彫りで梵字が刻まれるなどの石塔の形態からも**305**の板碑と思われる。

近世

近世墓について

前述したように、近世墓については墓石調査を正確に行っていないため、写真などの記録から解る範囲での報告となる。

墓石の元号と被葬者性別は次のとおりである。

墓石1	文化十酉年	（西暦1813年）	成人男性
供養塔2	文化十一	（西暦1814年）	
墓石3	天保十巳□羊	（西暦1839年）	成人男性
墓石4	天保七□午	（西暦1836年）	成人女性
墓石5	寛政二	（西暦1790年）	成人女性
墓石6	寛政九子？巳天	（西暦1797年）	幼児男性
墓石7	寶暦三□酉天	（西暦1753年）	成人男性

西暦1753年から1839年の年代幅からおおよそ86年間の墓地利用が確認でき、戒名から宗派は禅宗であることが解る。

《参考文献》

（1）吉本正典「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察～須恵出現以前の資料を中心として～」『宮崎考古第14号』宮崎考古学会 1995

（2）「寺崎遺跡～日向国庁を含む官衙遺跡～」「国衙跡保存整備基礎調査報告書」宮崎県教育委員会 2001

（3）宇野隆夫「木製食器と土器食器 ～弥生変革と中世変革～」『古代の木製食器 ～弥生期から平安期にかけての木製食器～』《第Ⅰ分冊 発表要旨》埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1996.3

表2　縄文土器観察表

遺物番号	出土地点・層	器部（復元径cm）	文様	調整	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
1	A-①区 SA13	深鉢 胴部	外面に縦方向の貝殻刺突縄文	外面は横方向の貝殻条痕 内面はナデかナズリ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の無色透明光沢・灰白の粒 微細な黒褐粒	
2	A-①区 SA8	深鉢 底部	外面に縦方向の貝殻刺突縄文	外面は横方向の貝殻条痕 内面はナデかナズリ 風化著しい	にぶい橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰白粒 微細な無色透明光沢粒	
3	A-①区 J16Ⅳ層	深鉢 口縁	外面に横方向の貝殻刺突文 突帯上方にヘラ状工具による連続刺突文	外面は横方向の貝殻条痕ナデ 内面は横方向のナデ	にぶい褐 暗灰黄	にぶい褐 暗灰黄	1mm以下の灰白・黒光沢の粒 微細な光沢粒	波状口縁
4	A-①区 J15Ⅲ層	深鉢 口縁	外面に横方向の隆帯文と貝殻刺突文 口縁端部に形文	外面はナデ、貝殻条痕 内面はナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	1mm以下の浅黄粒 0.5mm以下の黒光沢・無色透明光沢の粒	波状口縁 外面にスス付着
5	A-①区 K15Ⅲ～Ⅳ層	深鉢 口縁	外面にやや斜方向の沈線文と貝殻刺突文	外面は条痕の後ナデ 内面はやや斜方向の貝殻条痕の後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	0.5mm以下の黒・浅黄の粒	波状口縁
6	A-①区 K15	深鉢 胴部	外面に横方向の沈線文 胴部刺突沈線文　貝殻刺突文	外面は横方向のナデ 内面は斜方向の貝殻条痕	橙	にぶい橙	0.5mm以下の黒光沢粒 1mm以下の灰白粒 微細な無色透明光沢粒	
7	A-①区 I 15Ⅲ層	深鉢 胴部	外面に斜方向の貝殻刺突文	外面は横方向のナデ、貝殻条痕 内面は斜方向の貝殻条痕 風化著しい	にぶい橙	にぶい橙	微細な無色透明光沢粒 0.5mm以下の黒光沢粒 1mm以下の灰白粒	
8	A-①区 K15Ⅳ層	深鉢 口縁 胴部		外面は斜方向の貝殻条痕 内面は横方向の貝殻条痕の後ナデ、ナデ	明赤褐 にぶい黄橙	明赤褐 にぶい黄橙	1mm以下の浅黄透明粒	外面にスス付着
9	A-①区 K15Ⅳ層	深鉢 口縁		外面は斜方向の貝殻条痕 風化著しい 内面は斜方向の貝殻条痕	明赤褐	にぶい黄橙	1mm以下の透明・浅黄の粒 1mmの透明光沢粒	
10	A-①区 D15Ⅳ層	深鉢 胴部		内外面とも斜方向の貝殻条痕 風化気味	暗赤褐	明赤褐	微細な黒褐粒 1mm以下の灰白粒 3mm以下の灰黄粒	外面にスス付着
11	C区テラス Ⅲ3	深鉢 胴部	外面に横方向の沈線	内外面ともナデ	橙	にぶい橙	1mm以下の無色透明光沢・灰白の粒	

表3　土器観察表（1）

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	口径	底径	器高	法量(cm)	手法・調整・文様ほか 外面	手法・調整・文様ほか 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
12	土師器	甕　胴部～底部	A-①区 SA1				(8.9)	ナデ スス付着	ナデ、粘土のつなぎ目 炭化物付着	にぶい橙 黒 にぶい黄橙	にぶい橙 灰褐	3mm以下の褐・赤褐・黒褐の粒	
13	土師器	甕　胴部	A-①区 SA1					刷毛目状工具痕 ナデ	ナデ 横位刷毛	黄橙	黄橙	2mm以下の灰白粒 4mm以下の褐灰粒	
14	土師器	壺　底部	A-①区 SA1					ナデ、風化気味	ナデ　黒変 風化気味	橙	にぶい橙	微細な透明光沢粒 4mm以下の褐粒	
15	土師器	高坏　坏部	A-①区 SA1				(20.0)	ヨコナデ、縦方向のミガキ 黒変	ヨコナデ、ナデ	橙	明赤褐	0.5mm以下の黒・褐の粒	同一個体
16	土師器	高坏　脚部	A-①区 SA1				(11.7)	縦方向のミガキ後下寄なナデ、 ヨコナデ	ヨコナデ、指頭痕 軟上のしぼり	橙	橙	色粒顕か	
17	須恵器	坏蓋　天井部	A-①区 SA1					ヘラケズリ、ナデ	ヨコナデ	暗灰	灰	精良	
18	土師器	鉢　口縁～胴部	A-①区 SA2				(20.6)	横・斜方向のナデ スス付着	横・斜方向の工具ナデ、横方向の ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰・赤褐の粒	
19	土師器	壺　底部	A-①区 SA2					ナデ 指頭痕	ナデ	にぶい黄橙	オリーブ黒	1mm以下の褐・無色透明の粒	
20	土師器	壺　口縁～胴部	A-①区 SA2				(14.8)	横・斜方向の工具ナデ 指頭痕、黒変	横方向の工具ナデ 指頭痕	浅黄 灰	浅黄	1mm以下の灰白・半透明の粒 2mm以下の褐粒	
21	土師器	壺　胴部付近	A-①区 SA3					ナデ 黒変	ナデ 黒変	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な無色透明光沢粒 1mm以下の灰白粒 3mm以下の黄褐粒	